

保存用
永久保存

Leçoeuy

No. S - 68

東京都立松原高等学校図書館

15





Green Room

体 育 祭



マラソン大会





15



落語研究部



目 次 — 第十五号

卷頭言……怒り“からの出発…………ル・クール編集委員会 4

一言……………校長 井上速雄 6

松高三六五日……………

後期生徒会役員選挙…………… 8

社会科学研究部…………… 10
生徒会レポート…………… 12

我がクラス……………

【特集】ホーム・ルーム……………

46

1 プロローグ

2 ホーム・ルームの本質

3 ホーム・ルームの現状分析

4 ホーム・ルームの運営上の問題点とその解決策

5 ホーム・ルームへ各人どう臨んだらよいか

エピローグ

32



創作

おおかみその後……………

郎

人の子への祈り……………

悶

次郎……………

朗

詩苦……………

悶

白い朝……………

朗

女流詩人……………

朗

心の休み場……………

悶

過ぎ去……………

悶

万歳!!学力テスト中止……………

は

樂しみは……………

は

今後のル・クールについて……………

は

編集後記……………

記

「怒り」からのお出発

ル・クール編集委員会

私たちたちは十七年という年月の間にいろいろなことを吸収して成長してきた。私たちの頭の中にはさまざまな知識が充満している。三角関数、質量不变の仮説、鎌倉幕府成立の年。原子記号、助動詞の活用、話法の転換。しかしそれはあくまで^タ知っていることであり実際には応用されていない。

私たちたちは中学の時代に沢山のアチーブメントテストを経験してきた。そして、テストを一枚やることにテクニックを身につけていったのである。

前置エンジン後輪駆動の自動車の動力伝達経路の正しいものを選ぶとき、選択肢の中に、エンジン→クラッチ→変速機……と書かれているのを見つけると、それを選び出す。他の三枝にこの三部分の配列の同じものがないときこれを即座に選択する。この三つが明らかに正しい順に並んでいるから、変速機から、さきどう伝達するかは考へない。私たちの知識はこのように断片的なものである。自分の頭の中にある知識の断片を探し出すことによってことは解決してきたのである。それが現在の生活に現われているのではないのだろうか。知識を紙に写し出すだけ生活にとりいれようとしない。知識を必要にせまられたときに紙上に現わすことしかしない消極的な私たちなのである。私たちは「書く」ということをおつくうがってしない。「書く」ということは自分のひころの思考を紙に表現することであるから、どうしても普段からものごとを考えていなくてはならない。すなわち私たちが「書く」ということは私たちが「考へる」とこと通ずるわけである。私たちたちは「書く」ということ「考へる」ということをしない。

私たちのまわりには考えなければならない問題が数多くある。松原の中にも多くの問題をかかえている。そして、それを解決する者は私たち自身なのだ。

風通しのいい教室、暗い照明など多くのことに不満を抱いていながら、それを訴えようとはしない。それらの不満を自己流な解釈に立った手段で解決してしまう。それらの生徒の不満の処理をすることも生徒会の一つの仕事であろう。しかし、個人、個人同じような不満を持ちながら、それが一つの流れにはならない。総務はそれがつかめず空回りするばかりである。そして、私たちたちは「生徒会は何をしているんだ。」と非難する。

三学期になつて総務は生徒会活動の動きを知らせよという会員の要望に答えて日刊の公報を発行した。しかし、それがどれだけ徹底しただろう。私たちたちは総務の活動をどれだけ知つただろう。

ベトナムでは日にに戦闘は激化し中国では文化大革命が混沌としたうちに進んでいる。国内では黒い霧が世状を騒がせた。いずれも明らかな事実であり否定のしようのないものである。が、私たちたちはそれに一向に目をむけない。学生はこれらの社会問題は論ずべきでないという迷信を信じきっている。しかし社会は私たちをも含めて構成されている。しかも、私たちたちはそれらを考えないからといって社会の運動から除いてくれるわけではない。私たちたちはこの地球上に生きている。その自分の社会を知りたいと思う気持ちは自然のものではないか。

私たちたちは十七年の間に多くのことを吸収してきた。小学校のころ、学校で教わったことを家に帰つてさつそく真似してみたこともあった。そうした積極的なところはもはやない。そして、いつのまにか消極的で受動的な人間になつてしまつた。自分に関係のないことは口を出さない打算的な私たちもある。そして、石炭をちよろまかそうと、土足で教室にあがろうと私たちはそんなことに罪悪感を感じないのだ。私たちはよいことも悪いことも現在の生活をすべて黙認している。私たちは不正に対して「怒り」を抱くことさえ忘れている。若者の熱血果敢な姿などみられない。

私たち若者はいつのまにか消極的で受動的な「沈黙する世代」になつてしまつた。忘れ去つた「怒り」をとりもどし「沈黙」の殻をうちやぶり、若さの底にあるものを求めて大きく前進しよう。

校長井上速雄

本校に着任して「ル・クール」に文を寄せる事、この度で五回になる。それにつけて、ル・クールは本校生徒諸君が自分の作品を自由に発表出来る機関雑誌であるのに、割合に利用されていないように思われる。

ル・クールが渡されて、これを一通り読んでしまう人が果して本校の生徒の中で何人いるだろうか。さびしい感がする。

中にある記事を一番よく理解をもって、読んでくれるのは、同じ仲間の生徒諸君自身である。またそこに批判が出て比較がなされて、書いた者も読んだ者にもお互の成長が助長されることにもなる。

同じ考え方であるときはそれなりに誤りでないの自信を深め、著しい差がある時大いにやらねばならぬと励みを出す場合もある。また詩や歌、隨筆、論文等の作品を通して、心を通じ、思想の交流の場ともなる。

そういうことであると、ル・クールが年一回の発行では少ないとも云える。しかし、これには、予算や、その他色々な事情で現在は早急に実現することは難しいことであろうらか段階をふんでやって行くことである。

問題になることは、今のように投稿者が少なくて原稿集めに苦労するようではル・クールの質が落ち、貧弱なものになる、きらいがある。

とにかく、面白くても、なくとも、全校生がまず読んでやること、つぎに批判してみることである。その次に大事なことは松高在学三年間に、誰でも、一度、なんでもよいから、投稿する位の意気込が欲しいものである。人の書いたものを何とか、かんとかいうことは大変やさしい。

それは決して悪いことではないが、むしろ良いことであると思うが、自分もやってみることで、足が地についた批判が出来るのである。

『われわれは考えていることを実際に書かねばまらないものでそれは妄想になる場合が多い。

自分の考え方を整理することは大変よいことである。大いに投稿すべきである。生徒諸君の作品を全部載せることは良いものもありわるいものもありその他色々のことと事実困難であろう。私は意氣込といったのはその意味であるが、そうなれば当然集まつた中で選択せねばならぬことになる。そうでなくては内容の充実した良いル・クールは出来ないであろう。

現在のように、原稿集めに苦労しているようでは程遠い話といえる。それとは別に最近のよう社会が騒がしくて、毎日の生活が多忙になると、われわれは一人で静かに物を読み、自分の考え方を整理して、書いてみると、段々少なくなつて来ているように思われる。集団中の生活が大変多く、それに引きづりまわされているこういう世には、静かに考えて見ること、文章に書いてみると大変よいことであり、またその意味からもル・クールに発表することを大いにすすめる。もちろん私は商業雑誌のような形の整つたものであることをル・クールに望んでいるのではない。そのことは色々な点からして、要求しても無理なことである。

たびたび言つているように諸君の考え方の整理となり、たがいに相通じあうよう、心と心と結び会い友情をかもしだすようにル・クールがあつて欲しい。もしも数ある作品の中で、一つでも、将来立派な作品が作られる系口になるものがあれば、ル・クールに相当額の金が使われるが惜しくはない。

今年度千倉に臨海の寮を予定しているがもちろん、それはデラックスなものでない、最少の金でと心掛けている、夏期の臨海の訓練で、泳げない者が泳げるようになり、長い生涯中水の事故から救われたとすれば、二~三百万円の金は高いものではない。そんな事故はありえないと誰が簡単に言えるだろうか、教育とはそういう先のことも考えねばならぬ面を持つてゐる。同様のことがル・クールにも云える。生徒会雑誌や校友会雑誌に育ぐくまれて今日知名の作家が多数出していることも事実である。本校にもそのようなことが言えるようになれば、その時、私は、そこに無上の喜びを感じるのである。

よいル・クールが出来るには編集員の態度が大切であると思う。例え原稿が少なくとも、そのままのせることは一考を要する。興味をそそるゴシップ本位の品の悪い週刊誌にあるような記事は学校の雑誌としてはさけるべきである。ル・クールの内容についても責任をとる氣位でやつてもらいたい。



後期生徒会役員選挙

後期の生徒会役員選挙は昨年の九月下旬に行なわれた。選挙が公示された日から立候補届出しきり日までにはかなりの日数があるが、その期間中には、結局立候補者は一人しか出ず、この事態によって届出しきり日は数日間延期され、その日までにさらに五人の候補者が出了。

松高では、昔から生徒会役員の改選がある度に、選挙関係等の人々が東奔西走して立候補者を見つけ、苦心して役員のポストにまつりあげ、なんとか生徒会を存続させてきたといつた感が強い。

今回立候補した人達も、松高生徒会の危機

が叫ばれる中で、重いみこしをあげて立上がりたキドクな方々ばかりだ。

それは一体、このようなわびしい選挙の原因は何だろう。

第一に松高の現在の選挙規則が考えられる

この規則では、一人の人間を周囲でいくら推薦しても、本人の出馬意志がなければ立候補は成立しないのだ。これは民主的な精神に基づくものらしいが、松高の現状を考えれば、明らかに理想主義的であり再検討が必要なのではないだろうか。

第二に、役員を含めて生徒会総務の負担が大きいくことである。彼らがやらなければならぬ仕事の量が多い。そのため彼らの自由時間は少くなり、勉強時間も制約されてくる

四十一年四月

始業式。大掃除。

九月一日

入学式。

十一月一日

対面式。

十八日

二年身体検査。

十九日

三年身体検査。

二十九日

一年身体検査。

二十七日

新入生歓迎会。

二十八日

映画会「原爆の子」

五月一日

定期生徒会始まる。三年、城ヶ島

二十日

臨時生徒総会。

五月一日

第一回美力テスト。

六月一日

中間テスト始まる。

二十八日

オペラ鑑賞。

六月一日

落研発表会。

十四日

弁論大会。

十五日

定期生徒総会。

二十二日

一本松の会。

二十三日

実力テスト。

二十四日

合宿。

七月一日

期末テスト始まる。

八月一日

修学旅行東北。

九月一日

体育祭。

十月一日

修学旅行南紀。

十一月一日

中間テスト始まる。

二十二日

臨時生徒総会。

二十八日

二十九日

演劇鑑賞会「夕鶴」

あまり仕事をやりすぎると、彼らの学生としての生命さえ危なくなる可能性がある。こういった面で、生徒会総務になるということは一種の犠牲的行為だつても過言ではない。このへんの問題も再検討してみる必要がありそうだ。

第三に、これは最も重要なことだが、我々生徒会員自身の問題である。我々の生活を勉強という面から考えれば、我々は、「やる」という意欲に乏しく、やり始めても気力が続かないのですぐあきてしまう。大部分のものがクラブ活動にも参加せず、早く家に帰つたからといって受験のことが気がかりで、特別ハデに遊ぶわけでもなく、また真剣に勉強と取組むわけでもない。毎日毎日を学校の授業に追いかれ、宿題が出来ば、アンチヨコを参照してお茶をにごす。我々は毎日毎日を中途半端な、惰性的な生活をしているのにすぎない。我々は勉強以外の面においても大体がそうである。それは学生生活において、我々の学問の成果が、我々の生活態度を示す一種のバロメーターであるからだ。

我々が、このような惰性的で無気力な学生生活を変えようとしたい限り、何事も改善されはしないだろう。後期生徒会役員選挙が、

が叫ばれる中で、重いみこしをあげて立上がりたキドクな方々ばかりだ。

それは一体、このようなわびしい選挙の原因は何だろう。

第一に松高の現在の選挙規則が考えられる

この規則では、一人の人間を周囲でいくら推薦しても、本人の出馬意志がなければ立候補は成立しないのだ。これは民主的な精神に基づくものらしいが、松高の現状を考えれば、明らかに理想主義的であり再検討が必要なのではないだろうか。

第二に、役員を含めて生徒会総務の負担が大きいことである。彼らがやらなければならぬ仕事の量が多い。そのため彼らの自由時間は少くなり、勉強時間も制約されてくる

四十一年四月

始業式。大掃除。

九月一日

入学式。

十一月一日

対面式。

十八日

二年身体検査。

十九日

三年身体検査。

二十九日

一年身体検査。

二十七日

新入生歓迎会。

二十八日

映画会「原爆の子」

五月一日

第一回美力テスト。

六月一日

中間テスト始まる。

二十八日

オペラ鑑賞。

六月一日

落研発表会。

十四日

弁論大会。

十五日

定期生徒会始まる。三年、城ヶ島

二十日

臨時生徒総会。

五月一日

新入生歓迎会。

二十八日

映画会「原爆の子」

五月一日

第一回美力テスト。

六月一日

中間テスト始まる。

二十八日

オペラ鑑賞。

六月一日

落研発表会。

十四日

弁論大会。

十五日

定期生徒会始まる。一本松の会。

二十三日

一本松の会。

二十四日

実力テスト。

七月一日

定期生徒会始まる。

二十一日

臨海始まる。

二十二日

一本松の会。

二十三日

実力テスト。

二十四日

合宿。

八月一日

期末テスト始まる。

八月一日

修学旅行東北。

九月一日

体育祭。

十月一日

修学旅行南紀。

十一月一日

中間テスト始まる。

二十二日

臨時生徒総会。

二十八日

臨時生徒総会。

「静かにしろよ、何だかよくわかんねえか」とよ、クラス訪問とかいうのらしいや。」

「ふんそうか、関係ねえや。」

「だいたい何の為にやつてんだ?」

「さあ、知らないわ。」

こんな具合で後の方の人には全く興味がわからないらしい。しかし前の方では結構討論が進み、質問、意見等が、ひっきりなしに続く。

まあまあ活発なクラスの方であろう。総務の人達は割りに満足そうな顔つきをしている五人とも、ああうまく舌が回転するものだと感心せざるを得ない答弁のしかたである。

しかし、やはりクラス全体いや全校生徒の関心を向けさせるのは、かなり、むずかしいのである。諸君も少し耳を傾けてみてはいかが?

社会科学研究部

我々松高生は、一般に社会に対する認識が浅いと言われている。換言すれば、我々は太平ムードにひたりきっているのだ。我々のこのような状態は、必然的に社会に対する考え方の甘さを生む。これらは、学生でしながら真剣に勉強しようとする松高生、生徒会活

我々学生もに關係が深いし、我々が一度位は考えてみてもいい事柄だろうから、社研の部員達が研究課題を選択する際の態度は、比較的賢明であったと言えよう。しかし、社研がとりあげるべき課題は、もっと身近にもありそうだ。たとえば定期制高校に関する問題等がそうである。これからは、我々の周辺にある課題もとりあげるべきだろう。

社研部員達の「自分達で社会現象を研究しよう。」「知識を吸収しよう。」「自分達を進歩させよう。」という態度は仲々いいし、ケチのつけようもない。そこには右だと左だとという固執した考え方もないようだ。このような事を考へると、以前からある社研に対する偏見は間違っていたのだろうか。

社研は最近、徐々に部員も増え、活動も活発化し、長い間続いた不活発な状態から脱出しつつある。そして社研の活動に注目している人々の期待を裏切らないように、力強く發展していくほしい。



動に关心のしない松高生、人間関係の微妙さを知らず進んで礼儀を心得しようとしない松

高生の態度に表われている。それはそして松

高生が日頃読んでいる書にも表われている。

松

高生

が

読

み

が

読

み

が

読

み

が

読

み

が

読

み

が

読

み

が

読

み

が

読

み

が

読

み

が

読

み

が

読

み

が

読

み

が

読

み

が

読

み

が

読

み

が

読

み

が

読

み

が

読

み

が

読

み

が

読

み

が

二月	一日	年末考査始まる（三年のみ）	二月	一日	マラソン大会。
二月	九日	始業式。	二月	七日	文化祭。後夜祭。
二月	十日	公聴会。	二月	八日	実力テスト。
二月	二十四日	終業式。	二月	十一日	開校記念日。
二月	二十五日	スキーリース始まる。	二月	十二日	臨時生徒総会。

生徒会レポート

前期生徒会長

鈴木俊一

今年度前期の生徒会の活動の山場として、毎年空転りに終っていた規約改正があった。これは自治委員会に於ては否決されたが、原案作成までこぎつけた。他に、オリエンテーション・一本松の会・四十一年度予算案作成等いろいろあった。私たち総務は、これらの事を通しても、会員の皆さんと和解しようとしたのだが、後期役員選出の、あの状態になってしまった。

生徒会総務は、一般に会員から浮き上がっているとよく言われる。事実その通りだと思った。また、会員が生徒会の事を考えないというのが普通のようになっている。しかし、それは私たちの一方的な見方であったと思う。

私たち、おそらくまでのこつて、そして頭をひねつて一つの事を考へ、また活動をする。でも、会員の皆は自分のしたい事をしている。ここに一つのエゴイズムというものが生じて来る。また、一方では、生徒会というのが普通のようになっている。しかし、それは私たちの一方的な見方であったと思う。

後期生徒会長
手嶋孝典

後期の生徒会総務は、数年来の懸案である規約改正の審査を前期総務から引き継いだ。

私自身は、前年度後期から、規約改正の審査に関係していたので、自治活動の問題点はこの基礎を固まらせて、私たちの手で一步で前進させようではないか。



1966年度

確実に擴んでいたつもりであった。しかし、規約を実践と結び付けて考へ、問題点を提起しその改善策を規約の条文に生かす作業ほど困難なものは無い。それを行うには、当然、現在の生徒自治の問題や自治活動のあり方を認識していかなければならない。審査を進めるのに障害となつたのは、規約と実践とを別々に切り離して考へる人が総務内にも多くいたという事実である。しかし、私達は、常に、規約改正を為す事が活動の目的では無いといふ事を確認し合い、最低それだけは見失わぬ様に努めて来た。

本格的な審査に入ったのは、試験休みからであつたが年内に殆んど草案が完成した。そして、三学期に入つてすぐ、公聴会を開き草案の大綱を発表して会員の意見を求めた。その後、総務会で正式に決定し、議案書も配付した現在、クラス討議を企画し、自治委員会、生徒総会の審査を受けるための準備を進めている。勿論、今度の草案が完全無欠なものではないし、公聴会での批判は、草案の基準と、本質的に異なるものでは無く、むしろ規約以前の問題としてとらえるべき性質のものが多かつた。

後期総務の任期が半分以上経過した現在、本線と、本質的に異なるものでは無く、むしろ規約以前の問題としてとらえるべき性質のものが多かつた。

自治委員会（前期）

停滞を続ける松高生徒会の中で、前期の自治委員会だけは、異彩を放つと言えよう。つまり、今までの幽靈委員会なる汚名を見事に返上したのである。

私は、低迷する生徒会を活発化するには、生徒総会に次ぐ議決機関である自治委員会を動かすことが必要であると考えた。それによつて、生徒会総務を突き上げようと思つたのである。まず最初に、持ちまわり採決など好い加減な方法を無くすため、三分の二以上の出席率確保に努力した。努力の甲斐あつて、三年生の出席率の良さと、清新な一年生の十割近い出席率に支えられて、定足数を確保することができた。

次に、自治委員会としての活動をするにあつて、保存されている会議録やその他の資料が極めて不備なために、今までの活動内容が詳細に知り尽くせなかつたことが問題となつた。しかし、そのお蔭で、私は自分なりに自治委員会のあるべき姿を考えることができた。つまり、生徒会規約と自治委員会運営規定の抽象的な表現を逆に利用して、私なりの

新しい解釈で委員会を運営したのである。

その結果、四十一年度予算案を活発な審議の末、否決するという前例の無い事態にまで達してしまった。総務にとって、予算案を否決されるということは、致命的であるし、予算案の否決により、総務を今までの甘い考え方から一転させるのに、かなり役立つたようと思える。

この様にして、委員会の機関誌等と併せて、徹底的に総務を批判した。思えば、会議の定足数を確保するのに、エネルギーの大半を費やした六か月間ではあつたが、後期になつてからは、委員長をはじめ委員諸君の努力によって、自治委員会が着々とその成果を挙げていることに期待したい。

自治委員会（後期）

前期において、各委員の出席率が非常に良くなつたが、やはり活動は受動的なものであつた。それに、委員達の結びつきもなかつたようだし又各ホーム・ルームとの結びつきもなく、委員会の活動内容も知られていないかつたよとだ。右のようなことは、自治委員会の性質上やむをえないことだと思われるが、現在の規約においての自治委員会の仕事の内容

なる。それではとても無理である。そこで、一年を通してこれにあたり、少数の負担の多い現在の編集方法を改善する。

本来の活動ができるように、来期のために準備していくつもりである。

図書委員会

図書室の利用規定は生徒手帳に書いてあるので、これを読めばわかることがあるが、特に皆に知られないことを書く。

○貸出、返却は原則として放課後のみに行なう。

○禁帯出図書、雑誌は午後四時三十分より貸出し翌日午前中に必ず返却する。

○室内にはカバンを持ち込まない。カウンターロッカーの鍵を借りてカバンを入れること。

が明確でないために、自分達では、何もできず結局、事務的に審議をしてしまうために、興味が、半減してしまうのではないだろうか。その結果として右の様な事が起きてくると思われる。

現在、自治委員会は、活動しているのにもかかわらず、比較的、楽な委員会だと思われている。これは先程も述べたように規約の問題もあるが、やはり、私はホーム・ルームに自治委員会といもうのが理解されていないということが問題だと思う。

そのために前年度まで言われていた出席率の低さということが生まれてくるようと思われる。今期においては、委員の出席率も良くなつたことだし、又、各自治委員もやる気をおこしているので、自治委員会としては、ホーム・ルームとの結びつきを考え仕事を行つていくつもりである。その具体案として、本会議の事前にホーム・ルームに各議題に對し質問及び意見等を出してもらいその結果を本会議に付すという方法をとっていく。その他には会報の発行等をして、委員会の内容を会員と一緒に考えていくよにしむけたい。

しかし、私個人委員長をしていて、自治委員会の仕事があいまいな為に仕事がやりにくくてみると、文化祭と、ル・クールの他には弁論大会と映画会を開いたのみです。

そこで、文化委員会では次の規約改正を提示した。すなわち、現在の文化委員会を文化委員会、文化祭執行委員会、生徒会誌編集委員会に分化し、現在の文化委員会の負担を軽くするのである。文化委員会は分化した二分野以外の仕事に専念する。文化祭執行委員会は四月頭初より、それだけにあたる。現在の委員会ではル・クールの編集は文化祭以後と

く、又、自治委員会の力というものが、非常に弱く、不自然であるということを感じるために、私は規約の改正ということを強く希望し、自治委員会、及び各常任委員会第の立場を明確にして欲しい次第である。

文化委員会

文化委員会の現在のおもな仕事は文化祭の執行と、ル・クールの発行である。この二つの活動が八割以上を占めている。文化委員会として活動すべきことはもつてあるのだが実際にには不可能な状態である。文化委員自身それがおわるとすべて責任を果したばかり活動しなくなる。事実、今年の活動をぶり返つてみると、文化祭と、ル・クールの他には弁論大会と映画会を開いたのみです。

そこで、文化委員会では次の規約改正を提示した。すなわち、現在の文化委員会を文化委員会、文化祭執行委員会、生徒会誌編集委員会に分化し、現在の文化委員会の負担を軽くするのである。文化委員会は分化した二分野以外の仕事に専念する。文化祭執行委員会は四月頭初より、それだけにあたる。現在の委員会ではル・クールの編集は文化祭以後と

○コピーは申し込み用紙に記入して提出すればコピーすることができる。

○テープレコード等の備品も利用できる。

○購入希望図書がある場合、それを書く帳簿も用意されている。

以上のことを守り、利用していただきたい。

図書委員会では一般生徒の連絡を密にする為に努力をしている。各研究会が催される時には、大きく宣伝をするつもりである。図書室を自分の部屋だと思って大いに活用していただきたい。

図書委員会では一般生徒の連絡を密にする為に努力をしている。各研究会が催される時には、大きく宣伝をするつもりである。図書室を自分の部屋だと思って大いに活用していただきたい。

H・R、これを皆の力で発展させ、いつでも君等自身が構成しているH・Rを君等自身で引っぱって行つてほしい。君等いつも君等の運んだ委員を、会長を、副会長を、自治委員長を監視していくほしい。そして総務で行なつてある事を注視し、自治委員に相談し、立派な生徒会にしてもらいたい。

だいぶ脱線してしまつたが、総務と会員を結びつけるものはH・Rである。H・Rを会員全体で考えて行きたい。

生活委員会

前期に於いては、風紀問題として服装問題、上下履の問題、遅刻の問題などの研究調査を行なつた。後期として、もう一つの問題、H・Rの研究調査という問題を、行なつて行きたい。さてこの問題に取り組んだ理由は、現在、一般会員と生徒会総務の間に深い溝がある様に思えるからである。後期四十一年度役員選出に於いても一人の立候補者が出来なかつた。また総会においても、くだらない質問をするか、又は全く質問の出ない時さえ

ある。もう三学期に入るというのに、今だに

保健委員会

「単なる保健の仕事に留まらず、かつ総務の力になり、かつ又、生徒の役に立つ保健委員会を作つていくように：」昨年の委員長が最後にこう残している。これを受け継いだ本年後期の委員長こと私。なにしろ委員長の経験など更々無し、いきなり委員長の座におさまつてしまつて、いささか面食らつた次第である。

ある。もう三学期に入るというのに、今だに

何もできないまま、昨年の委員長の残された言葉を背負うてうろうろしている。今年もまた、この言葉を残さねばならないのだろう。

か。前期の状態を、そつくりそのまま受けついで、次の代に渡すことしかできない私であった。

さて次に、委員長をしていて感じたことを

少し述べさせていただきたい。現在の私を含めた高校生——高校生だけではないかも知れないが——は、どういうわけだが、物事に強く感心を持つのが嫌いと見える。問題が与えられても、自らそれに取り組んで解決していくのは苦手といったのが多い。ところが答えがいくつかあって、その中から正しいのを選ぶとなると、お手のもの。そういう問題以外は、絶対無関心。戦後教育の素晴らしい成果と言えよう。われわれは非常に重大な危機に至っているのではなかろうか。しかし、それを感じている生徒は、争う事に減少しているようと思われる。外に対する無関心人間の大量生産だ。この問題がある以上生徒会の不調は続々、早急に何とかしなくては取り返しのつかない状態に突入するのではないかろうか。

ある特定のクラブが不活発であったとして

もそれが直接全生徒におよぼす影響は少ないと

新聞委員会はドン底の状態にある。学校

新聞「まつばら」も八十号に達したが、内容が以前のように充実していないのは事実である。

整美委員会

かつては伝統ある委員会として認められていました。しかし新聞を発行して学校内外のニュースを報道しなければならない新聞委員会がそ

の義務を完全に遂行できないために、全生徒に大変迷惑をかけている。他校では学校新聞発行機関が「新聞部」となっているところが多い。それは新聞作成にはある程度の経験が必要であり、各期ごとに委員が交代していた

生徒が、この問題がある以上生徒会の不調は続々、早急に何とかしなくては取り返しのつかない状態に突入するのではないかろうか。

も一時放送委員会のようなくらべと同居した

らどうか、という声も高まつたが、その後はつきりしていらない。これについての各委員の

考えは賛否さまざまであるが、職員便所改築

のため、きたなかつたけれども広かつた委員会室が取りこわされ、階段下の部屋に移らざるをえなくなつた。その使用可能範囲は

つかのまうつた。専門的知識、興味等の心

委員会とは異つた。専門的知識、興味等の心

委員会が出席取り扱いが少なかつたのも原因の一つだつたと思う。これも放送委員会の他の

委員会とは異つた。専門的知識、興味等の心

委員会が原因だろう。従つて、委員に比べ同好

会員が主体となつてしまふのも現状ではある

程度仕方のないことではないかと思うが、こ

れではない。M・B・Sは松高生皆の報

道機関です。皆さんの厳しい批評、協力なし

には現状からの進歩は望まれません。

他の委員会も同様ですが、生徒会員としての

自覚と、積極的協力を望みます。

放送委員会

つた。これから何人の人々が整美委員長といふものを経験すると思うが、少なくとも僕よりも進歩した。徹底した委員長になって欲しいと思う。

最後にこれから抱負を書いておこう。これからは、委員一人一人自觉して委員長、委員が一体となって今までの悪かった面を直し、校庭の緑化などできなかつた面まで邁進したいと思います。

前期、後期と一年に渡つて委員長を務めたわけだが思えば何一つ印象に残るというような仕事はできなかつた。しないといえば、毎年のことだが、体育祭、文化祭ぐらいだろう。中でも文化祭は苦しかつた。「何とか当日までには。」と連日私自身テスターと半田ごてを持って動き回らなければならなかつた。それにも増して一年生の委員。僕はドナッたこともあつたらしい、よく手となり足となり小豆を毎晩遅くまでも働いてくれた。感謝の気持は今でも忘れられない。

さて、なぜ放送が現在の様に停滞してしま

事しか出来ないのは残念である。

体育祭では、今年分担制を、とつたので、仕事は、一部の人を除いて良くしてくれた。

新聞委員会

以前の半分以下となり、新委員会室での委員・打ち合わせが事実上不可能となり現在物置となつてゐる。

委員会全体としてまとめる、是非とも専用の部屋が欲しく、そのメドがついたら規約改正の一部として委員会形式を改めたい、と考えてゐる。

後期整美委員会の行動目標は二つあつた。

我々の校舎、我々の学校をきれいにするのだ

という考え方があまりにも少なく、また校庭

の綠化、清掃計画などのことも考えて欲し

い。もう一つの理由は委員長のふがいなさであ

る。一年生で委員長になつたが、学ぶ所や難しい所が多く考えさせられる面が多分にあ

る。

「そうではないと思う。」我々の教室、花壇の整美と出席率の向上がそれであつた。

幸い花壇の整美は、先生方の援助もあつて四月には、きれいな花が咲く予定であるが、出席率が問題である。それは、整美委員会とはただ単に掃除だけをしていればよいとか、整美委員会奉仕団体のように考えている人が少くないのである。

文化部

英語部

一年たつのは早いもので、去年このル・クールに、今年の希望を書いたら、もう今年の反省を書くことになった。

活動の中心が私たちに移ってから、今度の文化祭まで、あれこれ迷いながらやつてきましたけれど、結果としてどうだったろうか？

どこの文化部でも一年間の主な行事として、新入生の勧誘、予算の獲得、文化祭などがあり、それから一般的な活動があるわけだが、私たちの場合、新入生の勧誘や文化祭のための時間の方を多く費やしていたようだ。

まず、新入生を入れるために、ポスターをかいたり、プレゼントをくばったりして、四月には二、三回ぐらいしか、ふつうの活動をしなかった。

また、私たちは六月、七月にあつた実用英語検定試験を受けたので、そのための勉強に一か月ぐらいかかった。おかげで二級三級とも受けた人は全員合格はしたが、ふだんの活動をおろそかにすることになった。

演劇部

「部員が欲しい」「お金が欲しい」これこそ、現在の演劇部の切実なる願いである。文化祭には、「かけもちのエキストラ」が四名も出ていた。あと二回公演したいと思つてゐるのだが、あと一万三千円しかない。(今年の文化祭は、一万円強。去年の文化祭は、二

万円弱かかっている。)二万円たらずの予算にしたので、練習を二か月やつた。

以上のような状態で、特に、実用英語検定試験と文化祭は一ヶ月や二ヶ月の勉強や練習よりもふだんの活動をもつと充実させて、その成果を生かすべきではなかつたかと思う。

今後の目標として、ふだんの活動をもつと大切にし、英語の力も、同じことのくりかえしでなく常に進歩させてゆき、しかも楽しくやって行きたい。

ただ手をこまねいていて、この瞬間はやつてこない。十分な有用な活動の基にこの瞬間はやつてくる。そして、十分な自らの主張はもちろんこの活動中に含まれることを、わざと、ハラハラしながら照明器具をにぎつていて、まかいまかと終了を待つてはいる幕の係、袖での照明操作手、セットの裏で台本をもつてハラハラしているプロンプター、幕の横で、い

度は言える。——創り出すことのすばらしさは言える。——舞台で大声で自分の主張を投げつけること、ハラハラしながら照明器具をにぎつていて、まかいまかと終了を待つてはいる幕の係、袖での照明操作手、セットの裏で台本をもつてハラハラしているプロンプター、幕の横で、い

である。演劇部はより高度でなければならぬ。高度に、なろうと努力しなければならない。それ故に演劇部は“学校を代表する劇”となるのである。高校演劇には対外的活動としてコンクールがある。今年は出場しなかつた。今年度は松原高校の作品を。是が非でも入賞させる。思えば、演劇部は三十五年度以来一度も入賞していないのである。

合唱部

「ジェリコ、ジェリコ、ジェリコ」さして広くはない室内に混声三部が響きました。外はもうまづ暗。文化祭前のある日のことでし
た。——今年度は最初は基本から、发声練習を中心に行い、七月からは文化祭の準備をはじめました。夏休み中などは出席部員が少ないので練習ができないこともありましたがとにかくここまでこぎつけたのです。日程の変更に喜んだり文句を言ながらも……。歌を歌うことによって私たちの心は一つになり、

そのたびに完成した喜びに何か充実したものを感じ、新しい感激が心をよぎる時、合唱部という小団体の中の、全員の協力を知りました。——文化祭を終え、結果の善し悪しは私

たちの問うところではありません。目下、最大の発表の場である文化祭を通じて、私たちが求めたものは何か、それは音楽の清新さ、そして広い心、としてしまう前に、もつと身近に、部員同志の心のつながりがあることを言わねばなりません。

現在、二十数曲のレパートリーに新しく四曲加え、その練習に週三回の活動を行っています。が部員数二十七名。そのうち二年生以上は十八名とこれから見通しは不安なものがあります。

部員はクラブのためにいるのではありません。ですから個人は自由なのです。しかし団体もあります。自分を犠牲にしなくてはならないことも十分考えられるのです。発足して以来伝統を守り続けた合唱部ですが、ここでもう一度、”クラブは何のためにあるのか”、”クラブと勉強、その他との比重”、”部員としての責任”等、全員で考えなければならぬ曲り角にさしかかったようです。

——舞台で大声で自分の主張を投げつけること、ハラハラしながら照明器具をにぎつていて、まかいまかと終了を待つてはいる幕の係、袖での照明操作手、セットの裏で台本をもつてハラハラしているプロンプター、幕の横で、い

も大きい）それは「楽しくなごやか」ということです。クラブ活動は楽しむのですから。しかし「楽しくない」という意見も少數ですがありました。

これからは、楽しくなごやかな雰囲気のものに、チームワークを整えていきたいと思います。それにはいろいろな音楽に親しみ、まじめに練習することが大切です。そして、ブランドが発展し、皆の交流が活発になります。それは部員だけでなく松高生全体にとってもすばらしいことではありませんか。

化 学 部

化学……。それは兎角敬遠されがちなものです。その化学を敬遠せずに、好んだ者の集団が化学部である。現在、二十数名の部員がいる。今年は昨年に比べて一年の部員が少なく、女子部員は不足している。また、例年のごとく、部員の出席状況は決して良いものではないが、四月の基礎実験「淡色反応」六月の生物部との合同発表「たんぱく質」夏休み中の二回の工場見学は、何とか無事におわることができた。やがて二学期になり、文化祭が近づくと、急に化学室は騒がしくなり、薬

品のニオイが漂い、部員の出席状態が良くなる。その結果、文化祭前日までに実験が完了した。当日、全員がハッスルしたにもかかわらず、人が余り集まらなかつた。それは昨年のようにCotton・Candyがなかつたためらしい。まことに残念に思う。Candyにつられるとは……。

化学には他では味わえない喜びがある。自由に題材を選び、調べ、実験してそれが成功した時である。また、化学は、夢と現実とを結ぶ最短距離の橋である。我々は、常に自由に楽しみながら化学を学べるクラブを理想とし、来年こそは、文化祭で我々が本当に見てほしい発表の方をより充実させ、多くの人に見てもらうことを念願としている。

華 道 部

華道部には男子がいません。生花が単に花束で、男性の保護の下に入りこみそこで城を築き閉じこもつてしまふのである。自主性のない人間が子供を教育しようとするとどうなるか。

じこみ「結婚は永久就職だ。」と自主性を放棄し、男性の保護の下に入りこみそこで城を築き閉じこもつてしまふのか。「女の幸福は結婚である。」「女性の役割は子供を産み育て、家を守る事である。」なぜこれをなぜ最初から敗北してしまうのか。「女の幸福は結婚である。」女性の役割は子供を産み育て、家を守る事である。なぜこれをそのまま信じ受け入れてしまうのか。女性は能力が低いという伝説さえも受け入れてしまつている貴女達……。しかしそれをすべて女性の責任に帰す事はできない。なぜならば女性はかつて、それを打ち破る条件を持たなかったのだから。日本においてその昔から社会の実権はすべて男性に握られていた。そしてその下の社会では、女性は男性に隸属させていたのである。その未開発な封建的生産関係の中で、又男性のエゴイズムによつて、事実男性つて奴は女性に白痴であつて欲しいと望んでいる。）女性はその活動を阻止されたのである。その結果、極貧以上の階層では人間としての様々な権利を奪いざられてしまつた。人間性なき世、そこではもとより向上などは望み得ない。女性はそこにおいて自らの可能性を放棄するのである。この事が多少なりとも現在の社会にも見られるのではないだろうか。女性は自らを無能力であると信じる

つては困ります。花には特別の美しさがあります。それは、可愛いしさでも、清らかさでも、華かさでも何でも構いません。「花はそれら全てを持っていているからです。」花はよく世間で「花の好きな人に悪人はいない」と言いますが、あれは全くのウソではありません。なぜなら、花のこれらの全ての要素を感じとれるなら大らかな心を持っているからです。みなさんも、「悪人」ではない方は、花に愛着を感じることでしよう。それならその心を生花へ持つていませんか？
華道部には男子がいません。生花が単に花束で、その調和をとることによって、一つの芸術を作り上げたものです。私たちは、その芸術性をみなさんに認めていただきたいのです。
華道部には男子がいません。生花が単に花束で、嫁修業のためのないことは先の文化祭でも言明したのですが、その他にもいろいろ理由があるのでしょう。ただやはり「おけいこ事的なクラブだけに部員の個人的なつながりが薄く、マンネリ化したクラブを今後どの様に結束したクラブにするか、私たちの課題なのです。

写 真 部

写真部は「芸術を追求するクラブである。」と部員達は信じている。我々はテーマにそつて写真を撮りそして他人やおたがいに批評して写真を撮り、しかし技術の向上をはかるものである。モデルや目的なくとも写真は出来る。しかしそれは真的芸術といえるだろうか？そして芸術を

来年度の目標としては、もっと広く写真部というものを校内に広め部員以外の生徒から

も注文をとつてもと生徒の中に侵透した写真部となりたい。また一学期に一回大きな展示会を開いて我々写真部の活動を広く知つてもらうように努めるつもりである。

手芸部

手芸部の活動の焦点は、文化祭にあり、部員も文化祭前まで一生懸命に活動した。

例年は、いつもパッとしない存在らしかった。それで今年は大々的なPRをし、作品宣伝のため、第一日目展示だけにし、即売は二日目とした。だからせっかく一日目に来てくださった父兄の方にお売りできなかつた作品数が少なかつたため一時間のうちに大半が売れてしまつたことなど、来年の課題としたいことがたくさんあつた。

現手芸部は、新入生に対するPR不足だった為に新人を集めることができなかつた。二期に入り、急募集しても、"不器用だから"とことわられてしまう。不器用であつても、皆とこつこつやるところに、手芸の良さがあると思う。器用な人でも不器用な人も、いつしょになつて学年、組を問はず集まつてすることにクラブの意義があると思う。一

に充実し、各自がのびのびとできて、早くも揃つたものになると思った。そこで、すぐに文化祭用の作品を始めてもらつた。ちょうどその頃に大学の展覧会(駒大、大正大、東文化大の三箇所)に出品し、修学旅行もすんだ。文化祭まで二週間程なので作品を表具屋に送つて仮表装してもらつた。そしていよいよ文化祭。作品量、質はだいたい及第点だった。その後二学期後半に二つの展覧会に出品して計八回となつた。

次に部内の統一——これは特に文化祭が終わつた頃から部内に不満がでた。原因にいろいろとあるがこれからはこれまで以上に話し合つて交流を多く、溝はつくりたくない。最後に今年の反省を元にして考えることは、もっと皆が実力を養成して基礎力をつけ、どんなものでも練習したものは一応取つて、文化祭展覧会などの直前になつてあわてて書くようなことはしないようにするために、普段の努力を怠らないようにしたい。

この作品が、出来あがつたときの喜びは、登山において頂上について山々をながめたときまでの、つかれをわざれてしまうような喜びに等しいと思う。

これらの手芸部は、部員不足で前途多難である。しかし、"自分達で作る"この樂しみを分かつために、がんばつていきたい。

食 物 部

食物部というのはあまり男子に関係のないクラブですが、試食会などとなるとそうでないらしい。

毎年文化祭には食堂を開いていますが、今年の文化祭も沢山の人がいらしてくれたおかげで昨年を上回る利益をあげることができます。協力感謝しております。

文化祭に対してもつといろいろのことをやつてくれという意見もありますが、何分にもクラブ員の人数が少ないものであまりいろいろの事は出来ないのが、現状です。

もう一つ問題になるのがウェイトレスのことです。今年はクラブ員が見つけて来ましたが一度やつた人にとっては二度とやりたくない場合には特にそれを感じます。

生 物 部

もう一つ書道部の練習する決つた教室がどうしてもほしい。特に今年のよう部員数が多い場合には特にそれを感じます。

生物部!ほんとうに、いきものについて研究をしているだろうか?これらの中には参考書など、のつていることを、自分達の手で、実験しただけの様な氣もするが、少なくないと思う。部員全員が、先に記した各々のことを実験し、観察したことは確かです。

しかし、そこに研究した、ということが個々の研究について、確実に断言できるでしょうか。生物部を発展させる為にも、部員一同となつて、遂行したいと思います。

変つて、今年度の主なる活動について、五月三日、一年生歓迎として、ハイキング兼植

ことらしいです。
これからの方針は、ただ料理をつくつて食べるというクラブではなくもつて意味のあるクラブにして行きたいと思います。
それともう一つは、伝統といつてはオーバーになりますが、ものすごくたての関係が、よくないという傾向が強いのでこれからは、努力してよりよいクラブにしたいと思っています。

書 道 部

本年度の書道部は思い切つて数多く(八回)の展覧会に出品して活動内容の充実をはからうとした。ここでその内容を実技的と部内の統一とに分けて今年をふりかえることにします。

まず実技面から——一学期中に展覧会に三回出品し、一応予定通りの結果が出た。そして一学期末の試験休みを利用して文化祭の準備(主として条幅)に取りかかった。この時の出席者は多くても四・五人であった。(もちろんこの時は一年生の部員は二名しかいませんでした。今年はクラブ員が見つけて来ましたが一度やつた人にとっては二度とやりたくない)

人數的にはだいぶ足りないが内容的には非常に

物採集に行く予定であったが、参加者の絶対数不足や、前日の荒天で結局中止という形になつた。例年行なつていたことなので、残念であり、また不安でもあつた。

六月二十五日、化学部と合同で研究発表会を行なつた。宣伝不足などによつて、失敗に終つたが、それなりの意義があつたと思う。七月二十八日と三十一日、尾瀬合宿を行なう。色々とごたごたがあつたが、先輩達によるバックアップや部員の、文化部としては特異な、合宿に対する理解で、持前の練習も数回に渡つて行ない、現地で、バテたのは、OBしかしなかつたことも、練習の大切さを、私達に、教えてくれました。また、尾瀬の美しさは、顧問の中平先生によつて写され、その美しさを、さまざまと思い出させてくれました。尾瀬!その美しさは、私達に自然の偉大さを教えてくれたのかも知れません。日本も広い、世界はより広大だ。こんな、自然を愛そうではありませんか。

今僕達の灯サークルは、大きな転機に来てゐると思う。それは不二愛育園の建設資金を

募金することから始まつたこのサークルも重障児問題の深さを知り、今迄僕としては、できる限り調べて來たつもりです。しかし現状では、その重障児を知るということを目標とし、それに基づいてサークル活動を行うことに、何か物足りない物を感じているのです。

もう一步知るという段階を越えて、知らせる事や、直接重障児に働きかけるという事点で活動できるようなサークルに僕はこのサークルを持つて行きたい。同じ事のくり返しに僕だけでなく他の二年生もいきづまりを感じてゐる。しかし今の僕には、大きく飛躍させるだけの勇気や自信がない。もうすこしサークル内のチームワークをガッチャリ固めなければならぬと思う。そこで、当面の方針として、去年の文化祭の発表物を整理検討して、その中から問題をみつけ、そして高校生として、できる問題を調べ、数多く施設回りや足を使った活動をしてみたいと思っている。

物 理 部

我々の物理部員が何を研究し、またそれらがどのように社会に働きかけているかを述べてみよう。今日、我々が（経済的事情は考えない）高度な文明社会に生存していられるの

はなぜだろうか。この問題を考える前に、しばらく我々の周辺を見てみよう。電気を用いるものではテレビ、ラジオ、電燈、電氣ストップ等の家庭器具から非常にめんどうな計算をするばらく行なう計算機、交通機関として絶対になくてはならない電車、バス、飛行機、船またすべての技術を結集した巨大なテレビ塔巨大なビルディング等、我々が文化生活を営む上に欠くことのできない多くの文化要素が存在している。現在、我々は一時たりともこれらなしには生きて行くことはできない。考えてみると、電気がとまれば電燈はつかない、テレビも見れない。その他いつさいの機能が停止してしまつだろう。都市でガスがとまれば料理ができない、水道がとまれば我々は生存さえ危うくなる。交通機関がとまれば目的地まであるいは遠い道程を歩かねばならない。その他多くの困難に直面するであろう。このように我々は便利な機械に頼つて生存するよりほかはないのである。

それではこれらの文明的要素となるものは誰が発明し、何によつて構成され、またそれが根本的法則は何であろうか。しかしこの問題に答えられる人はたいへん少ないであろう。それは、これらの機械の中に秘められて

いる、性質、働き、等がどのような法則に従つて作用しているのかということがわからぬのである。そのようなことを解明していくものが物理なのである。一般に物理といふものは実験等を通して種々の法則を研究するものであるが、（実際昔から多くの人々が実験し、思索を通して多くの法則を見つけてきた）我々物理部員はこれらの法則の一部を知り、一部を解明したにすぎないけれども。我々はこれからも今年の文化祭の発表以上のよりよいものが得られるよう一層努力するものである。

文 芸 部

それで、これら文明的要素となるものは、誰が発明し、何によつて構成され、またそれが根本的法則は何であろうか。しかしこの問題に答えられる人はたいへん少ないであろう。しかし、三年の方々の要望で思ひとどまつた。男子部員の数が少ない。いや、皆無の年さえある。

その為でもないだろうが、文芸部は現在不活発である。皆にやる気がなくなってきた様だ。一時は解散まで考えたくらいである。しかし、三年の方々の要望で思ひとどまつた。信天翁をはじめとする同人雑誌が出されている事はご存じかと思います。そのグループに

入ろうとする人はあっても、文芸部には入ろうとしている。書くだけなら何も部に入らなくともできるなどと言わないで、入つて欲しいものである。松高の文芸部も相当盛んだつた時もあるそつだから――。

ユネスコ部

ユネスコ部は現在クラブを解散するかどうかのせときわである。理由は次の点である。

一、部の発足の理由が不明瞭であった
二、クラブ活動の認識不足
三、部員の不足
二と三は何とかなるだろうけれども、一はどうしようもなかつた。

このような点で悩んでいるのは、ユネスコ部だけではないだろう。特に文化部のクラブには多いと思う。ユネスコ部もそして他のクラブをどのようにもつてゆくか、しっかり考えてゆこうではないか。

美 術 部

六時間目の終りのベルが鳴る。
美術室に四五人あつまる
木炭で石こう書き始める
五・六時ごろにかたずける

と、まあこんなことを毎日やつてゐるクラブ

いう語を口にするに必ずといって良いほど○の微笑がもれる。ともすると、中にはけたたましく、笑い出す者もいる。私達はそのようないふ事に少しも動搖されず日夜研究に励んでゐる。

今年度の研究活動によつて落語の「歴史」またその「時代的背景」の概要がつかめたと

思うので、来年度は内容を一段と深めそのひとつひとつをじっくり研究していくつもりである。しかし、落語は嘶（はなし）あつての落語であり、嘶無くしては成立しないものである。嘶となると、理論だけでは説明できない何ものかを多分に含んでいる。だから私達部員は、皆嘶を演る事にしている。それは研究の一環として行われ、またより「落語」といふものを理解するのに不可欠なものである。

このようにして私達は、私達の目的とする優れた鑑賞者に少しでも近づくよう努力している訳である。

現代社会では、合理的というか薄情というか、機械的人間ばかり作成し、古き良き時代にいたような人間味の豊かな人間は減少している。落語が江戸時代から今日まで語り続がれてゐるが、失われつてある。「人情」というものを保持していくこうという大衆の願望

落 語 研究 部

おちけん——我、落語研究会の略称——と

チーム戦四位、シングルス三位、ダブルスなし。女子はチーム戦優勝、シングルス一・二位、ダブルスなし。（この頃から松原の女子は強敵ということになってきた。）

第三回（千歳ヶ丘）男女とも、男子チーム戦三位、シングルス三位、ダブルスなし。女子チーム戦、ダブルス、シングルス優勝の女子は完全優勝であった。

そして十一月二十三日千歳で行なわれた第

四回五校対抗では男女とも、男子チーム戦三位、シングルス、ダブルスなし。女子はチーム戦優勝、ダブルス・シングルス一・二位

とこれまた完全優勝であった。

以上のことでもわかるように女子は二・三位、シングルス、ダブルスなし。女子はチーム戦において無敵の強さを誇いていた。だが問題が一つある。現在の一年生で、中学校の時から卓球部であった者は一人だけなのである。無敵を誇った二年生の中には、中学の時から人が二人、その上の三年生がまた強かつた。しかも四回千歳の大会においては、そうとうの強敵になるだろうと思われる学校および選手が見られた。今後の松原女子の発展は一年生の努力いかんだと思う。

さて男子はこれまた女子と反対でだんだん

落目である。現在の三年生では三人共中学校

から卓球をやつてきた人はかりであった。ところが現在の二年生は皆高校から始めた有様なので、そして現在の一年生も中学からやつて来たのは一名という状態である。特に男子において中学からやってくる選手の入部の少ないというのが落目の原因の一つであること

はまちがいない。

陸上部

クラブが発足してまだ二年しかたっていないので、やっと基礎が出来たというところで

昨年の活動は、あまり活発ではなかった。こ

れは二年生の部員が少なかつたことが一番の原因だったと思う。しかし、一年生の部員数がしだいに増し、今年は大いに飛躍すると思う。また、練習に計画性が欠けていたことも不活発だった原因の一つなので、今年は一年間の計画を、前もって立てておき、内容の充実したクラブにしていくかと思っています。

昨年は、五月、十月、十一月と三回の都大

会に出場し、みんな予想以上の成績を上げる

ことが出来た。

陸上競技は、走る、跳ぶ、投げるなどあらゆるスポーツの基礎をなすもので、見るのは面白

白いが、するのはつまらないと思っている人が多いと思います。しかし陸上の中には、他のスポーツにはないものがあります。

現在、体を鍛えたが、運動が苦手なのでクラブに入っている人は、ぜひ陸上部に入つて下さい。足が速い人が練習をし、記録を延ばす、これだけが陸上競技ではあります。誰でも出来る走・跳・投を自分自身に合った練習で努力し、体を鍛え、忍耐力と精神力を養うことが出来ます。

野球部

今まで振り返ると、非能率的な無計画な練習が多く、マンネリ化の傾向が多分にあつたと言うことだ。それは部長自身にもそういう欠陥が見られた。そのため、野球を求める二、三の者が退部した事にも関連がある。

公式・練習試合などを幾試合とやつてきた。先取点を取りながら途中で逆転される試合があつたということだ。しかし、最近は試合に慣れて来たためか、余裕のある試合ができるようになってきた。実力發揮といふところだ！ 今の状態を来年まで引き続

いチームになろう」と心がけて。そこには先輩い、後はいの差はまったくないのである。たごもあり、大変部員各自にプラスになつたと思う。クラブの試合成績も段々と上がり酒井、大西組は全日本にも出場している。そして数多い高校のクラブの中で男女共仲良くやっているのは、このテニス部だけだと思います。その他運営・練習・コート・整備など順調に行つたと思う。ただ一つ失敗した事は、予算が大変少なかつたことぐらいです。

来年は技術の向上、男女間の和、予算の獲得に一層努力するつもりです。

テニス部

この一年間のクラブの活動内容はいろいろござつたもあり、大変部員各自にプラスになつたと思う。

設楽さん、顧問寺本先生のご努力とも決して忘れない。一月の都大会には悔いのない試合ができるようがんばりたい。

四位都大会進出ができたのであった。O.B.の四回部大会進出ができたのであった。O.B.の

修理、修学旅行、注射等が重って、体育館はほとんど使はず校庭、中庭でも思うような練習ができる、最悪の状態であった。えてして

こういう状態の時には感情の問題もおこりがちであった。しかし皆の心死の努力で……第

一年生の部員は定員に満たない六人しかいないのである。これは思つような練習もできないので、ぜひとも入部して欲しいのが

今の現状だ。知識の吸収も良いが、それと同時にクラブ、特に運動関係のクラブに参加して、体を鍛え、それと共に、精神面での知識の吸収もして欲しい。責任感・團結心

・礼儀作法・規則正しい有意義な生活、その他色々あると思う。最後に一年生に言いたい。僕等は君等に満足な練習をしてやれなかつたかもしれないが、これからは君達が主体だ。今の自分達の状態に甘んじず、自分から努力する事だ。部長に協力し、一つのまとまった小さな団体を作る事だ！ 僕等の悪例をくり返すことのないように！！

これは精神面の弱さという我々の最大の欠点に現われている。勝っているときは大変な調子だが、負け始めるとふんぱりがきかず、するといつてしまふ。

これがなれば、いつそうチームは向上するに違ひない。より多くの人間でプレーを争う、「だれよりもうまくなる」そして「

ワンドーフォーゲル部

四十一年度のW・Vの活動は、春一回、夏二回、秋二回、計画は幅広くおこなわれ、部員数も一・二年で二十名程で活動しやすく、前年度の目標は一応果せた。

我々の活動の中心である合宿は、今年は八月上旬の一週間妙高で行なわれた。これまで新人戦の支部予選が先日行なわれた。毎年行なわれる体育祭、文化祭、中間考査等の行事

のトレーニングや研究を總てこれに集中し、普段できない色々なことを行ない、かつ経験するのである。今年は一年生の全員参加により、来年はさらに躍進するであろう。ただ残念なことは一年女子部員が一名しかいなかつたことである。

よくワングルと山岳はどこが違うの等と質問する人がいるが、その様な人達は実際活動に参加していない人達に多い。それを疑問とするのは、ワンドーフォーゲルの一員が、山岳とか実際に活動に参加している人々のみが考えるべきことを知つておいてほしい。そこには口では現わせぬ多くのことがあるのである。

ところで現在の問題というと一つある。女子が足りぬということである。普通の体力さえあれば、我々の行なっている基礎トレーニングにより自然に親しめるのである。注意する点は飽くまでも自然を軽く考えることと、自然の中での団体活動は總てリーダー服従であるということである。現在はベテラン卒先輩のモットーは、「自然に親しむ。見聞を広め。体を鍛える。團結、協力する。」等である。W・V・I一年生、二年生、男子と女子の協力があつて松原W・Vがあるのである。

男子バレー部

バレー。目だつようで目だたない、このスポーツ。これに愛着を感じる我々バレー部員は、先輩のコーチのもとで、練習を始めた。溶鉱炉のような暑さの下で、我々は動いた。汗を流し、だるさを感じ、根性を燃やして練習を続けた。合宿でのつらい苦しみにも耐え、ただ、ボールを追うことだけに熱中した。

誰かが我々に、「なんのためにバレーをしているか。」と聞いたならば、そくざに答える。「体力を向上させるため、次に根性をつけるため、それから、団体プレーにおいて自分を見い出すため、そして最後に、伝統的バレー精神を見つけるため、」と。

練習は、つらく激しい。それでも部員は黙々とついていく。

誰かが、「なんのために、そんなに激しい練習をする。」と聞いたならば、我々は、「最後の喜びのために、つらく厳しい練習をしている。」と答えるだろう。これを読んで大

朝日に輝くミルク色の山肌。夜空の満天の星。果しなく続く山脈……。

「大自然は君を呼んでいる。」

変厳しそうなクラブだと思うだろう。しかし、我々が思う限り、すばらしくて楽しくて観喜に満ちたクラブだと思う。これは、自分で経験してみなければ、わからないだろう。

こういう場において、我々は練習を統け、練習試合も多分に行う。練習の成果を新人戦という発表会に臨んだ。みんな、よく動いた。だが、我々のチームには何かが欠けていた。

実力を十二分に發揮せぬまま、ジユースで逆転された。何かが欠けていたのだ。我々のチームは、不完全だったのだ。まだ、完全に達していないかったのだ。この時の気持。忘れる事のできない、この気持ち。これは……。

我々は、これを教訓として、完全で満足するチームを作るために、再び黙々と動く。

女子バレー部

この一年を振り返ってみると、私達バレーボール部はこの一年で大きく成長したと思う。一年生だけのクラブとなつた昨年と比べると少ないながらも部員数も増え、現在二年八名一年生五名の計十三名の世帯です。夏の合宿では思うように効果が上らなかつたが世田谷区の飯田杯で第二位、そして東京都新人選

手権大会で残念ながらbest16をとりのがしましたがbest32になれたことは私達部員にとって最高の喜びです。

バレーボールはオリエンピック以来日本の大家芸となり、多いに理解、感心が高まってきた。しかし、それだけに勝利者となる道はけわしく、世田谷区は東京都で最高水準の位置にあり、今年の優勝チームが来年もかくあるわけではない。どのスポーツにおいてもそうだ。しかし、それだけに勝利者となる道はけだが競争は激しいものです。すべてが練習量と、それにも増して精神力です。バレーボールはリズムのあるスポーツなので、この波に乗った時の気持一つで勝敗が決することもしばしばです。私達が今年落したほとんどの試合はこの自己に対する精神力の弱さにあつたと思う。この点をもっと強くし、そして、クラブ員相互の関係を密にし、和」というものを考え、来シーズンの目標としたい。この力を低下させることなく、また、それ以上に向かうといふ。

「舞踊部をやっていますか？」

「はい、舞踊部に籍をおいています。」と、

舞踊部

事もなげに言つてのけると皆、意外な顔をしたまま。「舞踊部って? どんな事するの?」…くすくす笑いながら聞く人もいます。それが舞踊部は特殊なクラブでしようか。なるほど芭蕾部とかテニス部等というどこの学校にあるというポピュラーなクラブではあります。

芭蕾部は特殊なクラブでしようか。なるほど芭蕾部とかテニス部等というどこの学校にもあるというポピュラーなクラブではあります。

いささか手前味曾もありましようが、お聞き下さい。音楽を聞き、自分の脳裏にうかんだ何かを少しも、もらさず動作で表現する。音楽と一緒に軽やかに(中には鈍重におどる人もいますが)踊っている時の心地よさ。

幕が上がる。観衆の視線をいたいほどに感ずる緊張の一瞬。エピローグ近くになると、「ああもう終りか。」と思わず知らず落たんの言葉を、ひとり事もたひたびです。本当は、そんな事は外においやつて踊りに没入しなければいけないのでですが。

普段の生活には縁のない華やかな美しい衣装を、身にまとい、女に生まれた事に感謝する裏生地をえらぶのに苦心した事など忘れてしまいます。(私達は予算の関係で、衣装はすべて裏生地で作ります。) 私達はステッパー

ソフト部

我ソフト部としては、六月頃までは、基礎的な練習をして新入生の立場から練習して行きたい。

六月以後は、そろそろ校内試合をして、試合の雰囲気になれるようにしたい。

そして目標を八月の国体予選に置きたい。先輩達がつくってくれた、ソフト部の特色を生かして活動していきたい。

我がクラス



まえがき

松原高校には全部で十八のクラスがあります。そして、おののおのクラスにはそれなりに、遅刻すれば駆け込む者、堂々と重役出勤する者、早弁をする者、内職をする者がいるようです。文句を言つたり、他のクラスと比較してけなしてみたりしたクラスですが、ともかく一年の間を過してきたのです。一年を終えて、あなたの心には何が残っていますか。

この記事を読んでもう一度あなたが一年を生活したクラスを思い出して見て下さい。けつこう楽しい思い出がでてくるかも知れません。

この原稿を集める際に、「我がクラス」という題だけ示し、何も規定をもうけませんでした。それで、それぞれのクラスが思うままに書き、けつこう変化に富んだものになつたようです。

最後に一言、ついでに他のクラスのところも読んでください。

一年A組

「我がクラス」という題でなにかを書いてくれたのまれ、いとも気やすくひきうけてしまつた。いざペンをとつて書いてみると、非常にむずかしいこと……。

一言でいえば、我がクラスは、非常にまとまりのないクラスなのです。H・Rで討論会を聞いても、あちこちでペチャクチャおしゃべりばかりで肝心な討論は、そっちのけというあります。このクラスでは、なにをやるうにもできないであろう。そして今までに充実したH・Rがあつたであろうか。私の考える範囲ではないと思う。クラスの人々は、自己を大切にするのであろうか。余り積極的でないと思う。その生徒会活動に対して興味を示さない。一部の人々は、会長や自治委員長の悪口をいふだけで、自分たちで生徒会をやろうという気持は、もつていらない。そう彼らは、委員会に出席しないのである。とにかく男子がひどい、みんな女子にまかせきりである。いくら注意しても聞き入れてくれない。もっと自分に与えられたものに對して責任をもてないのであろうか、そのような人を選ぶクラスの中もどうだかと思う。

そんなクラスであるから授業態度もまことに悪い。時には、先生の講義も聞こえなくなることがある。まだエスケープをしないだけましかもしれない。このような状態であるから成績もまことに悪い。

男の子の中にも純情な子がいた。H・Rの時自分が発言する番がまわってきた時、真赤になつてなんにもいえなく、顔をおおつてしまつた。でもその子は後になつて、数人の男子といっしょに、公共

物をこわしストップのまきにしてしまった。まったくなげかわしい連中である。

女子は、なんというか、グレープができるて、主にその中の人々とのつきあいが多いとみていいだろう。中には、孤立した人もいる。ようだが、女子の間では、「マークレット」がめぐらまわっている。なにか男子も興味をもつてゐるのか、かりて読んでいる。

「マークレット」は、小学生向きの週刊誌であるが、くだらない週刊誌を読むよりは、まだと思っている。以上が我クラスについての様子である。これはあくまで私個人の考え方である。これに対して反論する人もいるかも知れないだろう。

一年B組

一年Bについて語ろうとする時、担任である宗内先生を考えないで話を進める事は出来ない。この一年間、先生は我々に学問の重要さ、学生生活のあり方などを力説されて来た。先生は我々が侮いのない学生生活を送るよう願つておられ、また我々の勉強の成果を大変期待されて来た。先生のこのような誠意と愛情に満ちた態度は、高く評価する必要があるだろう。

そこで、果たして我々は先生の期待に報ることが出来たかといふと、そうではない。我々のうちの多くも、それを認めている。我々は、学問という面ではまだまだダメなのだ。

これと関連して、この機会に一年Bにはびこる多くの悪習のうち、そのいくつかを暴露してみよう。

まず最初に、授業中の私語が多い事だ。この事は一年Bを担当する先生方の間でも、すでに常識にさえなっている。試しに、我々が朝

登校してから夕方下校するまでの間の会話を、全部筆記してみたら面白いだろう。その結果、我々の会話のうち約九割五分までが総てムダ話だったということになるに違いない。我々のうち少しでも正常な神経を持っている者なら、自分達の会話が筆記されたのを読み返してみて、余りにムダ話が多いのを多いのを見発見して驚き、続いて非常な羞恥を感じ、自己嫌悪に陥るに違いない。

私は何も、ムダ話することがいけないと言つてゐるのではない。ムダ話も結構だが、限度というものを考えてもいいのだ。

次に、一部男子生徒のワイ談に関する事だ。ここでこんな事を問題にするのも、それ相応の理由がある。それは彼らのワイ談が普通のワイ談ではなく、何もかも百パーセント露出した非常に露骨なものであり、また一年B男子生徒全員が、少なからずこの露骨なワイ談の影響を受けているからなのだ。しかも彼らは毎日毎日登校してから下校するまで、ヒマさえあれば話している。中にはエロ本持参で登校し、教室内で一般公開している人も居るので。このような状態は、いい傾向とは言えない。だからといって修道院の生徒じやあるまいし、全くワイ談してはいけないというのではない。だが、露骨なワイ談は周囲の雰囲気を不潔にするのだ。

このほか、一年Bにはびこる悪習は数多い。先生に対する無礼な態度、退廃した友人関係、徹底したサボリ精神などがそれだ。こうして見ると、一年B生徒はかなり惰落しているよう思えるかもしれない。しかし我々は考えようによつては、非常に大きな「長所」を持っていることを忘れてはならない。それは「我々は平凡だ。」ということなのだ。これによつて、我々は終生無難に暮らして行く事が出来る。有難い事ではないが。

一年C組

八時五分すぎの教室はカバンが一つ机の上に置かれてあるだけ。誰の姿も見えたかった。これが日の長い頃ならもう来てもよいはずの人達も、二十分をまわった頃に少しずつ入って来るのがこのごろの常である。本鈴まぎわは實に忙しい。女子のおしゃべりの声は一段と高く、後ろではギターの軽快な旋律が流れチャイムと争つて教室に駆け込んでくる人などは教科書とにらめっこしている人とは対象的である。

「おい、ちょっと。やつて来たかよ。」と人の肩をたたきながら英語の教科書を指す男子。「ねえ、ここちょっと見せて。」とは一時限の宿題のプリントであろうか。ひとり静かにページをめくるガリ勉。いつこう平気な顔で無関係な事に熱中している暇人。——いつも変わらぬ、わたしたちのクラスの朝の顔である。

わたしたちのクラスを、明朗と行動力をもつて表わしても決して言ひすぎではない。行動力の点では未熟であるために、思索が足りなかつたり、一方向に走りすぎてあわてる事もある。しかし、私達は若いのです。と呼びかけるところなどは實にたのもしい。それらはホームルームのときにも表われてくる。企画委員会できめられた内容に基づいて議長は議事を進行させる。が、それには時として緊急動議が出され、少數の人からの結果すべてが白紙に戻ってしまったこともあった。完全に時間のロスである。

ホームルームはクラス全体のものである。しかし、一部の人にかたむく傾向があるのはどのクラスでも言えることだろうか。無関心な人はいる。議長の存在を無視した時間。意見らしきものも出ない

たまに出た意見は盛りあがりがないままに消えてしまうことさえある。だが、わたしたちにも、団体である意識を深めさせた瞬間は、短いけれどもあった。文化祭である。型破りな一年Cクラス有志の

参加。結果としていろいろ問題はあつたけれども一ヶ月くらい前から毎日のように放課後遅くまで話し合い、準備にあたつていった。クラスのことで、これほどたくさんのが、同じ目的のために、真剣に考えたことは、大きな発展への第一歩であつたと言つてもよい。

わたしたちの中は、一日をどうやら無事に過ごした、というような無氣力さは少しも見当らない。常に伸びようと努力している姿。まだ未完成な、そして新鮮さのあふれるクラス。——しかし、毎日は平凡に過ぎていくのである。

一年D組

一年D組これが私の所属しているクラスである。一口に言えば五十人の集まり。

女子二十五人。男子二十六人、それから忘れてはならない先生一人。なぜなら先生は男子というにはあまりにもかび臭いからである。なんとも形状しがたいクラス。これが一年Dである。とにかく強烈な個性の持ち主が多い、松沢から転校してきたのではないかと思うぐらいである。

休み時間となると大変である。まるで蜂の巣をついた様な大騒ぎ。しかし授業中は案外真面目で、貝の様に押しままつてしまう。静かだから真面目であるとは言えないのであるが。つまり、わかつてい

ても、又わからなくてだまっているから。皆心の中で何を考えているのだろうか。屋のお弁当を考えている人、居眠りをしている人さまざま。先生が透視術を使わない限り、この静けさの原因はわからないであろう。

我がクラスは音楽を選択している。そのせいか教室にはいつも音楽が流れている。まるでミュージックホールであるが、たまたまともな音楽とは言い難いのでありがためいわくなってしまっている。

男子のドラ声と超短波の周波数を持つ声とが混ざり合って、いつも珍妙な芸術となってしまう。以上色々書いてきたが、決して自分のクラスをきらついているわけではない。愛情の表現として色々ある様に、口だけなして心で……。というわけである。最後に一つだけ長所でも書いておくとしようか。一人一人の個性が充分に發揮されて、構成されているクラスもある。口からさきに生まれてきた人や、小鳥にも負けじと喉をふりしぼって歌う人、毒舌家や頭の中が論文の様に出来上がっている人等。一Dでは人間の品評会を開催中である。

まったく不調和でへんてこりんなクラス、しかし我がクラスなのである。泣いても笑っても、もう手遅れ。あとは一年が無事に過ぎるのを祈るばかり。先生も天命とあきらめてか何もおっしゃらない。でもきっと我クラス、一Dをかわいく思つていらつしやる事だろう。昔から「不出来な子ほどなんとか」というから。

一年E組

中庭のトイレから見て、金網のはつてある教室の一一番右にあるのが我クラス一年E組だ。教壇のある方の入口から入って机の配列を



けると、前は勉強組。後は勉強もするがフザケもする冗談コロコロ組。後に位置するところのクロヨン、ベトコン、ジョウ、ナリキン、ヨシコさん、ボスネコ、ドテツ、ガンボン、そうじ大臣などはE組暗コク街の幹部候補生で一Eのオヤビン森善男先生のお宅にある、自動霜取り付高級冷蔵庫のソケットをうばおうと日夜ねらっている。我クラスは休み時間をはじめ、もちろん授業中ざわざわとうるさいのだが、生物の生殖の時間だけは、なぜか中平先生のお言葉を一言ものがすまいとシンと静かになる。また我クラスにはおかしなやつが多い。先生が冗談をおつしやれば「アハーッ」と喜ぶバカもいれば、天井向いて数を数えているトボケタ野郎もいる。全く顔も心も乱れているやつが多いが、我クラスには実力テストの二十番以内に入る者も多いということを最後にいっておこう。

一年F組

私たちのクラスは二学期の所ではまだまとまって一つの目標に向つているとは言えない。また高校生にそれをやらせようとするのには無理かもしれない。高校生ともなれば個人というものが今まで以上に重要な時だと思う。しかし二学期までの個人の重要な事を引いてもH・R活動は不活発だったと思う。それを感じたのは自分がクラスのH・Rを計画し、クラスの人に実行してもらわなければならぬ立場になつた時に強く感じた。私たちは二学期から、クラスでH・R委員を決めて活動をはじめた。それで二、三ホームルームを計画しましたがほとんど失敗と言つてよいようだ。その例をあげるとH・R委員では音楽室を利用して、クラス全体で合唱それに文化祭の前にやる予定でいたのでフォークグループの演奏それに

見る。左から三列目の前から四番目に座つている男、こいつは印度人もびっくりする程黒くて暗闇に入つてしまえば存在しているのかと疑われる位だ。なぜかビンゾルと呼ばれている。その後がそぞじ大臣。眼鏡をかけて一見まじめそうであるが、ストーブから「黒い煙」を発生させ、色々あらあな、などとどうそぶくエンガチヨたぬき。次がガンボン、又の名トロンちゃん。豚のようであるゆえ、欠席でもしようものなら肉屋につかまつたんだなどと皆に言われる。次がナリキン。日頃は借金と月預でピーピー言つてゐるくせに時たま、こづかいをガバチヨと持参し、皆に、はでにおどつたりする後天的キ印。その後が吾輩。人呼んでジョウ。ひところは貧民のジョウなどと言われたが近年になつてエースのジョウに変わつた。ニヒルでダンディなのがジョウで、などと誰も言つてくれない。それから左横へ行つて女子。誰もがキャハッと笑うようなことでも不断の冷静な面もちをくすさないのがヨシコさん。その前がEかいわいのサンマをねらうボスネコ、又の名を肥満キノコ。その前、大きくなつたら、「女ヤブ医者になるんだ。」と言つたかどうかヤブからきておタケさん。また男子、左ななめ前のハタ坊。この子は誰にでも冷たい軽ペツのまなざしを向ける。ねんねでありますからバッヂ横わけをしている。窓ぎわに飛んで、「ミッチと歌おう」とか言つてするのが女の子ミッチ。後には一E男子の人気を一手に集めるト子ちゃん。そしてタツチフットで慣らす三人組、クロヨンにドテツにベトコン。ずっと前に来てフニャ夫。授業中、指名され立つとニヤケるのでニヤ夫君だったがフニャラーン、ホニヨニヨとからだをくねらすことを見つめられニヤ夫に改名。これで我クラスのあだ名を全部紹介したが、今度はその構成などを書こう。前と後に分けておタケさん。また男子、左ななめ前のハタ坊。この子は誰にでも冷たい軽ペツのまなざしを向ける。ねんねでありますからバッヂ横わけをしている。窓ぎわに飛んで、「ミッチと歌おう」とか言つてするのが女の子ミッチ。後には一E男子の人気を一手に集めるト子ちゃん。そしてタツチフットで慣らす三人組、クロヨンにドテツにベトコン。ずっと前に来てフニャ夫。授業中、指名され立つとニヤケるのでニヤ夫君だったがフニャラーン、ホニヨニヨとからだをくねらすことを見つめられニヤ夫に改名。これで我クラスのあだ名を全部紹介したが、今度はその構成などを書こう。前と後に分けておタケさん。また男子、左ななめ前のハタ坊。この子は誰にでも冷たい軽ペツのまなざしを向ける。ねんねでありますからバッヂ横わけをしている。窓ぎわに飛んで、「ミッチと歌おう」とか言つてのが

の高校二年生の計五一名の集団であるにすぎない。遅刻する人も、早弁をする人も、授業中におしゃべりしたり、いねむりをしたりする人も、他のクラスのようにちやんといふ。だから、このクラスをどんなクラスかと聞かれても、答えるのに困ってしまう。要するに平凡なクラスなのだ。無理に何かを言うとすれば、このクラスの人のはほとんどがクラブ活動に参加しているということぐらいだろう。

それも担任の先生が体育科の先生だからということではないだろうが……運動部の人が非常に多い。しかもその種類が、ラグビー、バレーボール、野球、テニス、柔道、陸上、バスケット、スキー、卓球、ワンゲル、ソフトとまたバラエティーにとんでいる。この上文化部に参加している人を加えると、組でクラブに参加していない人は十人もいないだろう。これは、クラスの一人一人が豊かなる個性(?)とまでいかなくとも、勉強以外に何か自分を打ちこめるものとか、好きなもの、得意なものとかを持っているということで良いことだと思う。しかし今、これを半年前に振り返って考えてみるとこの事がクラスのまとまりを悪くしていった一因にもなっていた。つまりクラブ関係の結びつきが強かったということである。(特に運動部では、苦しい練習や試合と共に経験しているということで、気心もわかりやすいということである。)だから一学期は本当に、寄せあつめといつてもいい位、まとまりに欠けていたと思う。二学期になってからは、体育祭、文化祭と、クラス単位で行動する行事が多かつたせいか「言うこと無し」と迄いかなくとも「かなりいい線」をいっているようである。

学習面はというと、成績優秀な人が多くなかなか生存競争はきびしい。ほとんどの授業は静かな雰囲気の中に進められ、とはいって

も、勉強熱心で静かなのか、いねむりや内職に忙しくて静かなのか判定はしかねるが、ともかくは眞面目に勉強はするようである。だから、みんなクラスの成績は、そんなに悪くもないようだ。とびぬけて良い所もないが、とびぬけて悪い所もない平凡なクラス……これが二年A組というクラスである。

二年 B組

我がクラスは素晴らしき五十人の紳士淑女によって構成されている。まあ紳士淑女といつても主觀的な見方だからそのへんは賢明な諸君の判断におまかせします。

ところで我クラスの人は内職が好きなようで、本業より内職の方が多く、ときには一日中内職で過ごす人もあるとか。とくに試験前になるとそれは最盛期を迎える。眞面目に授業を聞いているのは前から二・三列で後ろの方は内職で忙しく先生には気の毒な事です。ある日私が昨夜の猛勉がたたつてついコックリ。気づくと授業はどこをやっているのか皆目見当がつかず、ちょっと後ろの淑女に尋ねると内職の真最中で、"およびでない。"淑女も将来は内職で多忙になるのではないかと心配です。また内職をされるのが嫌いな先生もおりまして、発見するとすぐ雷を落すので、そこはテクニックで……。

ここではほこり高き紳士淑女を二、三紹介します。先生の商売道具の白墨でピストルごっこをするガムナニアの紳士B君。C女はなかなかの落語の達者の方で、将来が大いに期待される。だい。

これらいろいろな人の集まりだからなかなかおもしろく、愉快なクラスであり私はこのクラスが別れる時が辛い(本当は美人の多いクラスだから)。

教室は一、二年で唯一の隣が三年の教室であり、ガリ勉強達のために図書室も近いし環境は良。そのため学年のバーワンは常に席者の多い事は前代未聞ではないでしょうか。とにかく全員出席の日は数える程しかなく、空席はときには六、七になる事もあり先生をガッカリさせてしまいます。

ところでどうも見えないのがSHR。討論会では稀に活発になる

こともあるが、「この議題はつまらないから打ち切り動機を出します。」とやる気〇になること多分にあり。過去二回の校庭使用日は二回とも雨で、音楽室使用のときは防火訓練でそれぞれ中止。こんなクラスでも修学旅行終了後は男女の仲が急速によくなっている様子。しかし全体的に皆恥しいのか消極的で、完成したカップルはわずか一組にすぎないのが現状、これからはさらに増加するだろうとは、消息筋の見方であり、大いに期待したい。

二Bの全てを述べるにはこの数百倍もの活字を使わないとできないが、ただ言えることは平凡なクラスであり、ユーモアのあるクラスで人生の一頁として価値のあるクラスであることは異論のないところ。とにかく皆このクラスで何かあるものをつかんで自分のものにしているのは事実だろう。我々は苦惱する十七才を一生懸命して暮らしているのである。

一年 C組

我が二年C組は日本史の永浜先生を担任にもつ男子二十一名、女子二十九名計五十名のクラス構成である。まずは授業風景から——先生がドアを開けると前後左右から入り

二年 D組

B 「今度のル・クールで『我がクラス』というテーマで各クラスの紹介のような事をするそなんだ。それで、だれかにその原稿を書いてもらうんだけど、だれかいの?」

C 「そんなきとくなやつはないだろ！今のホームルームの状態などを見て見ろよ自分からな事ばかりしていて、ろくすっぽ、人の話なんか聞いたやしないんだから。」

A 「そう言けど、ほくらのクラスにだって書いてくれる人はいるさ。」

B 「まあ、そうにらみあわてないで……。」

じゃ、ほくらのクラスの批評をしてみようよ。」

C 「それでは言わせてもらう。まず、勉強の点では、試験などの成績は、いつもほくらのクラスは『谷間』だから。さっきも言つたけどホーム・ルームなどのような生徒会の活動には無関心な人が多いし。スポーツをしてもあまりパッとした成績はあげられないし、とにかく取得のないクラスだよな。ほくらのクラスは」

A 「そんなに悪い所ばかりさがさないで良い所だってあるだろう」
B 「それはもちろん、ほくらのクラスにだって良い点はあるさ。まづぱくの見るところでは、わりあいにまとまっているクラスだと思うよ。とかくありがちな、仲間はずれになるような人は一人もない。みんなだれかと友達になつて、楽しく学校生活を送つている。つまりほくらのクラスは友交関係では、わりにうまくやつているクラスだと思うよ。」

C 「それはみんな上部だけのつくりにきまつてゐるさ。」

B 「また、どうしてそう悪く取りたがるのかな。」

C 「いや、これは事実を言つたまでさ。」

B 「まあ、それは事実かもしれない。しかし、ほくらのクラスは二年になってから出来た新しいクラスだ。まだ一年もたっていないのに、友達の心の底までを知つてつきあうのはむりだよ。」

クラスの雰囲気が、実によく現われてゐるのである。

又H・Rの面では、生徒会および各常任委員長などをやつてゐる人が、他のクラスよりも抜群に多い。しかしその人達をのぞくと、自発的に発言する人もいなくて、H・Rどこ吹く風である。H・R企画委員が三学期こそはと、全校初の統一テーマをかけて奇声を發しているがいかになりますやら？とにかく変わつたクラスである。まとまりがないだけにいつそその気分をかもしだす。女子もまつたくちやらんほらん各段かいのつわ者ぞろい。男子も同様、右よく左よく、客観的な、主観的な小派がいろいろそろつていながら発言しない。書いてる「ミー」もその仲間／クラブにろくに出ないでクラブの意義がどうのこうのとぶる人、社長よろしく三時間目あたりに前のドアから教室に入つてきて先生に、「そのぐらいい堂々としてたら将来大物になるよ。」とほめられ?たもあり、すぐ前に出てきて先生のまねをする人あり、きざなやつあり、ガリ勉もちろん、ビートルズを学校さぼつて見にいく人あり?やつてゐることがあるのにクラス全体では「大変おとなしいクラス」

「まだわれわれは未完成なのだ。」自己のからにとじこもつていては未完成のままおとなになつてしまふ。「ミー」もこのような文章しかかけない。もつとやることなすこと夢があり、希望に満ち活氣のあるクラスですと書けるクラスにこれからでもおそらくはない。なろうではないか。

二年F組

二年F組について思つたままにかくと、まず聞く所によると毎年二年F組というクラスはガラが悪いことで名が通つてゐるが、今年

A 「いやちがう。みんなは相手を理解してつきあつてゐるよ。」
C 「いやそれはちがう。みんなは心の中では自分が良ければ良い、友達なんかはどうでもいいと思っていても、口先では友人関係をもつと密接なものにしようなどと言つてゐる。」
B 「そんなに意見がくいちがつてはどうでしようもない。もう一度見なおそう。」

ほくらのクラスは五・六人のグループ内では相手を良く理解し合つてゐるけども、そのグループことはまだ口先だけといふところがある。とまあこんなところじやないかな。」

二年E組

まずこのクラスの特徴というと、女子の数が男子の数より多いということである。しかし大変女子の諸君等がおしとやかな方が多いらしく、その割には余りパッとしていないのである。又クラスの雰囲気はのんびりムードというか、大変静かで余り変化はなく、たまに音楽選択の男子がテスト前に奇声を発したり、楽器の練習をして騒々しくなる位で、いたつて静かなクラスである。しかしのんびりした連中が多い割には、遅刻者数の少ないのでは、校内一といふから變つてゐる。

朝、チャイムが鳴るとしばらくして教室の戸が全部あき、床音も

高々にノッシ、ノッシと我々の担任、末松先生が入つてくる。そし

て最高のパワーで放送を始めるのである。すべてこの調子で話すた

め大変印象深いが、まさに我々と対象的である。

一方授業における我々のクラスの雰囲気は、ほとんどの時間單々たるものである。松高第二学年の非活潑的な者の集まつた様なこの

もごた分にもれず少し変わつたクラスであるように思われる。今

のそれは行動的なクラスで二年の中でも特異な存在として自他ともに認めてゐるようである。その行動的な例として昼休みに見られるソフトボールである。一部の生徒ではあるが、その他には三間分スピーチなどがあげられる。例をあげるのはこれくらいにしといて、二年F組に見られるこれら二つの主な行動……前者は遊びに関して自発的であることのよい例であると思う。この自発的に何かを行なうとするこの意思を勉強にぶり向けたら（わかつてはいるのだが）どんなに意欲的なクラスになるだろうと思われる。また後者はH・R企画委員が中心となつてまとまつてゐるよい例であるようと思われる。この朝行なわれる三分間スピーチといふものは非常に有益で多くの人に発言の機会をあたえるというものである。

こうして見ると二年F組というクラスは非常に活動的なものであるというように見られるが、その活動的な反面、ある種の波のものと、それに皆が乗じて無責任な行動をしてしまう。これもまたさきほどの例をあげて説明すると前者は昼休みを有効に使って四十分フルにつかうよう食事を休み時間にすませ昼休みぎりぎりまでこれを行なうように少々行き過ぎの感なきにしもあらずといったところである。後者の例では最初は大変スマーズに毎日続いたが、ちょっとした学校の行事があつたためにそれがとだえ以後うやむやになつてしまつた。がH・R企画委員の手によつて復活された。このようないたちごっこをくりかえしてゐる状態である。どうもこのクラスはなにごとも徹底する精神をもつてゐるようである。大変良いこともあるが、悪いこともある。それではなぜこのような無責任な行動がはびこるのであらうか？答の一つには男子が全体の三分の二

をしめていることも一因であるよう思われる。とかく男という生き物は無責任なものである。それに多く人の利を得て群集心理が働くためこれがいつそう表面化して来るのだと思う。いずれにせよ二年F組はなにごとにおいてもリーダーを先頭に一致団結している力強いクラスである。

授業中紙飛行機や目覚まし時計を鳴らさなければもつと良いんだがネ——。

三年A組

一九六六年もいよいよ押しつまり我が学生生活の日数の残り少なさに目をみはり、「光陰矢の如し」のことわざを身をもって感じている今日このごろです。おそらく、三年生の大部分の気持もこの通りのことでしょう。

さて、私のクラス三年A組をみわたすと、いるわるいわ、女の子がうじやうじやと……四十三名そろいもそろつて女の子ばかり（あたりまえ先生が女の子ばかりそえたのですから）という始末。

幼稚園から、高校二年まで十二年というながの年月教室に男の子の顔がみえなかつたのは、保健、家庭科の授業時間と更衣中の時だけという生活をくりかえしてきた私にとってはまったく新しい世界で何の抵抗もなく楽しい毎日を暮らしています。でもやはり異性がないという事は、何かしら安心感（身がまるえる必要性がないといふ安心感）があるらしく第三時間が終了した時の休み時間は、我が教室は昼休みと見まがうばかり、食堂と化し、ノリ、卵焼き、その他もろものにおいが充満します。このごろでは、朝学校につくなり早々と出席係の点呼に返事しながら、ごはんを口にという人さえ

現れました。（二食分のお家から御自参かしら？）

なんだかとても男性化した粗野な生徒の集団のようにきこえますがすごいのは飲食だけ。他の点では至つて純情貞淑、将来良妻賢母になる素質を内に秘めたお姉様ばかりです。

「百聞は一見にしかず」とやら「うそだっ！」とおもう方は一度遊びにいらして下さい。

三年B組

「ドタ、ドタ、バターン」何だかわかりますか？ある授業の時の席を取る方法です。何しろベルが鳴るやいなや教室を移動しませんと私達の好きな後の席が取れません。そして時々先生からどうして後へばかりいって前へこないのかと言われたこともあります。他の授業の時は別ですが、この授業の時はかりは違います。でも今こんな事を思い出しているとなつかしい気がします。

私達が三年になって組がえをして、新しいクラスの教室に集合した時は、皆とてもおとなしく授業中おしゃべりする人は、一人もいなかったと思います。私達のクラスはとかく授業中は静かで最初の頃は手をあげる人や質問する人もいませんでした。しかし休み時間となると今までの静けさはどこかに吹きとんでどこでもかしこでも話がつきません。しかしだんだん慣れてくると休み時間の話の続きがどうか知りませんけれど先生が話をしても平気でおしゃべりを始めります。しかしいくら昔がおしゃべりをしようと注意する人は誰もいません。やはり私達のクラスは女子だけですのでお互いに遠慮がちになるのでしょうか……。

そして自分の意見というものを持つきり言わないで何となく人の

意見に同意してしまう人が少なくありません。とにかくもつと授業中に活発さがほしかったと思います。たいてい五人位は一日に欠席します。ひどい時に十三人も一日に欠席します。しかし欠席は仕方ないにしても遅刻は私達一人一人の不注意である。遅刻といつても気分が悪いとか電車が遅れたのは仕方ありませんけど今まで悪い面ばかり述べてきましたが、私達のクラスは明るいと感じました。

この組は唯一の男子クラスである。すばり、この組の特色を言うとすれば、明朗かつ“活発”である。これはいわゆる樂觀論者が多いために、組全体でまとまるより、どうも、グループ単位で固まる傾向があつた。

二年まで同じクラスの人たちがそのままその人たち同志で固まってしまうのである。これは残念な事だと思った。

十月の体育祭の時、予行演習などに参加しなかつた人たちと、参加した人たちとの感情的対立も見られた。これはその後の催し物にも影響したが、受験が近づくにつれ、そういう問題は黙認される形

三年C組

三年D組

三年Dのクラスについて述べよと、文化委員会からたのまれた。しかたなしに引き受けたものの、何やかにやで、そんなこと、つづきり、記憶の外であった。

なにせ、この怠慢な文化委員のため、委員会に提出するのがされないのである。委員会から、早急に提出のこと、そこで、あわてた小生、内容薄き頭をしぼつて執筆中というしだい。我らが愛すべきクラスDは、松原きっての優秀なクラス（？）そして最大に目立つ

最後に、一年間をふりかえり、この組には極端な利己主義者や陰険な人がいないから、ほとんどの人々は、この受験地獄の時期にしては楽しい学校生活が送れたと思う。

クラス。というのは、この年我々は三年になつて、勉学に勤しみ（？）。学校行事のすべてに華やかに参加し、生徒諸君を扇動した人間がきわめて多い。我々は松高を誇りとしている。肩をポンとたたけば、くさいほこりも出ようというもの。

また、よく考へること、実に、多彩な人間が豊富だ、例をいろいろと御披露しよう。

我々のクラスには、芸術家（？）肌が多い、あらぬ才能をふりしぱり、自己を心の内に天才と思い、絵画、デッサンに、または彫刻に、腕をみがく者数名。

三年になつて歌声サークルなどという、サークルを作つて責任多く、勞多々ということヒーヒー言つてゐる者もある。同じく三年になつて、ラグビー部に入部する者もある。我々のクラスは、男性多數（女性七名）の上に、魅力的でハンサム（？）な男性ばかり故、松高女性のあこがれの的（これも？マーク）特にラグビーの男性などは、やはり女性にもてる方だ。（もちろんお世辞。）このクラスにも女性がいるのだから、やはり、述べるべきだ。

一口に言つてまじめ人間ね。勉強、勉強、勉強一口、二口、三口勉強、というほどバカ真面目でも、なさそうだけど、男子との接触があまりない。つまりこのクラスの男子は、このクラスの女子に対しては、劣等生ということ。それだけ女性が奉られてしまつてゐるわけ、我がクラスの授業風景は、にぎやかそのもの、学を授ける立場にとつては、はなはだ迷惑というもの。だから、我クラスへ授業に来る前は、「また3Dか」というぐあいに、いやいやながら来るにちがいない。それが先生の心の内ではないか。

先生方も、それとうとう苦労をしているわけにちがいない。それ

なら、先生方の心にも印象が深いというもの。それが3D。

三年E組

担任青池秀二、生徒五十一名。我がクラスは、明郎活発でまとまりがある理想的なクラスとの諸先生方の評判であるが、實際は、原因不明の地（床）震、拍手、殺人的ひめいが、日に何回となく起るというまつたくひどい状態である。

我々は、極く少數の人達の力によつて扇動される傾向がある。残念なことは、一部の者が群衆心理によつて、遅刻、早退等が整然として行われ、それらに對する罪悪感が次第に弱くなりつつあるよう感じられることだ。だが、もつと困つたことには、我々がそのことに怒りさえも感じなくなり、見て見ぬふりをしたりするようなこともあります。このことは、現代社会人にある悪い一面の、我々への反映といつてしまつてよいことであろうか。

我々は、三年生で大学受験があるからという理由で、学校行事、生徒会活動に、非協力的になつたり、無関心になりがちであった。こんな状態で卒業をして、社会あるいは大学において、松高卒としてのプライドをもつて活躍できるであろうか。

我々は、責任を他に負わせる氣は毛頭ない。したがつて、なぜこのようになつたかを、考え方検討すべきである。しかし、現状においては、まず無理であろう。我々はなにかにつけ、「各自の自覚……」という言葉を用いるが、何人が自覺し、どのような影響をクラスにもたらしたかというと、まつたく疑問であるが、とにかく、ここに卒直に反省するとともに、反面、のびのびと明るかつたこのクラス生活を今なつかしく思う。

星と向い合わせに、五枚の表形状が整然と並んでいる。クラス対抗・球技大会・体育祭での健斗のしるしである。そんなわけでFはスポーツマンがそろつてゐる。

しかし、残念ながら明るく團結力があり、スポーツが盛んという良い面ばかりがFのすべてではない。明るさが度を越し、しばしば授業中に先生からにらまれる。某先生曰く、「3Eと並んで最もうるさいクラスだ。」

また、團結力が変な所で姿を見せる。すなわち、遅刻がべらぼうに多い。八時二十五分には教室はがらがら。五分間でクラスの五割が現われ、残りはすべて遅刻。変な團結だ。

Fには、自殺とは何ぞや「とか」人生とは何ぞや「を真剣に論議しあうもいれば、俺は三年間に一度も掃除をしたことがない」と自慢している者もいるといつて、実際に多種多様な人間がそろつてゐる。こんな面が、明るいクラスのイメージを作つてゐるのかもしれない。

追いつめられた数ヶ月だが、クリスマス会を計画したり、卒業後のクラス会を計画したり、「灰色の生活」なんて忘れた生活を続けてゐる。

三一年F組

三一年F。ひとくちに言つて松高の「標本」かもしれない。松高の良さも悪さもすべて持ち合はせてゐるクラスだ。その「標本」ぶりを紹介しよう。

担任の三芳先生を親分としたとにかく底抜けに明るくのんびりムードのクラスである。三芳先生はとても歌がお好きで（しかもとてもうまい）、その影響だらうか、クラスには歌好きがそろつてゐる。（うまいとは限らない）そんなわけで、数人集まる必ずわめきあう。遠足などのバスの中でもそうである。かわいそうだが、こんな時ガイドさんは失業する。文化祭でもFはフォークソングを行つた。文化祭と言えば、「クラスのまとまり」が印象的だ。受験準備に忙しいところを多くの人が残つて練習を重ねた。出演者の数は三学年中最も多かったのではないだろうか。しかも、なかなかの好評を得たことは、苦労のかいがあり、皆のいい思い出になつた。文化祭での小道具である大きな星が五つ教室にはつてある。まるで「クラスの団結」の象徴のようだ。そしてまた「星に祈りを」と、入試必勝のお守りにもなつてゐる。

特集 ホーム・ルーム

今回（十五）のルクールでは、"ホーム・ルーム"という特集を載ることになり、私達は次のような順でこれを解説していきます。

- 1 プロローグ
- 2 ホーム・ルームの本質
- 3 ホーム・ルームの現状分析
- 4 ホーム・ルームの運営上の問題点とその解決策
- 5 ホーム・ルームへ各人、どう臨んだらよいか
- 6 エピローグ

1 プロローグ

"ホーム・ルーム"それは、私たち全校生徒の学校生活をよりよいものとする所です。そしてそれは、脆い小さな手動式の機械なのです。

「ある人は言いました。

「悩みは

若者の特権であり

悩みに若者を鍛え

「悩みが人間を大きくする」と

私たちは高校生です。そしてこの高校時代は人間として一番貴重な時代だと言われています。「ホーム・ルーム」というのは学校の

校則だけを話し合うだけのものではありません。固苦しいお説教を聞く所でもありません。なんとなく教室に集まつた若者達が、自分の悩み、怒り、そして喜びを大いばかりで話をする所なのです。大きな口をあけ、腹をかかえて笑いころげ回つたり、涙を流し声を出して泣き叫けぶべき所なのです。そしてこれから生きて行く未来の道をみんなで考え、探り出す所なのです。

私たち編集委員は、前回（14）の特集において『黙認』という問題を考えました。そしてこれがいかに重大な事か、そして、この世の中の問題が、すべてこれに含まれている事を知りました。そして残念なことに「ホーム・ルーム」までもがそうなのです。生徒会の自治活動の不活発は目を見張るばかりです。またその不活発は、年たつごとに生徒会のすみすみまでも浸透しています。私たちはもう一步も引く事は出来ません。この一步を引いたら、組織までもが破壊されてしまうからです。

私たちは、このような現状を手をこまねいて、黙認することは出できません。私たちの限りない力を恐れずに、ぶつけていこうではありませんか。隅でぶつぶつ言つてもなんの力にもならない。先頭に立つて進んでいこうではありませんか。

自動式の機械ならば、スイッチを誰かが押すとひとりでに働いて仕事をするでしょう。しかし「ホーム・ルーム」は、自動式ではなく手動式なのです。そしてこの手動式の機械を動かすのは、誰でもないあなた方一人一人なのです。これは、多勢の人々が動かせば快調に仕事を続け、能率もどんどん上がっていくでしょう。しかしこれをみんなが気にもかけずほんの少数の人々に任せたらどうなるでしょう。多分その人々は次第に疲れて、しまいには機械までも止まってしまうでしょう。

すなわち一部の生徒がいくら頑張ってみても、クラスのみなさん全員が協力しなければ、「ホーム・ルーム」は発展していくかないのです。「ホーム・ルーム」は一部の生徒だけのものではありません。あなた方一人一人のものなのです。

しかし現在の「ホーム・ルーム」の様子を見るべく、必ずしもみんなのものになっていないよう思えます。毎週五十分の時間もてあまり、席換えやつまらないことでやたらとつぶしているのではないかでしょうか。そして興味がない、感心がないなどと、ごく簡単にかたげづています。それはみなさん一人一人が、悲しむべき事ではないでしょうか。

「ある人は言いました。

「悩みは

若者の特権であり

悩みに若者を鍛え

「悩みが人間を大きくする」と

私たちは高校生です。そしてこの高校時代は人間として一番貴重な時代だと言われています。「ホーム・ルーム」というのは学校の

ホーム・ルームの本質を知っている人は何人いるだろう。その間に完全に答えられる人はいないだろう。ホーム・ルームは教育の一分野となつてゐる。では教育とはなんだろう。いや教育が完全に分つていなから、ホーム・ルームも完全に分からぬのだろう。こんなことを、いくら言つたところで、ホーム・ルームはよくならないので話を進めよう。この章では、おとなの人達、いや教育者達ですら、はつきり、理解できないという教育の中のホーム・ルームの本質を、定義づけようと私達編集委員は氣をはいた。結果は……やはりとむりであったか。しかし、私達は私達なりの頭で考えてみた（空論にならないように気をつけていたのだが……）以下がそれである。

ホーム・ルームとは

1 人間形成の場である。
個性をのばす所である。

2 人間関係を教える所である。

3 民主主義の社会に出るための一つの踏台である。

ホーム・ルームつていつたい何だろう？

というぐあいに、これらは編集委員が初めのころ考えた「ホーム・ルームの定義である。今みると非常に概念的であり、また空論

にすぎない……。と感じられる。

なぜなら個性や人間関係等を学ぶ所であると定義していたが、実際、個性とか、人間関係とかは、はなして何なのか、はつきりつかめていないし、また民主主義と口では軽くいうが民主主義もはつきり理解できない私達であるから、どうしても私達編集委員の考えた事は足が地についていなかつたということであったからだと思う。では現在私達は、"ホーム・ルーム"に対する考え方というと、

ホーム・ルームとは

1 高校生活がよりすこしやすくなるための場である。

2 人間形成の場である。個性を伸ばす所である。

3 人間関係を教える所である。

4 民主主義の社会に出るための一つの踏台である。

というぐあいに編集当初とまつたく変化ないのである。

しかし、なぜ前のかかげたのが、"本質であると"打ち出したかをこれから説明する。

2 人間形成の場である
3 人間関係を……である の説明
4 民主主義……である

1 ホーム・ルームの時間において私達は、そのホーム・ルームの一員として生活をし、一人前の人間と扱われ、人間の尊さ・平等をハダで感じることが出来る。つまり学校という小社会の場で成長し、この経験を通してこれから出て行く社会の踏台の役目をするべきであると思う。

2 実社会に出る私達にとって、社会構成や他の多くの事を知る必要があると思う。しかし社会構成等はホーム・ルームからでも学びとれる事ができる。その時、自分一人の考え方のみに固まり、自分が間違った方針で進んで行つても気がつかない場合が往々にある。それを防ぐため、より多くの人から意見を聞くという態度が必要となるてくる。こういうことのなか立ちもH・Rがしなければならないことの一つであると思う。

3 教学の公式や英語の単語をおぼえるという勉強のほかに。にもたよらないで、私達自身で考えるという態度をとるようにさせるのも、ホーム・ルームの役目だと思う。なぜなら、人間教育には、一、学校という所で終点とみなすものと、二、人間の生涯に渡つて行なわれるものとに大別され、私達には後者の方が非常にかけているから。

ホーム・ルームの本質をまとめてみると、ホーム・ルームに担かされている義務の一つに民主主義を教える民主主義を発達させるというのがある（何も民主主義をどうだこうだとするのではなく民主的な考え方を持った人を育てる）、この点が一番大切だと思う、またホーム・ルームの根本原理だと思う。

「生徒の自發的活動を通して、個性の伸長を図り、民主的な生活のあり方を身につけさせ、人間として望ましい態度を養う。」これ

が特別教育活動の主旨であるとウタッティル本もあつた。

最後に教育（ホーム・ルーム）の歴史を加えて、"ホーム・ルームはかくあるべき" "ホーム・ルームの本質" の結びとする。

歴 史

ホーム・ルームの発生、発達は教育の歴史の中では、比較的新しい物である。それでは、ホーム・ルームは教育の歴史の中でどのよううに発達してきたのだろうか。その歴史を簡単に取り上げてみた。

現在の教育は学校が整備され、その中ににおいて集団的かつ計画的に行なわれているが、学校のなかつた時代においても子供は、知識・技術・規範・習慣を身につけて、その社会に適応していった。原始時代においては、その民族、種族などの集団に日常必要な、生活態度・習慣・技術などを、特定の場を用ひず、生活全体を通して教えた。さらに、自然の力の恐ろしさから、神を祭り、自分達を自然の猛威から守ろうとした。その時行なわれる祭祀を伝えるために行う教育を重要視していた。

時代が進み社会構成が政治・経済の発達で複雑になると、武力によつて人々を統一するようになり、奴隸制度のもとに古代ギリシャのような古代都市国家の発達がみられた。都市の中において政治・経済上の権力を持つ人々の子弟は、高い知識と芸能を身につける事を求められた。さらに学習のために必要な施設が建てられた。

中世のヨーロッパでキリスト教が盛んになると、教育の場はキリスト教の教会、修道院などが中心となつた。しかし、物の考え方が聖書を絶対とした、キリスト教中心の物であつた。やはり、高い

知識は限られた一部の高い身分の者にのみで、それらの人々は個人指導を受けていた。一般市民特に職人は親方になるためにギルドの組織した都市学校へいって職を身につけた。

近世になってから、各國で国民の普通教育ということが重要視され、国策の中でも大きな問題となり始めた。それらの事から集団教育の場としての学校が確立され、それに共ない一人の教師が多数の生徒を教育する必要が出てきた。十七世紀に、能率と経済面からだけの学級という単位を、チエコスロバキアの教育思想家コメニウスが考案出した。しかし、実際に学級という制度が学校教育にとり入れられたのは十九世紀の末になつてからのことである。人文主義運動、宗教改革によつて教育は形態を確立していき、自由・平等の思想から教育の均等が望まれ、絶対主義の国家において、その制度が採用された。プロセインのフリードリッヒ大王が発令した一般地方学事通則は世界最初の初等教育令と考えられる。それに刺激され各國の教育制度は資本主義の基で急速に発達していった。

それまでの教育の行いかたは、一般的の教科書学習を中心としたやりかたであり、学校内の学級編成も学校の理面、授業の能率面の面はほとんど考えられずに行なわれてきたが、教師側のそれらに対する認識から二十世紀初頭にドイツで、学級編成に対する新しい動きが始まつた。「学級」という集団の中で行なわれる各種の教育活動の効果は、教科の固別によるよりもいつそう効果的である。」と、いう実験結果から、「生活共同体としての学級。」という考え方を中心に新しい運動として、教科学習を中心とした教育ではなく、生活指導、社会教育を学校教育を考え合せて行なつたのが、この新しい

動きであった。このような学級を中心とする活動の中に発生し発達してきた。特にホーム・ルームが盛んなるのはアメリカ合衆国で、ホーム・ルームの目標を「民主制度のもとで良き社会人として望まれる道徳性を、社会科における教育指導と、学校でのすべての経験を通じて育成していく。」としている。

日本の教育は、明治五年に学制頒布がされ、昭和二十年を転機として大きくかわった。戦前は道徳教育として修身科を中心に行なわれていたが、これは当時の国家主義の教育方針で行なわれ、画一的な物だった。當時においても生徒の社会教育、生活指導を中心とした教育を行なった学校があったが、それは一部の私立校に限られていた。戦後、日本の教育方針をアメリカ合衆国の「日本教育使節団」が調整に来日し、戦前の日教育方針の欠点を指摘した。彼らの指摘した点は、一、極端に中央集権化された教育制度。二、特権的な学校組織。三、画一的なつめ込み教育。四、官僚独占的な教育行手。五、非能率的な国語及び国学の使用。この五点を指摘した。そして、日本の教育方針は一変し、アメリカ合衆国の学校制度、教能論理をとり入れ目標を民主主義の確立とした。

そして、民主主義を確立するため、アメリカ合衆国の民主主義的論理が日本の生活指導、社会教育の基本方針となり、修身科を中心の道徳を生徒会活動、ホーム・ルーム、クラブ活動を中心とした特別教育活動に変った。

手。五、非能率的な国語及び国学の使用。この五点を指摘した。そして、日本の教育方針は一変し、アメリカ合衆国の学校制度、教能論理をとり入れ目標を民主主義の確立とした。

二章でいちおう、"ホーム・ルームとは何んぞや。"という問題点を出し、その解答らしきものを出した。
松高のホーム・ルームの現状はいったいどうなっているのだろうか。それがつかめると、二章の本質論と比較することができホーム・ルームをよりよい方向へもっていけるのではないか。"ということで、ホーム・ルームの現状調査を行なった。
現状調査の方法は十何項目かの質問を出し、それに対して解答してもらうというやり方で、質問は客観的なものと、書き込み的なものだった。
以下が松高ホーム・ルームの現状分析である。分析方法は一年、二年、三年、一ヶ月までまとめて四つに分けて行なった。

(ア) 一年

三百枚配布し返却されたものは二百三十一枚、返却率は一年生全体の七十七%であった。

問一 HRは必要だと思いますか。

- a 必要である。 八十三%
- b 必要ない。 十七%

議題の選び方が悪い。
議長の議事進行のしかたが悪い。
レクレーションが少ない。等々
又楽しくないし意義もないというのが一番多く大きな問題である。

だいたい四組の先生が指導なさっている事になる。

問四 先生の指導は必要だと思いますか。

- a 必要である 三十二%
- b 必要はない 六十八%

したがつて前項で先生の指導があるとあると答えた人達百五十一名の内八十五名までが、指導の必要はないと答えている事になる。その理由は

生徒の自主性を養うため。
議長がよくやつてくれる。
私達生徒の話の場であるから。

楽しいと答えたのは全体の十六名でしかない。それで楽しくない原因をあげて見ると、
特定の人ばかり意見を出している。

この間の答は、人によって感じ方が違うせいか、分かれている。
楽しいと答えたのは全体の十六名でしかない。それで楽しくない原因をあげて見ると、
いつも討論会ばかりである。

二章でいちおう、"ホーム・ルームとは何んぞや。"という問題点を出し、その解答らしきものを出した。

松高のホーム・ルームの現状はいったいどうなっているのだろうか。それがつかめると、二章の本質論と比較することができホーム・ルームをよりよい方向へもっていけるのではないか。"ということで、ホーム・ルームの現状調査を行なった。
現状調査の方法は十何項目かの質問を出し、それに対して解答してもらうというやり方で、質問は客観的なものと、書き込み的なものだった。
以下が松高ホーム・ルームの現状分析である。分析方法は一年、二年、三年、一ヶ月までまとめて四つに分けて行なった。

経験等を聞くのは役に立つ。

話が発展する。

まとまる。

先生の指導がないとHRが終らない。

内容が深まる。

ある程度の指導がなくてはHRに意見がない。

大人の考え方を聞くことが必要だから。等があげられる。

- a 自由に決めた方がよい。
b 実現はむずかしい。
c 全校の親ばくを深めるため必要である。
d 一ヶ月に一つのテーマでよいがやりたい。
e 実行不可能であるためいらない。
f 問題が新鮮でなくなるから反対である。議題はいつも身近で新しい方がよい。

問五 現在HRは二期制ですが、それをどう思いますか。

- a よい 六十一%
- b 悪い 三十九%

ここで気が付いたのは無記入者が非常に多く（五一名）“よい”についてあっても“何とも思わない”とクラスの半分以上も書いてあるところがあつたりする。及意見が全々でていない。言いかえれば二期制の意味のわかつていの人の多い事である。これは学校の組織全部について理解が足りないことにつながるものと思う。

問六 統一テーマ制について知っていますか。

- a 知っている 三十三%
- b 知らない 六十六%

知っている人は全体の三分の一でしかない。

問七 統一テーマ制をどう考えますか。

- a 知っている 三十三%
- b 知らない 六十六%

ほとんどの二年生は、ホーム・ルームの必要性を認めた。

問二 現在の松高のロング・ホーム・ルームをどの様に思いましたか。

- a 楽しいが意義がない。二十%
- b 楽しくないし意義もない。十二%
- c 楽しくない。十六%
- d 意義がない。十四%
- e 楽しくないが有意義。十三%
- f 有意義である。八%
- g 楽しく有意義。六%
- h ただ楽しい。三%

- その他 その時によつて違う。
全く討論会をやりたがらない傾向にある。
その時間の議題によつて違う。
終りになると楽しい。
別になんとも感じないし、その様な事は考えた事がない。

一年同様、二百枚配布し、百四十五枚返却。返却率は二年生全体の五十%であった。

(イ)二 年

- 問一 ホーム・ルームは必要であるか。
- a 必要である。八十一%
- b 必要なし。十二%
- c 無計入。七%

多くの生徒はホーム・ルームの必要性を認めている。しかしおよび性を認られていても、現在の松高におけるホーム・ルームを有意義だと考え、楽しいと感じている人はごくわずかである。有意義だと考へているとしても、その時間は少しも楽しくない。つまり自分達が望んでいるところのホーム・ルームにはなつていのういう生徒と、楽しい時間ではあるが、自分としてはその時間中に進行されて

等が出た。これは前項でわかる様に、統一テーマ制自体を知らない人が、六十六%もいるのであるから、意見も少数であった

問八 HRに対するあなたの考えを書いて下さい。

- ①基礎的な考え方 ②現状について ③これから希望 ④改善策の四つに分けられる。
①基礎的な考え方（問一に等しくその他に左をあげた。）
a 学校生活をする上に大切である。
b 人間的成長の役立つ。
c 人間同志のつきあいの場（？）
d クラスをまとめる場。

②現状について。

- a 先生が介入しすぎる。
b もつと人間形成ということに重点を置べきだ。
c 楽しくない。
d 協力が足りず議長一人で困っている。
e 自覚が足りない。

いる事が有意義であると思えないと考える生徒で大きく分かれた。もちろんこれは個人としてのホーム・ルームに対する考え方であるからはつきりとした傾向に持っていくのは少々困難である。特に“その他”的項にあつた意見の様にその時間に話し合うべき議題、あるいはその時の精神の安定状態によって違うという生徒が割合に多いのではないのだろうか。またアンケート外の意見としてホーム・ルームの今の状態は確かに不活発であるという意見が圧倒的に多い。

その理由は議長を中心としたいわゆるホーム・ルームの企画委員の非積極的な態度と、クラス生徒のホーム・ルームに対する無関心を非難した意見が多い様である。

その意見の一部

「私達のクラスの場合では、たぶんホーム・ルームの運営委員が

しっかりしていない事とクラス全体に活気がないからだと思います」

「現在のホーム・ルームは全く堕落している。みんなはホーム・ルームに對して関心を示さないし、また議長もそれに甘えてしまっている。私達のクラスのホーム・ルームは義務として動いているだけなのだ。これは一体だれの責任なのだろうか。みんながあまりにも無関心なのだから議長はやる気を起こさないしホーム・ルームの内容はつまらないのでみんなは関心を示そうとしない。」

「ホーム・ルームに對して氣を使う様になつたのが、まず感じた事は議長をはじめ、企画委員の人達はまるで自分には無関係の事の様に考へているという事だ。なにかといふとすぐ生活委員とか、怠慢だなどという文句ばかり、この一部の人のみが関心を持つてゐるというのではない。」

記した通り半分以上の生徒の意見として、先生の指導はうけたくないとこの事である。先生の指導の必要性を認める生徒の言い分も双方とも正しい判断によつて下されたのだと思う。しかしホーム・ルームは生徒だけの物であろうか。この問題はそもそもこの点から始まっている。生徒の自主性・意志のみにまかせ先生の意見を一つも取り入れないとしたのならば、その行為・考えは危険な色の強いものになる可能性を充分持つてゐる物にしていいに陥る事ではないだろうか。まだ私達の考へは大人から見れば決して完全なものではない。だからある程度は先生の助言・意見も取り入れるべきではないだろうか。

問五 ホーム・ルームの二期制について。

- a よい。七十六%
- b 悪い。十九%
- c その他、どちらでもない。何とも思わない。
- d 無記入 五%

松高のホーム・ルームは現在は二期制である。ほとんどの二年生は二期制の方に賛成意見が集まつた。

問六 統一テーマについて

- a 知っている。七十五%
- b 知らない。二十四%
- c 無記入 一%

私達はしばしば統一テーマという言葉を耳にする。まだ私達の知つてゐる範囲では松高では実施されていない様である(今年も“統一テーマ”は生活委員にかけたが否決された。)

問七 統一テーマについてどう思うか。

- a 今はまだやる必要はない。
- b 実行はむずかしい。
- c 大いに実施するべきである。
- d 松高生が一つの問題にとりくむのは良い事である。
- e 文化祭を活発にするために実施すべきだ。

“統一テーマ”は他校においてすでに、実施してきた。その発表の場の一つとして文化祭が行なわれるという事である。その学校の生徒をある方向に向けるという事がはたして良い事なのか、あるい

右記の意見は二年生各クラスの議長を中心とした企画委員の意見である。クラスの生徒を激しく非難しているところもあつたが、生徒の全部が全部そうであるとはいえない。アンケートの中には企画委員でない生徒の中にも真剣にホーム・ルームの事を考へている人もなきにしもあらず。ただそういう生徒が数少ないという前提条件のもとでの事であるが、松高の校風の一つとして、(これは決して自慢できる事ではない)“誰かがやつてくれるから、自分はやらない”という考への生徒が多い。こういう考へ方が直接とはいきれないが何かの形をもつてホーム・ルームの不活発という事に影を投げかけている様である。これはホーム・ルームのみにおいてではなく、他の面においてもそうなのだ。“誰かがやる”という一番良くな考へにとくく松高の生徒は甘えがちである。

問三 先生の指導はありますか。

- a ない。八十九%
- b ある。十一%

どの範囲までを先生の指導と見做したのかは個人個人の判断によるものであるが、この結果からはホーム・ルームの際には多少の指導もあるのだろう。

問四 先生の指導は必要だと思いますか。

- a 必要はない。六十六%
- b その理由、ホーム・ルームは生徒の自主性にまかせて欲しい。
- c 必要である。三十四%

は悪い事なのは言えない。私達がホーム・ルーム調査に回った学校の全てが今年はそろって統一テーマなるものを廃止してしまった。教ある生徒の考えをある時間において一方方向に向け様とする事は決して容易な事ではないだろう。ましてやここ数年不活発が叫ばれていた松高においてはたして統一テーマというものを、スムーズにかん入出来るものなのかなと考えると、その結果の有無にかかわらず、幾度もためらわせられる事なのである。

問八 ホーム・ルームに対する考え方。

- a もっと積極的になつて欲しい。
- b 六時間目に割り合てて欲しい。
- c 内容をもつと充実させたい。誰の為の何の為のホーム・ルームなのかもう一度考え直して欲しい。
- d ホームルームは貴重である。故にもっと有意義にしたい。

ホーム・ルームをより有意義に過ごしたいという気持ちはだれでもみな同じなのである。

ある意見

「私達は時おり、アンケートを取つたり、ホーム・ルームの話し合いの時間はグループ制にしたりして四十分ぐらい話し合いその後の十分でグループの意見を出す方法等は、一応成功していると思います。」

「前期はクラスの個人個人を知るために、ほとんどの時間をグル

ープに費してきたが、その場限りで終わってしまった。この事により感じた事はホーム・ルームの時間だけでなく学校生活全部でない。教ある生徒の考えをある時間において一方方向に向け様とする事は決して容易な事ではないだろう。ましてやここ数年不活発が叫ばれていた松高においてはたして統一テーマというものを、スムーズにかん入出来るものなのかなと考えると、その結果の有無にかかわらず、幾度もためらわせられる事なのである。

「生徒会は一単位のホーム・ルームを基として成り立っているの事がすぎるのではないだろうか。」あるクラスは、ホーム・ルームをより楽しくするために、討論会の形式をとる時は、グループ制を設けたり、席替えをしたりまた時によってはハイキング等を計画するとの事である。しかしそのクラスの「親睦」も「話し合い」もその場限りの物に終わってしまう傾向にある様に思える。楽しい状態、心から溶け合える状態はほんのわずかの間だけの事で、それも少しの時間が過ぎるときれいに忘れられてしまつてもとの通りの非積極的な不活発なクラスにもどつてしまふらしく、その様な事柄は後まであまり良い物としては残らずにかえつて悔みの種になつてしまふらしい。しかしそれを單なる後悔で終わらせてしまつてはなるまい。問二の項では松高のホーム・ルームを改善する必要性が充分要する事がはつきりと現われ、この事にかぎらずもつと反省を促される様な箇所が數多かつた。もちろん似かよつたりいろいろであつたがやはり全体として言える事は、普段はそういった行動を示さなくともどの生徒も、ホーム・ルームをより楽しく、有意義にしたいと考えそして向上させようと願つてゐる事である。

(viii) 年

三年も三百枚配布し、百三十九枚返却、返却率は三年生全体の四十六%であった。

問一 ホーム・ルームは必要だとおもいますか。

- a 必要である。 七十四%
- b 不必要である。 十二%
- c 無記入。 十七%

七割以上の人人がホーム・ルームの必要性を認めている。けれども今の状態を見るとそれは感じられない。心の中では必要と認めているにもかかわらず、ホーム・ルームの時間に自分勝手な態度をとつて議事の進行を遅らせたりする人が多い。松高生全体のふんいきとして利己的な面が多分にあるように思える。

問二 ロング・ホーム・ルームの時間はどうですか。

- a ただ楽しい。 六%
- b 楽しくない。 十六%
- c 有意義である。 九%
- d 意義がない。 七%
- e 楽しく有意義である。 十六%
- f 楽しいが意義がない。 九%

問三 ホーム・ルームの時間に先生の指導がありますか。

- a 先生の指導がある。 四十五%
- b 先生の指導がない。 四十六%
- c 無記入。 九%

問三の結果は個人の判断の相違で同じクラスでも票がわれていた。先生の指導というのはホーム・ルームの時間に先生のとるべき本当の姿をさしている、先生のとるべき本当の姿とは、ホーム・ルームはあくまで生徒が中心になつていくべきものだから、先生が生徒と同じような立場で参加する姿だと思う。そのような意味でこの質問を答えてくれた人は、はたしてどのくらいいるだろうか。

問三 先生の指導は必要であるとおもいますか。

- a 必要である。 五十四%

必要でない。

三十九%

- 無記入
その理由として
(必要であると答えた人)

時によつて必要。

先生の感想がほしい。

助言的立場なら。

私たちにはまだ子供だから。

ホーム・ルームは生徒の意見と先生の意見で成立するもの。

必要に応じてアドバイスしてほしい。

私たちよりも経験が多いので。

ある程度ひきしめる意味で。

(必要でないと答えた人)

尊敬するよう人がいない。

自分たちで計画をたてたのだからそれを自分たちの手で実行したい。

内職もできなきや、トンズラもできない。

くだらぬことに口出しすぎてよくない

生徒の生徒の為の生徒によるロング・ホーム・ルームであるべき。

生徒と同じ立場でホーム・ルームをするべきだから。

先生に振りまわされてしまうので。

五割弱の人が「必要である」と答えていて「必要でない。」

いるという結果になる。これはかなり良い数字だと思う。

問七 統一テーマ制をどう考えますか。

意見がたくさんあるので三つの立場に分けて整理してみると

(賛成者の意見)

- ・一つのことに対する各クラスの考え方をみるのもおもしろい。
- ・すばらしいと思う。
- ・意義深い議題を取り扱つたら良い。
- ・なんでも統一しようとするのは個人喪失だ。
- ★・实行するのがたいへん！
- ★・意義がはつきりしていない。
- ・必要だと思われない、もっとやらなくちてはいけないことがあるから。
- ・かたよつた感じがある。
- ・議題の選択が困難。
- （賛成とも不賛成とも言えない中立派の人）
・とにかく実験的にやってみては？

以上です。

ここでおもしろく思つたのは“賛成”とも“不賛成”とも言えない人がかなりいることです。それからある人からこんな意見が出ていた。“統一テーマ制”というものを皆がはつきりとつかんでいたために、自分勝手に解釈してしまつて、そのためには“統一テーマ

（必要であると答えた人）

時によつて必要。

先生の感想がほしい。

助言的立場なら。

私たちにはまだ子供だから。

ホーム・ルームは生徒の意見と先生の意見で成立するもの。

必要に応じてアドバイスしてほしい。

私たちよりも経験が多いので。

ある程度ひきしめる意味で。

(必要でないと答えた人)

尊敬するよう人がいない。

自分たちで計画をたてたのだからそれを自分たちの手で実行したい。

内職もできなきや、トンズラもできない。

くだらぬことに口出しすぎてよくない

生徒の生徒の為の生徒によるロング・ホーム・ルームであるべき。

生徒と同じ立場でホーム・ルームをするべきだから。

先生に振りまわされてしまうので。

だいたい七割以上の人が統一テーマ制というものについて知つて

間六 統一テーマ制について知っていますか。
a 知らない。 七十四%
b 知らない。 二十九%
c 無記入 六%

制についていろいろなことが言われている。だから委員会または他の機関の活動として“統一テーマ制”というものを説明する会を開いてほしい。この問題は重大なことだと思う。

間八 ホーム・ルームに対するあなたの考えを書いてください

- ・無計画に行なわれている。
- ・ホーム・ルーム本来の目的を果していない。
- ・内容のあるものをやりたい。
- ・行事が全部ホーム・ルームにあてられてホーム・ルーム本来の活動ができない。学校側もそのことを考えてほしい。
- ・話し合いの場とは思っていない、適当に遊べる場所と思っている。
- ・まとまつていない。
- ・協力的でないから自覚をもちたい。
- ・生徒間の交流として有意義である。
- ・全員が松高生だというプライドと愛校心がなければ、ホーム・ルームは形式的なものから脱皮できない。
- ・活発に討議ができるようになつてくるのは、時間も終わりに近づいたころなので時間がたりなくなつてしまつ。
- ・クラス全体が参加していいない。
- ・“有意義にすこすとはなんだ！” “ホーム・ルームの目的とはなんだ！” と考える者がいるようではホーム・ルームはまだまだである。
- ・文化委員会はホーム・ルームについてどんなふうに思つて

と答えた人と少しの差があつた。理由としていろいろな意見を書いたが、人によっては編集委員会ののしつた意見や真剣に問題を考えていないと受けとられる意見があつた。とても残念なことだと思う。

問五 現在のホーム・ルームは二期制ですが、それをどうおもいますか。

a 良い。 五十八%
b 悪い。 二十八%
c 無記入 十六%

(その他の意見)

・まだ他の状態になつたことがないのでどちらともいえない。

・とにかく別の方法にしたほうが良い。

驚いたことには、「二期制」とはどんなことかわからないという意見もあつた。ホーム・ルームは長い間二期制で続けられているのに、それを知らない人がいるとは、ホーム・ルームに対して無関心な人の一部を見せつけられたようだつた。

（その他の意見）

・まだ他の状態になつたことがないのでどちらともいえない。

・とにかく別の方法にしたほうが良い。

驚いたことには、「二期制」とはどんなことかわからないという

意見もあつた。ホーム・ルームは長い間二期制で続けられているのに、それを知らない人がいるとは、ホーム・ルームに対して無関心な人の一部を見せつけられたようだつた。

いますか。君たちがいくらガンバッテも押しつけ的ホーム・ルームでは皆いやがるだろう。

(四) 一～三年までのまとめ

以上がアンケートをまとめた結果です。最後にひとつの例として三年〇〇組の「後期ホーム・ルームの足跡」をのせてみたいと思う。今までいろいろな意見が出たが、そのような意見に匹敵する個所がだいぶある。参考になると思うので書くことにします。そしてもう一度私たち松高生のとってきた態度を反省してみたいと思う。

後期ホーム・ルームの足跡 (十月～十一月)	
★ 十月五日	後期計画立案案
★ 十二日	全員で世田谷区立赤松園於て(レクリエーション)
一九日	二六日 中間テスト(最終日)
二月 九日	二日から三日まで文化祭
十六日	講演会 「意志と学問」
二三日	勤労感謝の日
三十日	Xさんからの手紙
★	★はクラス全員で活動できたホーム・ルーム

今まで、一年、二年、三年と分けてきたがここでは松高全体の傾向を見る。

(アンケートの提出状態を言うと、一年、二年、三年と上へ行くほど少くなっている。)

ホーム・ルームの必要性を感じている数は一、二年は大部分、三年は七割くらいで、一年は、クラスをまとめるために、二、三年は、内容を発展させるために、それぞれホーム・ルームの必要性を感じている様である。

三年になって少し減っている理由の一つには受験勉強に追われて内職などをやり、ホーム・ルームを有効に使っていない事がある様だ。それに三年生はレクリエーション中にホーム・ルームの計画を立てている所が多く、これは本来のホーム・ルームの目的にはそぐわないわけである。

又、つまらない理由としてはどの学年も特定の人の意見ばかりである。

無計画でおこなわれている。

レクリエーションが少ない。

討論会ばかりである。

などがあげられている。

又、ホーム・ルームの現状については、一年、二年には「楽しくないし意義もない」と思う人が一番多い。三年生は、「楽しく有意義である」と思う人が多いが、その反面楽しくないと答えた数も同じ。

教あるのである。

理想的な「楽しく有意義」と答えた人は一、二年にはごく少数、ほとんどないと言つても良いが、三年生の六分の一ほどの人はそう答えている。この楽しい理由の一つには、レクリエーションを中心にして計画をたてたクラスが多いことがある。なぜレクリエーションを中心としたかというと、三年は多分に運動不足になりがちである

“受験勉強などで机に向う時間が多くエネルギーを発散させる場所ほしい”などのためである。

先生の指導は一年の大半分、二年の約半分があると答えている。しかしホーム・ルームの進め方などの指導は一年だけであって三年は受験についてなどの指導をホーム・ルームの時間に、なさるとか校外ホーム・ルームの計画の手続をして下さるとからしい。又、一年生のクラスの中には先生がいらっしゃらないとホーム・ルームが終らない等というようなところがまだある。

先生の指導が必要であると思う者は、三年生にもっと多く、二年、一年の順になつており、三年は指導というより、生徒と一緒になつて意見を戦かわせる様な状態を希望している。しかし一年生はまだ先生の指導が基本的なものであるため、自分達で自由にやりたいという傾向が強い。全体でいえば、「指導の必要はない」というほうがずっと多かった。

現在のHR形式、二期制について“よい”と答えた数は二年が一番多く、七割ほどであった。しかし、“他の制度になつたことがないからわからない。”という声が多く聞かれ、“要是内容であつて形式ではない”という意見もあった。又一年生の中には、二期制の意味さえわからないものが非常にたくさんいて、”あたり前のこと

として、考えて見たこともない”という者も多い。それでこの数字にはさほどの意味がないと思われる。

統一テーマについて知っている数は、一年で $\frac{1}{3}$ 、二年 $\frac{3}{4}$ 、三年 $\frac{3}{4}$ どの学年もはつきり理解していないらしい、二年三年は多くの人が知っているが、全然知らないという人が $\frac{1}{4}$ もいるということは、松高の自治に対する無関心、生徒会と生徒との連絡不徹底のあらわれだと思う。

この統一テーマについての意見は、一年には“実現はむずかしいのではないか”と言うのが多く、二年には、“松高生が一体となつて問題にとりくむのは良事だ”とか“文化祭を活発にするため実施すべきだ。”とか“文化祭の時のみやると良い”等の賛成派と、マンネリ化しがちであるから、とかまどまりがつかないから等の反対派に分かれた。三年は、現在の活動状態がわからないとか、意義深い議題を取り扱つたらいい、また、いいとは思うがまとめてやっていくにはむずかしい等、どちらにもつかない意見が多かつた。

ホーム・ルームについての意見で、一年生はクラスをまとめ、高校生活を楽しくするということをあげ、二年生は生徒の交流や意見交換をあげている。三年生は社会に対する問題意識の開発をあげている。

これらをみるとホーム・ルームに対する意見はさほど変つてはないが、高学年になるとやや段階的な精神向上がうかがわれる。一般的な意見として、ホーム・ルームの時間を六時間目に持つていきたいと希望した人がいた。

4 ホームルームの運営上の問題点 とその解決策

二章で本質、三章で現状を扱った。この章では、二章と三章との間に出来てしまっていたみぞ、つまり“理論”と“現実”とのみぞをどのようにしたら少しでも底の浅いみぞにすることができるか、欲を出せば、これの、かけ橋となることが出来るかを考えてみたものである。

多くの生徒はホーム・ルームの必要性を認めていた様であるが、今の松高のホーム・ルームの状態は、楽しい楽しくないにかかわらずあまり意義のないとの事である。強い言えればホーム・ルームの今の状態では、あつても無に等しいのである。この傾向は松高だけの事ではなく、私達が回った学校（千歳、千歳ヶ丘、明正）にも共通して言える事であり、聞くところによるところの数年間ホーム・ルームの不活発が叫ばれている様だ。何故ここ二十年近くにわたって行なわれてきたホーム・ルームが先を見せてきたのである。

まずこの問題に先がけて言える事は松高においても、他校においてもホーム・ルームのはんとうの姿、ホーム・ルームの正しいやり方を正確に理解している人の数という事から始まるのではないだろうか。私達は小学校においては「学級会」中学校では「学級活動」ど（ただし学校によってその時間の呼び方が違うが）言つた形で“特別教育活動”といふものを受けてきたはずである。ところが高校に入学したすぐから形式も小学校、中学校とは全く違うものであるし、すべてを自分達の手によって運営する事が、月並みなので、ど

の様に行つたらよいのかわからず非常に危険と思われる事を最初からやつてきただけであった。ホーム・ルームという事を明確に著してある書物も、これと言ふ物の数が少なく、先生のわざかのアドバイスとそれからあとは、生徒自身の判断という事にまかせられてしまっている。この様な状態がまた来年もそしてその次の年もと続ければいく事は良い事であろうか。“ホーム・ルームのあり方を著すべきである”と言うアンケートからの意見に私達は賛成する事を禁じえまい。

またクラスによつてはホーム・ルームの企画委員を設けているところが多い。本校の生徒会の規約には、ホーム・ルームの企画委員についてはこれと言つて諷刺ではないので、その企画委員の存在、重要性たるやあまりにも軽視されがちで、企画委員の本人達ですら自分の立場というものを忘れている。各クラスによれば、ホーム・ルームの事の多くの責任は生活委員の肩にかかる事とがで、生活委員はホーム・ルームの運営委員として重要視されそれがあまりにも重荷すぎる様だ。ホーム・ルームは二つの見方ができる。一つは独立したあくまでも一つの物であるという事、もう一方は生徒会の一部であり、そのホーム・ルームと生徒会を結ぶのが企画委員であるという考え方である。今まで私達が行なってきたホーム・ルーム前者でも後者でも考える事ができると思う。本校の生徒の考え方もそれそれ異なるであろうし、それに多分ホーム・ルームが発足した当時は前者の考え方一筋だったのである。しかし生徒会というものがある限りは決して後者の考え方は消去される事はあるまい。なぜなら私達全ての生徒は入学したその時から生徒会の会員になり学校というものと私達を結びつける一つが生徒会と称するところを禁じえまい。

ものであるから。前者の考え方を重要視する事も後者の考え方つまり生徒会といつても全く関心のない事とは言えない。後者の考え方でいけば松高ではホーム・ルームの企画委員といふものの存在が薄すぎてしまつていて、あまりにもホーム・ルームと生徒会とが離れてしまつてゐる様に思われる。よつて企画委員といふものに関してもう一度考えてみるべきではないだろうか。

ホーム・ルームはあくまでも話し合う場であると考える生徒、遊ぶものだと言う生徒と考え方はいろいろあるが、一年生は“話し合い”を好む様である（例えば“友情”とか“勉強”について）ところが多くの一年生は、その話し合いといふものをきれいな事としてかたづける傾向にある。“話し合う”という事をある意味では誤解しているらしく、上辺のきれいな事、その場限りの物に終わらせてしまうのが常である。その“話し合い”によつて相互を理解するとか人間性を高めるだとか言つて“楽しみ事”として行なつたがる。勿論明るい人間を造るのは結構、人間性を高めるのは良い事であろう。ところがその手段とも言うべきホーム・ルームにおいてこれは二年生だけでなく、三年生もそうであるがその場に臨む態度があいまいな生徒が多い、その様な人間が集まり、その様な態度で話し合ひを行ふ権利を持つてゐるのではないか。

ホーム・ルームを運営する委員にあたつている人達も自分達がどう様な立場にあつて何をしなければならないのかという事を自覚すべきである。ホーム・ルームをクラスの生徒達にうまく運べる様

以上の事から私達編集部は次の事を解決策として掲げる。

一 ホーム・ルーム専門委員の設立。

(各クラス男女各一名〔合計二名〕)のホーム・ルーム委員を選出し、委員長一名、副委員長二名、書記二名を主体とした専門委員会を設立し、その下に分会を設け、ホーム・ルームの専門的研究と執行にあたる。)

二 各クラスに企画委員会を設ける。

(クラスのホーム・ルーム委員を主体として企画委員会を構成し、人数はクラスで決める。)

三 ホーム・ルームノートを作り、クラスの交流を図る。

四 ホーム・ルームノートを作り、クラスの交流を図る。

五 学校行事や他の事でホーム・ルームの時間をむやみにつぶさない。

六 自主的にサークルを作り、生徒会活動に結びつける。

この章では、前(4)章の解決策でもらしてしまった、個人個人の態度を中心にして、ホーム・ルームの進歩というものを考えてみ

5 ホーム・ルームへ各人、どう臨んだら よいか

「いいんだろうか」一年生の女子が“ホーム・ルームについて”と“ホーム・ルームをこれからどうやっていったらいいか”についてこう言っていた。

「私のクラスのホーム・ルームは活発ではありません。自發的に意見をいう人が少ないので、議長から指名されたから発言するといふ人はいるようです。ホーム・ルームなどは必要がないと考えている人も少なくありません。今まで後期のロング・ホーム・ルームの時間を“ホーム・ルームの意義”という問題でごしてきました。

個人個人、自分の態度について反省したり、ホーム・ルームを活発にしていくにはどのようにしたらよいかいろいろ考えました。皆の意見を聞き、自分の考え方をまとめ、結局、最後に私が得たもの……。それはなんともやりきれない気持だけでした。私はその時こう思いました。私だけがカラ回りしている、皆は、私の方を向いて『あなたは何んでそんなにいつしうけんめいなつての』とたずねる。バカバカしい。私がいくらいつても皆はわかつてくれない。私の説明はヘタかもしねい、けれど私の気持を少しでもわかつてくれる努力はしてくれてもよさそうに、そしてしたいに皆のペースにまきこもれてしまつたのです。皆のペースにまきこまれたといふ表現はおかしいかもしません。その問題について考えたくないなつたのです。ある一部の人達と同じように黙つてホーム・ルームに加わっている状態です。私のような立場の人はかなりいると思います。自分の心をいつわつてはいけないと思います。例えば、自分

は非常に大切な問題である“と思つてゐるのに、自分には他のやるべき事が多くある、やりたいけれどもやることができない、だからやけつぱちな気持ちになつてしまつ。そして自分をいつわつてしまつたのです。ある一部の人達と同じように黙つてホーム・ルームに加わっている状態です。私のような立場の人はかなりいると思います。自分の心をいつわつてはいけないと思います。例えば、自分

た。

「私達には、ホーム・ルームへこう臨まなくてはならぬホーム・ルームでこうしなくてはならぬ。」という規則のようなものは何一つとしてない。また、私達はそれを作つてもいけない。

*

*

*

私達は週一回一時間、ホーム・ルームへこう臨まなくてはならぬホーム・ルームでこうしなくてはならぬ。」という規則のようなものは何一つとしてない。また、私達はそれを作つてもいけない。

また、『松高生のホーム・ルームに対する態度』けつしてよいとはいえないでしょう。私語は多いし、内職はする、はてはどこかにいつてしまふ人もいるようです。

ホーム・ルームという時間が与えられているのに、ただダラダラとすごしてしまふ。そんな状態が続いています。今の状態から脱皮しなければ、『ホーム・ルームの眞の姿』にもっていけません。ではどうしたらよいのでしょうか。この問題はとても、むずかしいのですが私はよくこたえられません。しかし私の考えられるところまで言ってみたいと思います。第一に自分自身のホーム・ルームの態度について各人が反省すること、第二に自分自身のホーム・ルーム役員の選出の時はシンチヨウにしてほしいことです。現状では立候補が少なく、推せんの形式が多く行なわれています。その場合、いやいやながら役員になる人がだいぶいます。でもいたん決つた以上、その人は週一回の大切なホーム・ルームをあずかることになるのですから自分の義務を忠実に果してほしいと思います。第三には各人が子供のころのような情熱をもつてほしいということです。子供はすばらしい好気心を持っています。私達はおとなによどれた面を少しづつ知つて影響されています。知つても影響されではないので

これらのことは、H・Rをこれからどうしたらいいか”という解決策になつていなかつたかもしれません。でも私はこれだけ考えました』……。

とどうだろう。皆さんも思いあたる点があつたのではないだろう

か。

私達も考えようじゃないか、どうしたらよりよいホーム・ルームをやつしていくことが出来るかを。

次にあげるのは「各人はホーム・ルーにどう臨んだらよいかという問題に対して、編集委員が考えた解答です。皆さんのクラスへ参考となれば願つてもないことです。

第一に私達がいる、クラスのチーム・ワークをよくしよう。

よく人は「ホーム・ルームはつまらない」とか「ホーム・ルームはやる気にならない」とかいう。以上の意見は、あまりにも自分中心の考へている人のものだと思う。

「やる気がない」という気持を持っている人が一人でもいると、もうクラスのチーム・ワークはみだれてしまう。ホーム・ルームをよくするには、今までの私達のような状態（自己中心）ではいけないと思う、自分のわがままをおさえて、チーム・ルームを作ろう。

第二ホーム・ルーム計画の下調べをしようではないか。

下調べなどと云うと、何にか授業の予習をやるようになりますが、そんなに固く考へないでけつこう、要するに、ホーム・ルーム計画にある内容の事を、自分達の頭の中で自分達なりに考へほしい。なぜなら、学校にはホーム・ルームのための教科書がないばかりか、ホーム・ルーム専門の先生もいない。とかく先生や参考書にたよりがちな私達にとってはこのような態度は必要な動作だと思う。また、このような態度が私達にはかけていたのではないだろうか。

のは、皆でたのしくすごせる、H・Rをやろう。

* * *

「私達には、ホーム・ルームへこう臨まなくてはならぬ、ホーム・ルームでこうしなくてはならぬ。」という規則のようなものは何一つとしてない。また私達はそれを作つてもいけない。

「ホーム・ルーム」の特集はここで終つてゐる。しかし不完全なものにすぎない。これを仕上げるのは、生徒会員みんなの力がなくては出来ない。

6 ホーム・ルーム

去年の生徒会誌ル・クールは不完全のままに一年を過ぎてしましました。それは現在の生徒会活動の状態を見ればよくわかる事です。今回のル・クールがもしこんな結果に終る事があつたなら、私たち編集委員は残念でなりません。このような事態が起こらない事を願いながらもう一度振り返つてみます。

第二章ではH・R「とは何んだろう」という事で、定義たるものを持せてみました。しかし結局はつきりしないまま終つてしまいまし

第三私達が、よくやるいいかげんな態度をよく考へてみよう。

流会の多い委員会、委員会に入つても、与えられた仕事をすらほつたらかず私達、ホーム・ルームにいたつては、それがつまらなかつたりすると、すぐ生活委員や議長の責任にする私達。今まで、私達はこのように、チャランボランにやつて来たのではないかだろうか、この際はつきり現在何をしたらしいかという自覚を持つべきだと思う。

第四ショート・ホーム・ルームをもつと大切にしよう。

八時三十分、チャイムがなる、と同時にクラスの大半が教室へかけこむ、それから十分間がショート・ホーム・ルームの時間である。この状態ではショート・ホーム・ルームはうまく行くはずはない（書いてる本人も常習であるが）このショート……の使い方いかんで、ローグ・ホーム・ルームもよくなると思う。

以上です。これら数項は完全に正しい解決策であると、私達は考えていいない。また、「きまりきったことをいうな」といわれるかもしれない。そうです。わかりきつたことをやりさえすればいいのです。

しかし私達にはそれができない。なぜなんだろう……。

現在のホーム・ルームを少しでもよくするには私達が提案した、わかりきつたことをやつてほしい。やらねばならないと考える。現状打破のため少しでも歩を進めよう。

・もうようではないか、いいかげんな態度は、そして私達は「現在何をしたらいいか」という自覚を持とう。

・もうようではないか。つまらないホーム・ルームをやる

た。（私たちの力のなさを最初から見せてしまつた。）でも、問題の定義というものがあまりにも大きすぎたのかもしれません。「H・R」はそれ一つを取つただけではとても定義出来るものではないのです。「H・R」は特別教育活動の一つであり、特別教育活動の一つの例にすぎない。こんなわけで教育という定義をしなければ本当の「H・R」定義は出来ない。しかし教育の定義となると私たちの資料ではとても困難でした。しかし私たちは、次のような結論にたつしました。教育の定義は法律でも憲法でもない。教育の実践の場である教室で、生徒と先生、被教育者と教育者の関係において定義されるものである。でもこの結論は正しくて、正しくないものでした。正しくないという事は、あまりにも抽象的でいろいろな考へが出来る事です。でも二つだけははつきりしました。教育者と被教育者は、人間関係においては平等である。ただ指導する者と指導されることの不平等は認めなければならない、しかし窮屈においてはあくまで個人を尊重しなければならない。もう一つは、教育というはる勉学の課程を修めることよりもっと深い意味がある。それは、神が人間を造つた目的かもしれないし、ある人が言うように、人間の尊さを打ち立てる事かもしれない。ただ私に言える事は、教育とは教科の学習におけるような一方的な教師のつめ込みによるのではなく、自由に自主的に、そして科学的、批判的にもの事を考へる能力を身につける事である。教師の指導をも受けながら、一つの問題について、個人的にまた集団的に、あらゆる多くの資料を自分の手で足で集め、あらゆる方面から研究し討論し、問題を解決してゆく事だと思います。そしてその能力を、生徒会にホーム・ルームにクラブごとに行動させるべきです。実践する事によつてその能力が自分の手

ものとなり実生活に応用されるのではないでしようか。その点で、現在の教育制度といふものと教育という概念についてもう一度考へる必要があると思います。

三章では、「H・R」の現状分析と意見をアンケートを資料として載せてみました。やはり前号の現状とだいたい同じ状態でした。小中学校にいるようなボス的な存在がいなくなつたせいかどうかはしらないが、みんなの先頭に立つて何かをやつてやろうとする人が実に少くない。隅の方でぶつぶつ文句を言い、ひやかす事によつて満足感を味わつている者が非常に多く、せつかくみんなの先頭に立つて何かしてやろうと考えている者もみんなの流れに簡単に流されてしまう。人間が大人になつたというのか利巧になつたというのか価値感が限定され、利己観念によつてすべてを評価してしまおうとする。テレビ・週刊誌・映画などの社会的産物の氾濫がこれを助長している事は否定できません。まして受験という大きな問題を抱えている現在、利己的にならざるをえないかも知れないのです。もし、そ

のような社会的問題（誰かが受験問題は経済問題といつて）によって自分の価値感が左右されているとしたなら、私たちはこんな不合理な事はないのです。今社会が解決してくれないので、自分たちの手で解決する他はない。まして「H・R」という時間を与えられているのだから、自分で自分の首をしめるような事はやめて、このようないい問題を熱心に話し合い、行動しようではありませんか。

員の大半は一年の女子で占められ、その人たちも特に生徒会活動に

参加している人たちではありません。ごく一般的な生徒なのです。無経験な者が考へた事もない問題を解決するという事は、不可能に近いと思います。しかしル・クールの改革を続けなければならぬ義務感のようなものと、何かを起こさなければならぬ今の生徒会の現状に直面して、たとえ不完全な小さな力だとしても、先頭を切つて活動する事を決意したのです。個人の決意は、生徒会との連体を意味すると思います。人間は未熟であり限界もあります。でもその限界を恐れずに立ち向つて行くのが若者であり、青春ではないのです。何も恐れる事はありません。自分の出来る限りの力をホーム・ルームにぶつけようではありませんか。!!

もう一度、ホーム・ルームの重要性を考えてほしい。



飲みたい……我らあと我らあの祖先が、血と汗をもつて守りい……

オオカミは訳のわからないひどく扇情的な歌をうたひながら、森の中を歩きまわつた。燃えるような森の木々は、その木洩れ日と一緒に、ひどくちかちかしてオオカミの頭にひつついた。

腹の中に石を詰め込まれ、井戸に落ちたオオカミは、そのまま地下水の層を通つて下水に流れ込み、川の出口の土管の金網に引っ掛かっているところを、清掃していたかわうそに救われたのだった。

オオカミは復讐を誓つた。あの正義の使者顔をした狩人から赤ずきんを奪つて、必ず喰いついてやる。そう思った時、オオカミの周囲が赤褐色に紅葉し、森は秋になつた。

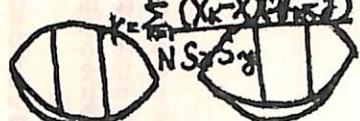
「かたき士を破りいて、民族の怒りいに燃ゆる島……ええい、あの狩人め、あかずきんの前で勝手におれの腹を搔回しやがつて、あかずきんは相当なものだつた……あああかずきす、あかずきん、酒が

おおかみ

その後

詩

鈴木 博史



「あかずきんだ」
「まあだ言つてやがら、今度はコンクリートブロックでも済まないぞ」
「狩人をやつつけりやいいんだ」

「かたき士を破りいて、民族の怒りいに燃ゆる島……ええい、あの狩人め、あかずきんの前で勝手におれの腹を搔回しやがつて、あかずきんは相当なものだつた……あああかずきす、あかずきん、酒が

「あいつはいい奴だよ」

「知つたことか、おれのこいびとを横取りしやがつて」

「二人ともしあわせそうだよ」

「うるさい、おれはあかずきんをあいしてたんだ、あの純粹過ぎる感受性と、その素直過ぎる現実への困惑が、結果的におれの

心情と理念の谷底に、逆向きの風を吹かせるんだ、おれはあかずきんを喰つてしまつ以外にないんだ」

「観念的だよ、あのこはかわいいんだよ」

「あかずきんを同化したい、固定したい、最も確実なものが欲しい、何もかも中途ハンパンこの周囲から、確實に自分のものが欲しい」

「おい」

「だのに一体何だつていうんだ、おれの腹の中からそれを引っ張り出しあがつて、おれに残つているのは砂、砂だけじゃないか、おれは絶対にやる、それしかないと、うさぎやねずみのことなんか知つたことか」

「おい」

「あ？……」

「おまえ、大丈夫か」

「は……」

「おまえ、大丈夫か」

「は……」

「おまえ、大丈夫か」

「は……」

オオカミの頭の中に、かわうその覗き込むような顔が、ぬるりと浸入してきそうになつた。それであわてて首をぶるんと振ると、またあのカサカサしたもみじの葉の音がした。

昔に幾度か森の仲間とやつて来たことのあるおばあさんの家

が、目の前にあつた。オオカミにとつては虫酸が走るように苦しい

家でもあつたはずである。とろんとした秋の屋下がりに、軒に吊した大根がゆらゆらと揺れている。いつも今時分になると、獣の途中の狩人がこの家に寄つていくのだった。オオカミは繁みの中から目だけを左右に移動した。

「こんちわあ」オオカミはびくんとして目を見張った。あの狩人

が、肩に束ねた毛皮と黒い鉄砲をかついでやつて来、奇麗に並んだ

障子のこちら側でおばあさんを呼んだ。

「おれは絶対に妥協なんかしないぞ、ブウフウウのおおかみとは訛が違うんだ」

「こんちわあ」とオオカミはびくんとして目を見張った。あの狩人

が、肩に束ねた毛皮と黒い鉄砲をかついでやつて来、奇麗に並んだ

障子のこちら側でおばあさんを呼んだ。

「畜生、何もあんな何もかも完璧で生活力のある男と結婚するこ

たないんだ。蹴飛ばしようもないじゃないか」

狩人は毛皮を軒に掛けた家中へあがり込んでいた。オオカミは

：畜生、何もあんな何もかも完璧で生活力のある男と結婚するこ

たないんだ。蹴飛ばしようもないじゃないか

意外に氣持がいい。ゆつくりした日差しと青い空があつて、オオカミは眠なくなつた。

「おれは一体何してんだろ」

オオカミの頭に、あのぬるりとしたものが甦りそうになつた時、狩人が出てきた。

「夜になつても囲炉裏の火を消しちゃダメですよ」

狩人は後ろ向きで家の中に首を突つ込み、声を出していった。そしてそのまま、四肢をバツの字に聞いていたオオカミの掌を毛皮の上から踏みつけた。

「ああう……」

オオカミは悲鳴を堪えた。日なたぼつこも何もなかつた。オオカミは狩人を憎悪した。狩人は気にもせずに束ねた尻尾をむんずと掴み、大きく円弧を描いて肩にかけた。オオカミの視界で天と地がひっくり返つた。二三発の薬莢の詰まつた大きなポケット、その先の地面、右目に近接する黒い銃口、赤いチヨック。

「このやろう、いまみてろ……」

オオカミの視界は激しく上下に揺れた。オオカミは銀色のガスライターを取り出し、目の前の尻に火を燈けた。首を縮める。

「バン！ バン！」

ひどく変な声を出して狩人は尻餅をついた。「バン！」

もう一発が炸裂した。オオカミは地表に投げ出された。狩人は飛び昇つた。

「おい、ズボンを脱げ、火がついるぞ」毛皮の下でオオカミは叫んだ。狩人はぐるぐる飛び回りながらズボンを放り出した。

着物の火は消えたが大きな焼け跡が残つた。オオカミはかまわずにそれを着込んだ。尻尾がバタンと出てしまう。

「まったく、氣障つたらしい」

オオカミは盛んに尻尾を気にしながら、水色帽子を頭に置いて歩き出した。

森の外れに赤い屋根のあかずきんの家があつた。濃紺過ぎるような浅葱色の空に、枯枝の柿が点々と対称している静かな日だった。作りかけの胡瓜の畠を抜け、オオカミは窓から内の様子を覗き込んだ。小奇麗で暖かそうな部屋では、あかずきんが一人で鍋を搔き回わしながらテレビを見ている。

「おれはかりうどだ、おれはかりうどだ」コンコン。扉を叩く。

「はい」

「お、おれ、かりうどだよ」

「あら、いまごろどうしたの」

扉が開き、シチューの匂いと一緒にあかずきんの大きな瞳が目の前に存在した。オオカミはひどくギクリとした。

「あ、あの、べんとう、落っことした」

「まあ変なの、寒いでしょ、今何か作る」あかずきんはパタパタと台所のほうへかけていった。白いエプロンとヘヤバンドと灰色のタイトスカートがオオカミの頭の中で凝縮した。

「おばあさんのところは」

「まあ声がした。オオカミは明かる過ぎる部屋の中を移動した。

「うん」

「そのお鍋はだめよ、今夜にならないとできないから」

オオカミは落ちつかないままテーブルに坐った。初めて見る恋人の部屋のよう、それはひどく刺激的だったらしい。

「のこりもん、おうどんよ」

「へ?……」

「も少ししたらタッキーが焼ける」

「は……」

オオカミは体の中側でぬるがしたように思った。このままだといいと思った。こういう部屋の少しずつでもまとまった条件に居る

あの狩人が、ひどく悲しかった。ほんの少しでもいい、おれにこの一片が確実に握んでもらいたいんだ、そう思った。同時に、それが極限のような気もした。夜まで持たないだろう以前に、おれはオオカミという事が、どうにも抜け切れない不安定さと恐怖を形成しそうだった。それは、オオカミがどんな時でもあかずきんに対しても感じたことだった。おれはおまえを喰つてしまいそうな

という一方的な命題が、オオカミの毛皮の底でいつまでも赤い口を

「あなたの口は、どうしてそんなにはあはあいつてるの?」

「君の胸は食ばんみたいだ」

「え」

「不安さ、何もかも逃げ出し、擦り抜けていくんだ、だから、そのため、君を喰べるためさ」

「…………」

小さな風が窓の外に掠れて、コトーンと音をたてた。うどんの汁がひっくり返ったのを覚えてる。テレビがチラチラする。それは怪物が出て来るのはなく、西洋の若い男達が声をあげているのだった。それも、暫く前から鳴り放しになっていたらしかった。

「Last night I said these words to my girl I know you never……」

凝縮の形が無理矢理に拡大され、オオカミの視界をくしやくしゃに歪めていくような気がした。いきなり扉があいた。

「ああらまあ」
あのばあさんがひどく威嚇的な声を張り上げた。
「おおかみ、腹の中に散弾を詰め込まれてもいいのか」
あんまり見ていられない格好をした狩人が、頭から水を滴らせて戸口に立った。長い銃口がぐうっとこちらに向く。

「あ、あのばあ、ひよこひよこ起き出して来やがった」
「あかずきんをかえせ」
「バアン！」

「うるせえ、あかずきんはおれのもんだ」オオカミはテーブルを

開けていた。そんな、自身の本性が今にもさらけ出されそう不安を、オオカミは死ぬまで執拗に固持し続けるのかも知れなかつた。

「毛皮と鉄砲は?」

「あ、おばあさんとこ、に」

「ふうん……」

オオカミは懊惱した。今はどんなにしてもうどんを食べようと思つた。しかしオオカミは生まれてこのかた、うどんなど食べたことがなかつた。

「たべなさい、今ね、とってもこわいの」

「は……」

「ゴジラみたい、とってもこわい怪物がね、でてくるの」

「う……」

オオカミは全身の血液が心臓へ逆流するような気がした。熱い。水色の帽子が視界の上部を破つた。

「どうしたの、ほうし、とりなさい」

その細過ぎるあかずきんの手が、オオカミの目の前に触れそうになつたと思ったオオカミはまるで怪物にでも睨まれたように、ガタンと立ちあがつた。あかずきんはそれを見上げた。

「あなた、としてそんなにやせてるの?」オオカミはもうだめだと思った。

「おれの体に何も残つてないからさ、砂だけなのさ」

「あなた、としてそんなに目ばかりひかつてゐるの?」

「不安なんだよ、君が、おれの視界から逃げ出してしまいそなのが」

オオカミはどこかの代詞をぐいぐい再生してゆくよなう気がした。



蹴飛ばし、棚に掛かっていたF.Nモーゼル30口径を引ったくると我武者羅に連射した。

頭蓋骨の中心で、雷が青白い火花を発してスペアクしたように思つた。それがさあつと遠退いていった。部屋の中心にオオカミだけが突立つていた。テレビの声が聞こえていた。

「I dont want to sund complaining But you know……」

オオカミはライフルを放り出して外に飛び出した。

森が目の前に存在し、静まり返った赤い屋根の内から高い声だけがした。

「I do all the pleasing with you Its so hard to……」

オオカミはその場を動かなかつた。どうにもならない行為が、自分の過去に刻みつけられたよう思つた。風が揺れた。柿の枯枝にカラスが一羽。空は冷たく青い。

「ああーあ

オオカミは、心臓の奥底から、ぽつかりあいた深淵に、ぎくんぎくんと何かが押し出されてくるような気がした。カラスが鳴いたのかおれが叫んだのか。

「あかずきんが、いない

ぐるんと回転する。

「タンパク質、だけだ、」

オオカミはいきなり走り出した。森の道は枯葉の音をたてる。オオカミはまとわりついた狩人の着物を引き剥ぎ、振り切つた。

「タンパク質だけだ、おれに残つてゐるのは、タンパク質だけだ

赤と黄色が、耳を切る冷たい森の大気の中でおオカミの左右の視界をびゅんびゅんと流れた。

おオカミは、止まつたその場で体中がぐにゃぐにゃになるよう気がした。

「おい」

「あ……」

オオカミは道の中途で急にくるりと回わってドサンと倒れた。はある荒い呼吸。

「どうしたんだ」

かわうそが覗き込んだ。

「当り前だ、成功したよう、もう狩人もあるのばあさんもいないよう、あ……」

「あかずきんは」

「喰つちまつた……」

「ああ、この馬鹿野郎……」

「う……」

「おまえがあかずきんをあいしてたなんてのは嘘だ、ばらばらのアミノ酸で、素直も、純粹も、あかずきんの人格も、何も、あるか」

「おれの方法が、違つてたって、言うのか、おい、よう」

「そうだ、人をあいして理解するつてことと、胃で消化しちまつてことは、訳が違うんだ」

「冗談じやねえや、もう生き返つちやこないんだ、おれの、全体を否定するようなこと、言うな、冗談じやねえや」

おオカミはばさっと跳ね上つて走り出した。

「おうい、まで」
さつきと同じに、おオカミは大きく暗転する森の木々がまるで山火事のようだと思った。ひどく歪な夕陽が、森の向こうの平地を通つてキラリと流れる。

「冗談じやない、何もかも方向が外れるんじやないか、不完全と中途ハンパばかりが、どうしてこんなにへばりつくんだ、何が正しい方法だつていうんだ、何でもいい、止まれ、とまれえ……」

おばあさんの家。大きな軒に白い大根。

「あかずきんが生き返つたって同じことだ、おれはまた結果の外れた行為をする、一体どうするんだ、おれにはその方法しかないつていうのに、どうすりやいいんだ」

井戸。おオカミは止まつた。周囲が熱く滲んだオレンジ色のは、焦点を失つたおオカミの目のせいいか、沈み掛けの夕陽のせいいか、判からなかつた。

「あかずきんが生き返つたって同じように忙しく呼吸をしながらおオカミを睨みつけた。

「馬鹿野郎、大馬鹿野郎」

かわうその大好きな目が、同じように忙しく呼吸をしながらおオカミを睨みつけた。

「ああ、まつたくお前は、馬鹿だ」

「馬鹿だ馬鹿だ言うな」

「おまえは英雄的な道化だよ」

「狩人みたい、気障なこと言うなあ、これが、おれのたつた一つの確実なものなんだ、おれの生きてるつてことが、おれの手で確実に結果を創る、残つた一つきりの手段なんだ」

「だれの命だ」

次郎

柴田道広

「お……」
「おまえが生きたいと思つて生まれてきた命なのかよ」
「は……」
「気が付いた時には、おまえが生きていたんじゃないか」
「自分の意識で存在したもの、自分が破壊するからって、何が完全だ、何が主体だ、おまえの生からして不完全なんだ、少しも確実じゃないんだ」
「なんだい、確實な、ものなんて、どこにも、ありやしねえじやねえか」

おオカミは冷たくなり始めた夕暮れの地面の上に、ヘタリと坐り込んだ。

「ぐるぐる循環するタンパク質やアミノ酸の中で、その間だけ成立するのさ、あかずきんも……不変の確証なんてないさ、切れ切れの真実の数片を、おれたちは引き擦つていくだけなんだ」

「畜生、ばかやろう」

おオカミはふつと立ちあがつた。

「行こう」

道の上空で陽が沈み切り、冷たい残光の中、紫紺色の空に森の頂点の木々が黒く突き立つた。

枝の間で小さく掠れたもみじの葉も、冬めいた晚秋の風に散り切つて、うさぎやねずみを捜がして歩くその後のオオカミの姿を、時折、サワサワと森を揺する風の中に見掛けた。

十月も終わりに近いある日のことである。一人の瘦せた十八、十九の若者が京の町を一望に見おろすある小高い岡の上にねころんで、ぼんやりと空を眺めている。身に纏つているものといえ、汗くさい汚れた上衣とぼろぼろにちぢれた袴ぐらいのもので、足にはどこかそのへんから拾つてきたような草鞋を一足つけている。一見して浮浪人とわかるが、頭の上にのせて立鳥帽巾や、腰につけている一ぶりの刀などから推察すると、どこかの侍らしくもあるが、その体格、容貌を考えるとどうもそうは思われない。何をするでもない、手を組み合わせてそれを枕にして、まるで気の抜けたようによかんと口を開けたまま、まるで眠つてゐるかの如く空を見上げている。そして時々そのけだるそうな視線をあたりへ投げかけるのである。彼の右手には戦乱で極度に荒廃した京の町が広がつていた。火灾のためであろう。ところどころに空白が見える。いよいよ秋も深まつたのであろう、紅葉した木々の葉が、時折り吹く、心もち冷ややかな風に吹きあげられて若者のまわりを飛んでゆく。

半時もしたころであろう。どこからともなく三十前後のがつちりした男が一人、風に吹かれてサワサワと音をたてている草の間をかき分けて若者の方へ近づいてくる。それはすぐ若者の視界にはいつたが若者は目をそらして再び何事もなかつたかのように空を見あげる。一問ほどに近づいた時、「次郎、起きろ。」「……。」若者は何も聞こえないかの如く返事をしない。男はしばらくこの若者を

穴のあくほどじつと見詰めていたが、とうとう我慢できなくなつたのである。やおら膝を折つて若者の胸ぐらをつかみ、グイと引き起こす。「おい、よく聞けよ、あしたの夜四ツ半いつの場所だ。

「……。」何とも答えない。「おい、聞いてんのか!」再び胸ぐらをつかんで若者を振り動かす。「ああ。」「わかったか。あしたの夜四ツ半だぞ。」「ああ」それきりその男は「フン」と捨てぜりふを残して立ち去つて行つた。しかしぬる若者は一こうに立ちあがる気配を見せない。いかにも暖かい小春日に酔うが如く、目をつぶつて氣持よさそうにねそべつてゐるだけである。なぜ次郎がこんなにねそべつてばかりいるのかといえ、ほかにすることがないからというわけでもない、ただこの男の趣味なのである。別段深い考え方をしているのでもない、ただ暖かい秋の陽を一杯に受けた気が遠くなるほど青い空を眺めているのが好きなのである。そして目をつぶると何とも言えない、自分がフワフワと空を飛んでいるような、そんな快感を覚えるのである。こういう時が次郎には一番楽しい貴重な時であった。この時にのみ彼は自分の存在を感じ、生命のあることを感謝するのである。それが彼の世界であつた。その時にはじめて雑駁とした心を静め、安らかな境地に達することができた。なぜかはわからないがわからぬままにそれは全く

二

貴重な時間であった。やがて日は西に傾き、長い影をうつしだす木々に吹く秋風はだんだん冷たくなつてゆく……。

翌朝次郎が目を覚ましたとき、日は相当高く登つていた。いつもならそれからしばらくの間寝床の中でグズグズして時間を費やすのが常であるが、明り障子を通して射し込む日光の明るさに誘われて、すぐに蒲団を畳んでぶらりと外に出る。

いくら荒れているといつても、京は京であった。往来をひつきりなしに通る牛車や、二三人の小僧を従えて足ばやに歩いている商人の姿、楽しそうに遊び回つてゐる無邪気な子供たち……。一時的な小康ではあるが、このような平和な様子を見ると、次郎は何か嬉しいような気がする。まだ朝めしを食べてないことを思い出して、とある飯屋にとび込む。数人の客がいたが、ふとこんなことばが彼の耳に留まつた。「……いやはやどうもぶつそな御時世でござりますなあ。なんでもゆうべもまた盜賊が出たんだそうで。幸い殺された人はなかつたそうでござりますが。一体検非遣使なんてえのは何をやつてるのでしようかねえ……。」次郎は一瞬ぎくりとしたがすぐに平静を装つて再び耳を傾ける。しかしそれきりその話はおわつてしまつた。

飯屋を出てしまはらく歩いていると大きな河が見えてきた。両岸近くには小石がその乾いた膚をあらわしているが、中央は満々とした水量をたたえていて、なかなか壯觀である。手前の岸に寄つた所

では数人の職人が友禅染めの水洗いをしているが、そのほかには遠く向こう岸にいくつかの山影が見えるだけである。上流遙かには、こんもりとした山々がその峰を延々とのばしているのが、ぼうつとかすんで見える。実にのどかな風景である。

適当な場所を選びだして次郎はきのうと同じような格好でごろりと横になる。しばらくはあたりに生えている雑草をひつこ抜いて両手に持ち、互に中を通して両方から引つぱつたりしてどつちが強いかなどと子供らしい遊びをしていたが、それに飽きてくるとこんどは草鞋の紐をほどいてその大きな足を川の水に浸し始める。さすがに秋の水は冷たいが、その冷たさがまた何とも言えない快感を覚えさせる。しばらくは水中を泳ぎまわる半寸ほどの小さな魚を面白そうに眺めていたが、突然自分が何日も風呂にはいっていないことを思い出して、小石に足をとられてよろよろしながら、川の真中のほうにそろそろと進んで行く。だんだん水位が上がって袴の先端が水につかりはじめたとき、ようやく自分がまだ着物を脱いでいるなかつたことに気が付いて大急ぎで岸にひき返し、こんどは禪一枚になつて再び川にはいる。寒さに震えながらだじゅうにパチャパチャ子供のやるるように水をひつかけると、今までの垢が全部すつきりとれてしまつたような気がして、「これで当分風呂にはいらなくともいいな。」などと身勝手な理屈をつけてひとり乙な気分に浸つてゐる。あまり長く川の中にいるわけにもいかないのでほどほどにして岸に戻つて着物を着る。さてこれからどこへ行こうかなどと考えても暇をもてあましている身である。どこへ行つたらいいかさっぱり見当がつかない。あれこれ迷つたがとう最後に、「ええ面倒だ。」とばかりに、さつきの場所に大の字にねころぶ。平和な

男である。

さんさんと降りそそぐ太陽や、水に浸つたあととの快さからうとうとといい氣持になつてくる。なかば閉じた瞼の隙間から、まつさおな空にまつ白い雲がゆっくり流れしていくのが目にはいる。時には一ところに集まり、時にはいくつも別れてそのたびにさまざまな形が現われる。そのうちにふとある雲がなくなった母親の顔に似ているなどと思うと、彼の心の中には幼い日の追憶が甦つてくる。

次郎は東国の大富農家に四人兄弟の末っ子として生まれた。そのときすでに長子矢助は三十の坂に近く、父の跡取りとして、りつぱに一家の重鎮となつてゐた。母は長い間の苦労に苛まれてきつたせいであらうか、彼をこの世に送り出したあと一ヶ月ぐらいで他界した。その後母の実家に引き取られて幼少を過したが、九才のとき再び生家に帰つて矢助の仕事の手伝いをしながらのんびりと育つた。上の二人の兄は一国の城主になることを夢にみて、故郷を捨てて他国に行つてしまつた。家に残つた者は矢助夫婦と次郎の三人だけになつてしまつた。やがて戦争がはじまり、長い間苦労して耕してきた田園は怒号する無数の兵士に蹂躪され、収穫物の一部はしばしば戦費という名目で擄取され、一家は貧乏のどん底に突き落とされた。彼ら三人は戦乱を避け、新しい土地を求めて各地を転々と流浪しなければならなかつた。

やがて次郎の心中には漠然とではあるが、自分たち一家を決して幸福にはしておかない強大な社会権力に対する不敵な反抗心が少しづつ頭をもたげてきた。「あにい、おらたちどうしてこんなに動

きまわらにやならんのかのう。おらたち別に人さまの迷惑なるんようなことはなんにもしていねえがのう。」ある時次郎は矢助にこう尋ねたことがある。「それがおらたちの因縁ちゅうもんだよ。」矢助はこう答えた。『因縁』。この一語は彼の心の奥深く巣く、彼の積極性をどんどんむしばんでいった。潜在意識となつて彼から一生離れるることはなかつた。

十七の春、矢助はある日次郎を呼びよせてこう言つた。「おめえ、ここにこのまま残つても結局はおらたちのように一生苦労して虫けらのように死んでいくばかりだよ。おらあ、おめえにはおらのようになつてもらいたくねえだよ。だからう、おらたちのことなどはなんにも心配することはねえから都へ行ってくんる。都さ行けば何とかなんかもしんねえからう。」もちろん、次郎にはだんだん老いが目立つてきた二人を残して自分だけ都に行くことは所詮できない相談だった。しかしそれでも自分の将来の姿が、矢助に象徴されているのを覚つたとき、彼は「うん」とうなづくより仕方がなかつた。都に行つて何になるというあてもなかつたが、とにかく都に行けばどうにかなると思って何かうしろめたさと誇らしさが入り混じつた中で、二人に見送られて京に出発した朝の情景がありありと目に浮かぶ。「しつかりやるんだぞ。」「うん。」「ときどきは帰つて頂戴ね。」「うん。」別れに交したささいな会話が、次郎の心には年老いた二人の顔とともに懐しく響いてくる。そしてこのことを思い出すたびに彼は今の自分といふものがむしょうに恥ずかしくなるのである。

はつきり言って彼には自分がなぜ生きているのか、また生きねばならないのかさっぱりわからなかつた。「心臓が止まつてくれない

れずに、荒乱を象徴しながらその姿をさらしている。裏通りになると犬や猫の死骸ばかりではない。時折りむつとする何か物が腐ったような臭氣をかもし出す堀立小屋があるとすればそれは「暗黙の公然」と化した人間の死体置場なのである。火葬するにも金がかかるせいか、町衆は死んだ人間の遺体を如何ともしがたい。そのまま家の中にはおつて置くわけにもいかないので、同じような仲間が四人五人と集つて、自分たちで作るか、あるいは人さまのものを勝手に拵借した堀立小屋の中に死体をまとめてうつちやつてしまふのである。ましてこのごろは悪性の伝染病が広がっているせいであろう、そのような堀立小屋はますますその数を増してゆく。どうかするとその伝染を恐れてか、まだ生きている者さえも着のみ着のまま、水と一食の食い物と一緒に投げ捨てられてしまう。そして野犬と化した飼犬が、そのどうもうな歯で堀立小屋の中でむしゃむしゃやっている様子はまさに地獄絵であつた。そんな京を覆い隠すように厚い雲がやがて月の光を避えざる……。

月がふたたびその光を地上に投げかけるようになったのはそれからかれこれ半時たつたころである。するとその明かりにぼんやりと照らし出されたある寺の墓地のうちに何やら多勢の動く影がある。戦火のため住職もいないのである、墓地の敷地には腰のあたりまで埋めてしまうような雑草が茫茫と生い茂つて、時おり吹くひやりとする秋の夜風にカサカサと音をたてている。ときどき思い出した氣味な静寂が京の町全体を支配している。長年の風雨に侵された墓石はだれも手入れをする者もなく、あるものは崩壊し、あるものは

から生きているのさ。」そんな気持だった。おそらく彼がもつと精を出して自分の仕事をまじめにやつてさえしたならば、今こうまで落ちぶれることはなかつたであろう。何しろ働くことがバカくさいと思つてゐるのであるから手のつけようがない。幾つかの仕事を転々としているうちにとうとう今のような状態になつてしまつた。時おり彼は自分をひつくるめた世の中すべてが何か大きな不透明な物質で覆われているのではないか、そう思うときがある。とくに空一面が雲で覆われてしまつて、自分を押しつぶそうとしているあの無言の圧力を感じて、ハッとする。そして憂うが彼を苛み、ますます無氣力を増長させた。けれども青空は全く別であった。今こうしてじつと青空を見詰めていると、それがどこまでもどこまでも続いているようで実にいい気分になるのである。どうとう次郎は眠りこんでしまつた。鳥のさえずりと川のせせらぎと……

三

同じ日の四ツ頃である。少し前に西南の空にその輪郭をあらわした三日月は、ときおり一すじの暗雲にその光を遮えぎられながらも、荒廃した人灯もまばらな京の町にその冷ややかな光を投げかけられる。夜の京は日中とはうつて変わつてひどく荒れているように思える。往来には、人の死骸こそなかつたが犬や猫その他の動物の死骸を見るにはものの半町と行くこともない。ときどき蠅や蛆がとまつてこの世のものとも思われない臭氣を四方に発散しているものもある。人々が灯を消しているのは盜賊を恐れてのためらしい。空白と化した広い敷地の土には焼けただれた瓦や柱などが何の手も加えら

横に倒れ、卒塔婆は大部分文字がかされている。花や線香のたてられた形跡のある墓は稀である。遠くに目をやると、何か松明の光であろうか、それが秋の冷気にゆがめられ、まるで戦火の犠牲になつた無幸の生命のうらみの権化の人魂のよう見える。幾つかは実際人魂であるかもしれない。

どうやら二、三十人はいるらしい。この一団はしばらくの間がやがや雑談をしていたのであるが、座長格らしい者が現われるとすぐに静かになる。月が顔を出すたびにその赤銅色の顔がボーッと浮かびあがる。みなくましい肉体をもつた偉丈夫ぞろいである。腰にこそ刀をさしてはいるが、その乱雜な衣装や、こんな夜更けに墓地でひそひそやつていることなどから考へると、どうも尋常の人間ではなきそうである。その中に一きわ寄せて身すばらしい若者が次郎であった。「虎三、おまえは二十人ばかりを引きつれて裏門からはいつだからな。簡単に破れる。できるだけ早く表門へまわれ。七、八人は藏をねらつても構わん……。」低いが気魄のこもつた熱っぽい口調で一人の男が矢つぎばやに命令をくだしている。その男を二重三重にとり囲んで手に手に梯や柵や檻などを持つた豪傑たちは緊張した面持ちでその男の話に耳を傾けていた。最後に「……わかつたか、これでおれの話は終りだ。わからんことはないな。よし、間違えるなよ。虎三、お前が最初に行け。」やがて寺の門からは數人ずつ一組みになつて、同じ方向に走つていくのが見られる。秋の夜風は木枯らしのようである。……

それからおよそ一時もした頃であろう。再び雲が切れて顔を出した三日月に輝かれたある商家の表門の前には十数人の死体が三三五五ちらばつてゐる。ある者は首を斬り落とされ、またある者は胸を一突に刺されそれおもいおもいの格好でお向けになつたり、うつ伏せになつたりして死んでいる。ぼろぼろの衣しか着ていないものもあれば、りっぱな服装をした檢非違使もある。少し前に盜賊と斬りあいをして追い払つたのである。奥の方からにぎやかな宴会の音が聞こえてくる。再び死体に目を転すると……。ある死体がわずかに動いている。刀を杖にして必死になつて起きあがろうとしているが、背中に負つた傷から考へると長いことあるまい。その男の顔が月の光にはつきりと写し出されたときそれはまぎれもない次郎であった。二・三回繰り返したが、とうとう息が絶えてしまつたのか、あおむけになつたまま動かない。いや次郎はまだ死んだのではなかつた。それでも自分の死期が近づいているのがはつきりわかつた。背中の傷が息をはくたびに大きく広がつていくようである。苦痛がだんだん高じてきて、とうとう意識が朦朧としてきた。

しばらくしてふと気が付いてみると彼は空中にふわりふわりと浮んでいた。幾度も月の光を避けきつたであろう暗雲がゆっくりと下へさがつてゐる。まったく動いているかどうかわからないぐらゐの速さである。四方に広がつてゐる灰色は空とも雲とも区別がつかない。霧や靄の中に迷いこんだ時のよう目にうつるものはただその灰色だけである。彼に無言の圧力を感じさせたあの灰色だった。上を見ると、おぼろげながら何かあかるい所が見える。次郎は自

分が何かそっちの方へ吸いこまれるのではないかなどとも考えた。灰色はやがて下降の速度を増しはじめた。だんだん天上の明部がその輪郭をあらわしてきた。何か小さな丸い形をしているようである。それでもまだ遠くにかすんでいてはつきりとはわからない。灰色は全く加速度的に下降速度を増してゐる。彼はまるで潮流の中の木片のようにものすごい速さで上へ上へと流されているような気がした。からだ全体が軽くなり、手はまるで泳ぐ時のように灰色を後へ後へと押しのけている。まるで一本の糸をたどるように彼は全身で上へ上へと登つていく。だんだん灰色は薄くなり心もち純白さを加え始めている。さつき見た暗雲が小指ほどに小さくなつたとき、天上の丸い物体はどんどん大きく明るくなつていく。彼はようやく恐怖を感じた。灰色はその下降速度を緩めそうもなく、目が回つてしまいそうである。彼は自分がこれと似た経験をころ寝の時にしたこと思い出した。やがてこんどはあたりが熱をもつてくる。速さ、明るさ、熱さはとどまることなく強烈になつてゆく。時間の観念が消えてしまった。次郎は目を閉じた。からだじゅうがどんどん熱くなつていて、血が蒸発してしまった。ますます熱くなつていった。からだの一部が溶け出した。もうどうにもこらえようがなくなつてしまつた。苦しまぎれに目を見開いた。ああするところを思い出した。やがてこんどはあたりが熱をもつてくる。彼は驚愕のあまり絶叫した。「これだ!これが出口なんだ!出口なんだ!」

ハッとして目が覚めた。ちょうどそのとき東の空には、彼の命とひきかえにか、真紅の太陽がまさにその姿をあらわそうとしている。

人の子への祈り

鈴 村 芳 和

る。やがてすべてが終わり、秋風に次郎の黒髪はゆらゆら悲しげに揺れている。いよいよ秋もたけなわである……。

ぼくは十八年の間、いやそれ以上、ねむつていたに違いない。今までのき事はすべて夢だったのだ。人の子として生まれたのも、水の清んだ、底に油の敷いてある川で遊んだのも、皆、夢だったのだ。ぼくのいるところは神の国。神の国には神以外住むことを許されない。その神の国にこれから住もうとしているぼくは、神の子でしかあり得ない。神は人と違つて何でも分る。だから自分の姿さえも見える必要がない。神の国とはどういう国か、それをここでいうのは実に無益なことだ。人の言葉で説明することはほとんど不可能であり、それを理解するのは更に困難なことだからだ。

神は何をしても、しなくても良い。生まれることも死ぬこともない。ぼくはこれから、この神の国で宇宙の果てを探し求める如く、生きていかなければならぬ。知るべきことはもう一つもない。ぼくの生命はこれから始まるというのに、もう終つてしまっている。だが、神にはそんなつまらない感傷などはない。神には楽しみも、喜びも、悲しみも、怒りも、悩みもない。すべてが球のように完全なのである。



苦悶

近藤 恵二郎



俺は孤独な人間だと常に思っている。いや事実、今の俺は孤独なのだ。べつに孤独なんていうものが好きなわけでもないが、これが俺に最も適しているんだからならざるを得ないのだ。所詮人間というものは本来一人ぼっちのだから乱りに孤独を離れようとするが、俺は既に空しく散った銀杏を踏みしめ、治子のやわらかな胸の感触の殺那を再現しながら家へと向かって歩き出した。俺は治子への耽溺を喜こびながらも、そうさせない心靈を求めていた。

自分は又自分を信じられなくなつた。自分は生きている甲斐のない淋しい生涯を送つてゐる。

自分は又他人と話をするのがいやになつた。

無意味に口を動かし、心に響かぬ言葉を聞くのはいやだから。自分は孤独になりたい。しかし時々彼女の姿をみたい。

自分は淑しい涙の谷をさまよいたい。
涙の谷のみ自分には故郷の気がする。

—— 実録 ——

二期も後半になつた頃に席替えをすることになった。廊下側の連中が寒くつて仕方ないので、窓側の陽の当たる方にいきたいといふのであつた。北国からは雪の便りが届いていた今日、廊下側は寒いのはあたりまえで、俺は窓側にいたのでべつに寒さなどは気にしないはあつた。この席替えは俺にとって重大ことであると全く想像もしていなかつた。俺の前の席は三枝治子。彼女に今朝の電車の中で会い「おはよう」と声をかけられたのを思い出した。治子には全く孤独なんていふ酒れたものは持ち合はせていないように、ほがらかで、またなかなか清純そうであった。もちろん俺は声をかけられても知らん顔をしていたし、満員電車の中で美声を出すなどは考えてもそつとした。しかし、一目見た治子はすばらしく印象的で、自然と勝手だしとやかくどうこうと言う筋合いの事でもないの

(82)



「聴病ね。」

そうささやいたのは、あの清純な少女治子だった。治子はいつもとは変つていなかつたが、紺のセーラー服が真白な花に飾られた身体で俺を暖く包んでくれた。熱気の俺の額に治子の美しく、ふさふさの黒髪がどこからとなく吹いてくる微風に促されてやさしく鼓舞しているのが、体中に充されてくるのがはつきりと感じられた。俺は思わず治子を突き離し狂人のように絶叫した。

「いやだいやだ！早く帰つてくれ。」「どうしたの新井君。」

治子は俺の両手をしっかりと握り締め、狂つた俺にも驚きもしないで静かに口をきつた。

「さびしいのね。なぜあなたはいつも一人ぼっちでいるの。あなたは孤独でない自分を只すら孤独の世界に落とし入れようとして、他人から、この世の中から去ろうとしている。何かを恐れ、それを克服しようとして自分でみじめにみじめにしている。恐れてはいけない。恐れてはいけないんだわ。」「いやだ！いやだ！俺はお前なんかと口も聞きたくないんだ。帰つてくれれ。」

悲痛な声は涙を伴い、治子に激しく抵抗した。それつきり治子の姿はなくなつて、俺は一人、北風の吹く夕焼の空をじつとながめうなだれてしまい、虚脱と恐怖感が襲いかかってくるのが感じられた。

次第に消えていく霧の中に、何とも言えない嵩高な姿となつてはっきりと描き出された。澄んだ瞳が俺の五体をやさしい光で囲んだ。俺の体はしびれ、額には熱い汗がにじみて、一瞬その場に俯せになつた。

治子の声がかすかに耳に響いてきた。俺は思わず飛び上がり、あたりをあたかも飢えた猛獸が獲物を捜すかのように必死になつて見回したがどこにも治子らしい姿をみることができなかつた。自分の耳を疑つた。すると治子の声が前よりもはつきりと、あたりにこだました。ありつたけの声を出しきつて治子の名を呼んだが、あたりは北風にさびしく銀杏が踊つてゐるだけで人の姿は全くみられなかつた。

その後は何も覚えていなかつた。既に明るい朝日が部屋いっぱいにさし込み、俺はまだ開ききらぬ眼をこすりながら、夜みた夢を再現しているのだった。

いつもより早く学校に着いた俺は、人のまばらな校舎へはいろいろとした時、後から治子の声がするのに気づき、一瞬俺の目は治子に釘づけにされ、顔にかすかに熱いものが伝つたのを感じた。治子は「おはよう」の一言を言って、俺の見た夢などは知るはずもなく、口ずさみながら奇麗に整えた髪を乱舞させ階段を上つていった。

俺はその場に立ちすんで治子の姿がなくなるまで、正視していた。

——お前は孤独なのだ。お前は治子を愛してはいけない。お前の愛せるのは孤独だけで、人間など、まして治子などは愛してはいけないし、そんな資格もないのだ。
——俺は孤独だ。しかし治子は愛せる。いや現実に治子が好きだ。俺は治子が欲しいのだ。悪魔よ！ 俺に治子を与えてくれ。

——ダメだ。お前はもう孤独な世界から逃れることはできないの

ガヤガヤした人の騒々しさが俺の耳にはいつてきただ時、我に帰つていた。その中に長畑がいた。彼は、治子からかなり好意を持たれていた奴で、また彼も治子に好意を持っていた。そんな長畑の逞しい体を見て、みじめな俺に嫌気がさし、心の動揺は押さえることができなかつた。

その夜、俺は治子に手紙を書いた。差し出し人の名は長畑洋二。

「今日限りで俺は君と絶交する。理由はともかく。だからこれからは俺に声をかけないでほしい。さよなら、治子様」

俺がこんな手紙を書いたのは、かわいい治子を人間本来の姿、孤独に戻してやりたく、それに「孤独」を離れても陸な事しか起らないので治子と同じようにしたかったからだ。そうなれば治子も心に傷つかずすむからで、長畑から治子を奪い取ろうと思つたのではなかつた。邪念ではなかつた。

翌日この手紙を白い封筒に入れて、不安ながらもこつそりと治子の机の中に入れておき、それとなく治子のようすを伺つた。しかし治子は寝休みになつてもそれには全く気がつかず、不安は一層深まり内心気掛りでそれを取り戻そつかとも考えたが、教室は常に人がいなくなる事はなくその機会は全く見い出せなかつた。やがて六時限目が終了すると、治子の手には白い封筒が握られ、周囲を気にしながら静かにカバンの中にしまつた。俺は思わず嘲笑し、不安をも吹き飛ばし、治子が一步孤独の世界に落ちいる事を喜び、いささか満足感に満たされ、明日の治子の顔が早くみたかつた。

気持の悪い程、事が思つたとおりに進み、自分には計り知れない

悪魔が宿つて力を貸してくれたのだろうかと思うほどだつた。いつ

もとは異つた雰囲気を醸し出した治子は、さびしそうな投影を見い出させるのだった。二人の間でどういう現象が起つたのかはわからなかつたが、冷たい戦争が行なわれていることは、治子の態度でも、長畑のしょんぼりした姿でも一目瞭然だつた。これは後でわかつたことだが、長畑は治子に平手打ちをくらつたそうでかなり頬が赤くなつたということだ。小春日よりの日差しを受けて俺が妄想に耽けつて窓より外をながめていた昼休みも、彼はなんとなく元気がないようで、俺と同じように、既に裸になつた銀杏の小枝に止つて鳥に視線を合わせ嘆息をついていた。いつも一人でいる俺のようにさびしそうな奴を見つけると、やはり仲間ができて良かったなどと勝手に喜び、自分と同じような立場の人間が増えることを望んだ。しかし少なからず長畑への同情心もあつてか、俺は静かに長畑に視線を合せて、平手打ちをくつたという頬をのぞき込んで、校内に流れれる音楽に合せるかのように立ち上がつた。

戦争も長期戦かと半ば期待していた俺は、こう早く和解が到来するとは想像もしていらず、今朝からの二人には完全に平和条約に基きもの姿に戻つていた。その時、俺は意外な事実を知り自分の早合点を恥しく思い、慎重さが欠けていたことは認めざるを得なかつた。「従兄」が二人の間の関係で、他人とはとんど話さない俺にはこの事実は遠隔のことと、二人の親しかつた訳がここにあるとは知らず自らを誤謬の境地に落し入れてしまつてゐた。しかし、誤解が解けて二人に平和が訪れたのは、俺にとって運がよかつたのかもしれなかつた。やはり治子には孤独は無縁なものであり、自ら思つてゐる人間本来の姿は治子にだけは例外であることが望ましいのかも

はない。

ついに師走になり、恒例の校内クラス対抗駅伝マラソン大会の日がやつてきた。これは各クラス十人ずつ選手を選出し、一人三キロの合計三十キロを競うもので今回で二十四回目というおまけつきの行事であり、優勝クラスには校長杯が贈られることになつてゐる。俺達B組は十人の選手を決めるのになかなか決まらず、揚句の果て強引に反対もできない俺を十人のうちの一人に決めてしまい、出場しない連中は、

「無敵の十人！、校長杯を勝ちとろう。」と適当に言葉巧みに賞賛した。そんな事で満足な練習なしに本番を迎えた俺は不安に脅かされ、途中でダウンしたらどうしようなどと考えたが、晴れわたつた当日治子の可憐な姿をみたとき、多少ではあつたが安堵した。そして彼女に俺の偉力を、逞しさをみせつけてやろうと誓つた。もともと運動好き（中学時代まで）であつたし、足にもかなりの自信はあつて、高校にはいってから余りスポーツをしなかつたが、相当の線まで行くだろと自負していたので、競技が開始されるころには余裕さえ感じられた。また俺がおとなしくしていることをいい事にして、各クラスとも強豪を揃えた最終ランナーにされてしまつた。

小高い丘にある学校の付近のゆるやかな坂を除いては平坦な道が続いているマラソンコースは、学校の周囲を大きくまわり人数もまばらで、途中には左右が荒廃した畠がありのどかな田園を形成し、マラソンにはふさわしい道である。各地点には審判員も配置されスタートの発砲を待つなり、スタート付近に集まつた全校生徒の緊張の中で第一走者は準備体操に余念がなかつた。定刻十時に一年から三年まで二十四組の第一走者は一斉に一周三キロの道に不規

則な足音を残し坂を上つていった。時計が十時十分を少し回ったころ、トップの選手が坂をかなり乱れた呼吸で下つて、校門前で第二走者に受け継ぎ数分の間に二十四組とも無事第二走者へバトンタッチした。B組は一位に遅れること二百メートルで八位を確保し、第一走者の安原は額に滲む汗を拭いながら「疲れた。」と言つて更衣室の方へ歩いていった。その後も十数分おきに中継が行われ、レス

はいよいよ後半になり、俺は手足をバタバタさせレースを見守っていた。B組は期待に応えてか一度は十一位に落ちたものの第七走者は六位で第八走者に中継し、大詰めが迎えてざわめきは一層大きくなり、と同時に俺の焦慮感も比例して大きくなつて硬直した体をほぐすのに苦心した。トップとラストは約一周の差がつき第七走者のラストが中継してすぐに第八走者がほぼ集団を作ってきた。その中には六位だったB組の新月が浅黒い額に流れる汗を拭いながら力走しているのが見られ、中継点では結局三位で第九走者の長畑に受け継がれた。長畑はサッカーユニフォームの主将をしており、足には相当の自信をもちB組ではその他の誰れにも劣っていない。先頭は二・Hで二位は優勝候補筆頭の三・Gであった。治子は両手を胸にあてがい長畑が坂を上りきって姿が消えるまでみつめていたが、軽く足ならしをしている俺の方へ二・三人の仲間と一緒に近づいて「がんばって。」と激励した。しかし俺は知らん顔をして準備体操に没頭していた。長畑が出发してからの数分間は、クラスのほとんどの男女が俺に激励の言葉をかけていたが、なかには「もつと足の早い奴ならな」とつぶやく奴もいて、そわそわしている俺にとってそれは非常にショッキングであり憤怒させた。そして自分で自分なりに励まして治子の姿を捜したが、その姿は見いだすことはできず、スタート

前にもう一度治子に会いたくなつた。
俺が白線の上にまだ白いくつでしっかりと立ち長畑をじっと待つた。鼓動はさうに強まり、やがて起つたざわめきと同時に最高点に達した。ざわめきはもちろん第九走者が帰ってきたことを知らせ、俺は掌を握りダイナミックな走法で力走してくる長畑がトップであることをみいだした。

「新井！、頼んだぞ。」

長畑はぐっしょり濡れたたすきを渡しながらこう言って俺を励ました。俺は「おう！」とうなずいて、きれいに舗装されたアスファルトの道に飛び出した。二位の三・Gとの差は約五十メートルで三位の二・Hとは二百メートルの差があった。走り出すと冷静さが読み換えて、あの手紙の事が思い出され悪い事をしたなと思いつながら長畑の力走に報いて優勝を勝ち取ろうと思った。そして小学校の角を右に折れて畑にかこまれた一本道へはいると急に足に痛みを感じ、呼吸をかなり乱れてスタート当初のスピードはだいぶ落ちて一時は広がった二位との差は縮まるばかりであり、全長三キロのコースの中間で三・Gにトップを奪われてしまった。三・Gとの差はあせればあせる程ついてしまい、三位の二・Hにも二位の座を明渡すはめになり、ペースは完全に崩壊し、ただ苦痛だけが襲つた。三キロのコースも終わりに近づき、ゴールの見える学校前の坂では一位と二位と三十メートルの差がついて、俺は最後の力を出しきつたがその差は全く詰らないで結局三位になってしまった。スタート前の衝天は全くみられず、俺はガックリと肩を落し静かに更衣室へ向おうとしたところ、クラスの者が俺のまわりに、おつかない顔つきで集まり「残念だったな。」とか「惜しいな。」などと、同情と軽蔑の

「前略、ここに君に初めてのそして最後の手紙を書きます。恐らくこの手紙は私にとって十七年間の生涯の最後になるうと思います。ですから私の全てを、過去を告白したいと思います。

君は私を見て第一にさびしがりやで孤独な人間だと思うことでしょ。事実高校生としての間はそうでありましたけど、小学校、中学校の後半までは誰にも劣らなく活発であり、友人もかなりの數ありました。成績も上位だったし楽しい学校生活の中には孤独などと感じられ、はなを吸い上げた。コーラを一口喉にした時、校舎から会田先生が「新井！」と連呼しながら蒼白な顔して走つてきただ。

「新井。家から電話があつて」

「電話」

俺は不審そうに先生の顔を見て次の言葉を待つた。

「実は君の姉さんがたつた今病院でなくなつたそうだ。」

と治子はコーラをさし出した。俺は赤面して戸惑い治子の顔から視線をずらして言った。

「いいよ。」

「疲れただしよう。」

「うん。」

「これ飲んで」

と治子はコーラをさし出した。俺は赤面して戸惑い治子の顔から視線をずらして言った。

「いいよ。」

俺はうれしかつた。そしてこのマラソン大会に俺を選んでくれた奴の憎しみがうれしさに変つていた。治子の行為に感激しながら冷たいコーラを手にした時は、自分の目に涙がたまつているのがありありと感じられ、はなを吸い上げた。コーラを一口喉にした時、校舎から会田先生が「新井！」と連呼しながら蒼白な顔して走つてきただ。

「新井。家から電話があつて」

「電話」

俺は不審そうに先生の顔を見て次の言葉を待つた。

「実は君の姉さんがたつた今病院でなくなつたそうだ。」

と治子はコーラをさし出した。俺は赤面して戸惑い治子の顔から視線をずらして言った。

「いいよ。」

「疲れただしよう。」

「うん。」

と治子はコーラをさし出した。俺は赤面して戸惑い治子の顔から視線をずらして言った。

「いいよ。」

俺はうれしかつた。そしてこのマラソン大会に俺を選んでくれた奴の憎しみがうれしさに変つていた。治子の行為に感激しながら冷たいコーラを手にした時は、自分の目に涙がたまつているのがありありと感じられ、はなを吸い上げた。コーラを一口喉にした時、校舎から会田先生が「新井！」と連呼しながら蒼白な顔して走つてきただ。

「新井。家から電話があつて」

「電話」

俺は不審そうに先生の顔を見て次の言葉を待つた。

「実は君の姉さんがたつた今病院でなくなつたそうだ。」



混合したような言葉つきでまだ肩で息をしている俺に鑑察に言った。俺自身の結果には決して満足してはいなかつたが、相手と自分の力を考えればやむをえない事だと思い、そんな言葉も余り気にして皆からのがれた俺を後から呼び止めたのは治子であつた。

「おめでとう、表彰状よ。」

「うん……。」

俺は呆気にとられてあたかも優勝したかのようにうれしそうな治子をみた。

「疲れたでしょう。」

「うん。」

「これ飲んで」

と治子はコーラをさし出した。俺は赤面して戸惑い治子の顔から視線をずらして言った。

「いいよ。」

俺はうれしかつた。そしてこのマラソン大会に俺を選んでくれた奴の憎しみがうれしさに変つていた。治子の行為に感激しながら冷たいコーラを手にした時は、自分の目に涙がたまつているのがありありと感じられ、はなを吸い上げた。コーラを一口喉にした時、校舎から会田先生が「新井！」と連呼しながら蒼白な顔して走つてきただ。

「新井。家から電話があつて」

「電話」

俺は不審そうに先生の顔を見て次の言葉を待つた。

「実は君の姉さんがたつた今病院でなくなつたそうだ。」

「前略、ここに君に初めてのそして最後の手紙を書きます。恐らくこの手紙は私にとって十七年間の生涯の最後になるうと思います。ですから私の全てを、過去を告白したいと思います。

君は私を見て第一にさびしがりやで孤独な人間だと思うことでしょ。事実高校生としての間はそうでありましたけど、小学校、中学校の後半までは誰にも劣らなく活発であり、友人もかなりの数ありました。成績も上位だったし楽しい学校生活の中には孤独などといふものには皆無だったのです。

私の友人に中瀬明という男がいました。彼とは小学校時代からの友人であり、二人とも親友どおりであると互いに認諾しあい、友情という美しい絆でしつかりと結ばれていました。彼は生徒会の副会長も務め、ユーモアにも富んでおり誰からも好感をもたれ、そんな彼と親友である事を私は誇りとしていました。中学三年も二学期になりました。成績も上位だったし楽しい学校生活の中には孤独などと勉強に一息いれるつもりである日、映画を見に行きました。その帰

り道、買物客でにぎわう商店街を通り抜け、バス通りに出たのは、もう太陽が真赤に西の空を燃している時でした。その年の九月に嫁いだ姉が何の用事か知らないけど、私の家に行くつもりか、バス通りを横断しようとしているのが目にとまつたので、久しく会っていない姉の姿をみた嬉しさで思わず姉の名を呼び止めました。姉は通りの中央まで行きかけていたのですが、私の声に気づいたのか私の方に振り向き戻りかけました。とその時猛スピードで走ってきたライトバンは、あっと言うまに小柄の姉を宙に浮かせてしまい無惨にも道に強く投げ出したのです。姉はただちに病院へ運ばれ医師の必死の努力が実ってか命だけは無事とりとめたのですが、それから十日程して姉は元の姉ではなくなっていたのです。姉の言葉には常に非道い矛盾が伴ない過去の記憶も薄らいでいたのです。そう、姉は事故の際頭を強く打ったのが原因で精神異常になってしまったのです。私がもしあの時姉を呼び止めなければ姉はこのような姿にはならなかつたし、自分も苦しまずに入れたの全て自分に責任があり、自分はどのよう責任をとるか、いや責任をとるというのではなく彼に励まして欲しかったのです。ところが彼の言葉は意外で嘲笑しながら「きちがいか。」とつぶやき、そして「いつそ死んじまえよ。」と辛辣なものでした。

彼は冗談で言つたのかもしれません、私にとって残酷であるといふより他はないと思います。また彼はクラスの他の者にまで姉のきちがいを告げていたのです。私はあんなに信頼していた彼に裏切られてて下さる。

——お前が一番欲しいものは……
……姉
……そして
レモンのよう
爽やかな
治子が欲しい

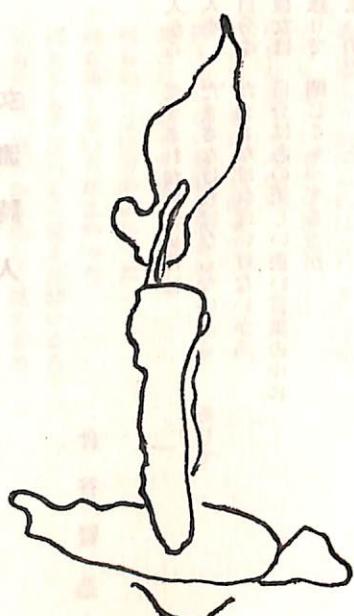
君を異性として欲しかつたのではなく、君の心、魂が欲しかつたのです。

マラソン大会の日、この日は私の高校生活で最も思い出に残るものだと信じています。あの時の君の好意（少なくとも私はそう感じた。）は短かい時間でしたが私にとって、幸福という言葉に置き換えられても過言ではなかつたと思ひます。どうもありがとうございました。これからも君の美しさを思う存分發揮してよりよい生涯を送つて下さい。

十二月初

三枝治子様

新井健



そして翌日、俺はこの世を去つた。

れた思いで、今後の交際を拒絶し、くやしさで私は数日の間は食事も思う存分喉を通りませんでした。私はやさしかった姉と親友を一度に失ってしまいましたが、私は姉を助けるため、いや姉のようないをなくすため医者になる事に決意し、友人ととの交際は全く拒否して一心に勉強に励み姉への償いをすることにしたのです。

こんな事は私を今の境地に落し入れたのですが、たった一つの望みの医者になることを断念しなくてはならなくなつた事が起りました。それは、姉の長い入院生活の間に姉の夫となつた人が民法の第七〇条『夫婦の一方は左の場合に限り、離婚を提起することができる。』とし、その四に『配偶者が強度の精神病にかかり、回復の見込みがないとき。』をもちだして、両親の必死の説得も無駄に終わり、離婚をしてしまつたのです。それは姉の入院生活の半年後で、その後入院の経費が嵩み、父の經營していた事業も借金のため使用人も二十人から三人に減り、私の大学への医者への望みは絶れてしまつたのです。医師への道を断念した私は常に姉が元の姿になることだけを祈り続けて今日まできました。ところが今日、君も御存知のとおり長い病院生活をしていた姉が突然（十日程前から姉の容態はおかしかつたのですが）二十四年間の短かい生涯を、その最後の二年は苦闘の末閉じてしまつたのです。私は前々より姉に死が訪れた際には、自分もそれを選ぼうと、いや選ばなくてはならないと決心していたのです。

私の十七年間の生涯を閉じるにあたつて、私は君に会えたことを非常に嬉しく思い、ある時は君と友達になつてもらおうかとも思ったのですが……。君に私の全ての事を打ち明け、そしてこんな自分を君に励ましてもらえたなど考えた事さえありました。

詩

白い朝に

高山裕子

女流詩人

倉谷賢造

雪の日の包むような静けさも
春の訪れの嬉しさも
夏の午後のうなるような
むし暑いせみの声も

ある白い朝に
私は手紙を燃した。
遠い日の想い出たちを
細かく引きちぎって
火を入れた。
その燃える音は
私の心を咎め、
その炎の色は
私の心を怯す。

御所の芝生で跳ねまわった日々
加茂川の水で足を洗ったこと
花の寺の桜が散ってしまったこと
みんなぶつぶつ咳きながら
一握りの灰になっていた。

人から　だまされないためには
人を　だまさなければならぬから　そして
自分を　だまさなければいけないから
彼女は　自分はあの美しい狭い言葉の中に
独りで　閉じこもってる方が
よいのだ　と
泣きぬれながら　思うことがある
ときどき



心の休み場

しつまさみ

陶酔の赤鼻教師青い傷

蝶這いて、蝶の嘲笑、蜘蛛の巣に
かかるところが、自然の粹

夏の月　たこのひたいに　はえとまる

林の頂で、銀婚メメズが日干らびた

こおろぎが　木の根に転んでひげ折った

「蛙取りに行かないか」
「いこう」

「おにい——ちゃん！」
「ちがわい！よっちゃんとてんだ。」

過去

田村幸子

過去をふりかえるのはよしましょう。

とても悲しい過去だから……

小さな赤ちゃんから
こんな大きな十七歳まで

何も知らない無邪気な子から
おとなとなつた悲しい私

何も知らない方がよかった

何もかもすばらしく見えた幼いころ

でも今は、何もかも悲しく見えるの
過去をふりかえるのはよしましょう。
私は、まだ十七歳だから



万歳!! 学力テスト中止

竹内 新一

・十一月二十二日、文部省は、小、中学校全国学力テストを来年は中止する、と発表した。同時に、四十四年度から新方式によるテストを実施するということも発表した。思えばここ数年、テスト過剰

時代という叫びを中心、現在の教育制度の欠陥についてあまたの問題が提出され続けてきた。教育をする立場の人と教育を受ける立場の人達が一体になって、行なわれた。現在の教育制度への反対運動が急激に上昇したと思われる今年に、その根本的改革の第一歩として、小、中学校全国学力テストが中止されたことは大変喜ばしいことである。今、過去の自分を振り返ってみると、この不完全な教育制度の犠牲となつた僕の姿が、さまざまと浮び上がって来る。

僕の頭が狂い始めたのは高一の二学期からである。勉強は勿論の事何もかも「やつても仕様がない。」という考えが頭の中に固着していく、毎日ぶらぶら過ごしていた。生きている事さ嫌えになり、死ぬ事ばかり考え続けた。その頃の日記を読み返すと凄まじいものである。「台風よ、何故御前は僕の肉体を、その莫大なエネルギーでさらって行ってはくれなかつたのだ。」とか、「ああ、真裸でこの大地に突き刺さり、粉々になつて死にたい。」だとか。その状態が約一年ばかり続いて本当に「もうどうにでもなれ。」という気持になつた。しかし幸い、自殺もせずに、今では狂う前の自分以上の僕に成つている。この頃に成つて、あの様に狂つてしまつた原因を追求してみると、それは、教育制度に対する僕の内在的反抗とみる事ができるのである。

僕が行なつてきた中学時代の勉強は、テストの為の勉強にすぎなかつた。深く考えもせず、唯暗記、暗記だった。美術や音楽の鑑賞

までも暗記した事には、今さらながら呆れてしまう。だからテストでは良い点を取つた。周り中そういう人間ばかりだつたから自然とそこに競争心が生まれた。そして益々暗記に専念し読書もしなくなつた。中三の九月に僕が、クラスでどうしても抜けなかつたI君に勝つた時、彼は言つた。

「竹内、やつたな……。」

その時以来僕は変り始めた。それまでの勉強が味氣無く、無意味な物に思われ始め、すべて変えようと務めた。そんな中に高校に失敗し、松原へと流れ込んで来たのである。

高校へ入つて何よりもまず決心した事は、中学の時できなかつた事をしようということだった。映画へいつたり、旅行したり、クラブへ入つたして、人間として生きようとした。勉強においても然り人間としての勉強方法でやろうと試みた。しかし暗記の技術が染み込みすぎている僕の頭脳は、それを簡単に使える能力は無に等しかつたのだ。欲望と現実とのアンバランス、そこに狂つた原因が有つたのだ。

学力テストの中止は、無限に大きいベクトルの基本ベクトルにすぎない。まだまだ、改革されるべき所は無数に有る。現在の年輩の教育者達は、現在の学生の学生らしからぬところを非難する事しか能は無い。原宿族を取り締まるだけで、その原因を追求しようとはしない。実際により良い教育制度を生み出すのは、僕達なのだ。僕達が、不完全な教育制度の下で教育された、その経験を活用して、それをよりすばらしいものに、本当の勉強ができるように改革することが必要なのだ。僕達の子供が、僕達と同じ様な苦しみしか経験できないとしたら、人類の進歩などという事は、単なる辞書的意味としてしか存在しないのである。

昭和四十一年十一月二十六日



とである。すみきつた冷え冷えとする靈氣を腹一杯吸いこみながら読書・音楽。近來は健康の都合上、主として読書。樂器を弄ぶことが少くなつた。

社会 英語 石井 健吉

たのしみは生けるしるしであり、生甲斐ですね。見知らぬ土地への旅を第一として、読書・観劇・めずらしいものを食べる事等々……

国語 大和久鈴江

よみ上げる出席簿の名に生徒らみなのはいとほがらなる返事さく時。
こんなこというとほんとう?つていわれそうですがほんとうなんですか。

数学 未松 茂久

たわむれに囃美をまねて
たのしみはかつてをしほし生徒らのよこせし文を手にしたるとき

卒業した諸君が訪ねて来てくれる事が一番楽しい。いろいろ話しあつて、先生の成長に驚き喜ぶことができるは教職者のみに与えられたものである。

校長 井上 速雄

ほどよく固まつた上にうすく積つた雪の上で自己流の回転をするこ

教頭 飯塚 正

読書 現在は主として隨筆類
スポーツ やることは出来ないが 館覽は大好き

数学 三谷 初子

社会 外川 秀二

美術 長沢 久敏

保育 佐藤 竹次

家から学校迄毎朝歩くこと一凡そ三十分——これが此頃の楽しみ。平凡で申訳ない。疲れぬ秘決は三里にきゆうをすること。

さんざんこづらした卒業生が元気な便りをくれたり尋ねて来てく
れで話し合うときや、山から拾つてきた石や木を眺めて思い出を追
うとき。

一、意欲ある学級で授業をすること。

二、古本屋で珍らしい本を探すこと。

社会 坂本 夏男

英語 高田 俊文

楽しみは、草花の種が芽を出すのを見ること。花ひらくときよりお
もしろい。

国語 青池 秀二

家庭科 弓家田芳子

『校内くまなく整頓されて、ホコリは毎日サッパリ払い、床には紙
くずひとつもなくて掃除大臣ご満悦』と云う日の一日も早く来るこ
と。

化學 大島 信六

数学 井田 米造

化学の授業を通して明るく皆が成長していくこと。
子供達がどのように育っていくかがたのしみです。

保育 邦高登志子

国語 林 亮

『校内くまなく整頓されて、ホコリは毎日サッパリ払い、床には紙
くずひとつもなくて掃除大臣ご満悦』と云う日の一日も早く来るこ
と。

国・書 森 善男

国語 田村 良一

新年 たのしみは 親子そろって元日に 語り合いつつ 餅祝う時
たのしみは 水茎のあとさわやかに 思いのほかによく書けし時

数学 中平 長治

国語 佐藤 仁男

「楽しみは」とはなんとも浅すぎる。「六十字以内」とは没個性的
も甚しい——などと、自由にもの言えることは、楽しいことだ。

国語 富増 寿男

数学 宗内 昭春

生きもの（動植物、わが子、教え子）を育てることその成長

生物学 中平 長治

数学 峰 孝之

一、生きもの（動植物、わが子、教え子）を育てることその成長

生物学 中平 長治

地・物 三芳 瑛

二、息子が元氣で成長し社会に役立つ人になること。

地・物 三芳 瑛

三、ドライブ中エンジンが快調で、うまく乗りこなせること。

数学 石川 伸一

物理 鈴木 萬英

何事も忘れ一つのことに熱中出来るものを持つている時が一番楽し
い。

数学 石川 伸一

物理 鈴木 萬英

山の中に静かな湯があれば、朝早く湯につかって、少し酒のんで、
郊外に引越して、花を咲かせたり、木を植えたりできるようになっ
たことです。さしあたりそれだけ。

国語 齋藤 仁男

保育 寺本 正誼

山の中に静かな湯があれば、朝早く湯につかって、少し酒のんで、
それから、山の色が変わっていくのを見たい。（正月の夢）

釣りに行く前の準備。地図・時刻表を調べたり。竿の手入れ。
仕かけを作ったり、釣り場の状況等あれこれ想像……。現実には行
く機会が少なく釣りだより・ニュースを読むだけに終つてしまふの
だが。

民族自決の原則によって、ベトナム戦争が一日も早く終るために少しでも自分が役立っていると思ったとき……。

ル・クール編集委員会

物 理 加藤 巧吉

静かな山を歩くこと、とくに人けのない雪山を滑りながら歩くことは音楽はクラシックから歌謡曲までなんでも好きです。

深山幽谷の中で独り盃を傾けること——ただし目下病後で禁酒の身なれど——

社 会 西山 章

深山幽谷の中で独り盃を傾けること——ただし目下病後で禁酒の身なれど——

英 語 橋本 秀夫

たのしめは、春休み、夏休み、冬休み。

特に今年の夏休みは……父親になれる予定。たのしめですね。

家庭科 玉置 文子

たのしめは、目標に向って一步一步近づいていくとき。

社 会 永浜 先義

元の教え子が立派な社会人となっているのに遅延して、酒をくみかわし語りあう時。

図 書 山田みち子

旅行すること。暇とお金があつたらいつでも。今年の夏は、沖縄に行こうかと計画中だが、どうなることか、これ又楽しみである。

二 名称
松原高校に保存されているル・クールは十一号、十三号、十四号のみです。それ以外の号は一冊もありません。生徒会にも図書館にも保存されていないのです。したがつてル・クールがいつ創刊されたのわかりません。ただ機械的に計算して二六年ごろではないかと推察するだけです。

過去の二号から推察して生徒会誌といつてもどちらかというと文芸雑誌に近いものであつようです。生徒会活動に関する記事が過去二号にはないのです。

十四号は、文化委員会内にル・クール編集委員会を設け、文化委員会と一般の有志によつて編集にあたりました。編集に際し編集委員会はル・クールの歴史を調べましたが前記の状態で皆目つかめなかつたのです。そこで独自に生徒会誌についての判断に関する討論を行ひ生徒会誌を“生徒総会を最高機関とする生徒会の雑誌”と判断しました。そして、その結論と、過去の出版物の保存がないことかあまりにも仕事の量が多すぎます。

こうした過程のもとに第十五号の編集が新学期よりはじまりました。昨年の編集委員の結成は十一月、そして発行が六月になりました。もちろん本来なら発行は三月です。新しい試みは特集を加えた結果、編集員の活動が非常にいそがしくなりました。それ以前の号であれば生徒からの作品をあつめそれを清書し指定するという事務的な作業ですんだでしょうが、特集は編集委員一人ひとりが自分の頭で考えなければなりませんでした。それだけに多くの資料を分析し文を書く作業はなまたいてはなかつたのです。その結果発行が三ヶ月もおくれてしまつたのです。そこで、今年は去年の経験から新学期早々に編集委員会をつくり準備をはじめました。しかし、その多くが文化委員会であつたため、文化委員会のもう一つの大仕事文化祭の執行に人手をとられ、九月から文化祭までの間ほとんど活動ができませんでした。

そして今年も昨年に統いて冬休み返上の強行軍でした。事実ル・クール編集委員会は年末の二九日から三日までの六日間以外採点期間と冬休みの全部を登校し編集にあたつたのです。慣れない一年の編集委員にはこれは非常に大きな負担でした。みなさんが休みを楽しんでいる間にも編集員は必死でこれにあたつたのです。編集委員の一人ひとり相当の犠牲を払つてゐるのです。委員会として一番心配

のは学業の面での問題です。委員会は自宅できることは持ちかえるようにしたりして時間のロスをなくすなど柔軟な方法をとりましたがそれでも負担の大きかつたことは事実です。

ル・クールを今後十四号を新しい出発点として生徒自身の自発的な生徒会誌として発展させていくつもりなら、現状の構成による編集方法を改めなければなりません。文化委員会がこれにあたるにはあまりにも仕事の量が多すぎます。

四 今后

ル・クール編集の現状は行きづまっています。たかが十数名の人間でしかもその多くは文化委員として文化祭の執行にもあたる。このような状態ではろくな仕事はできません。

ここで、文化委員会として提案があります。現在の文化委員会を文化委員会、文化祭執行委員会、生徒会誌編集委員会の三つに分化するのです。そして、各クラス選出一名以上の編集委員で委員会を構成し生徒会誌の編集を他の仕事から独立させるのです。そうすれば少なくとも少数の人間が夏休み、冬休みに登校して苦労することはないでしょう。選出委員による構成の委員会になればすべてうまくいくというわけではありません。少なくとも現状よりは個人の負担は軽くなるでしょう。十四号においてもこのことは指摘されましたが今年は実行できませんでした。そこで、来年度のために文化委員会の分化を規約改正によつて実行にうつすように準備しました。

松原高校の諸君、たとえこの規約改正が否決されても、ル・クール編集がいかに大変であるかを自覚し、多くの助力を編集委員会にさしむけていただきたい。

ル・クール編集後記

ル・クール十五号は、印刷を済ませ、今ようやく諸君の手に渡る事になりました。編集部として活動を始めてからおよそ九ヶ月我々にとつてあまりにも短かすぎた九ヶ月ではありましたが、その間にはずい分多くの事がありました。夏休み、冬休み、あるいは試験休みの最中、諸君がクラブ活動に没頭し歓喜の汗に若さをほとばらせている時、我々は幾度となくMEETINGを重ねたものでした。そして、その中で一番大きな問題になつた事はやはり、十四号（昨年のル・クール）からのル・クールが、今までの“文芸雑誌的な物”から“生徒会機関誌”として学校生活をより豊かにする様にと大きな変化をもたらした事でした。そのため多くの反響を呼び我々は今度はそれを作る側としてこの九ヶ月間ひどく迷いました。“文芸雑誌的な物”に戻すか、あるいは十四号からの“変化”をまた受けつぐかと、その結果は御覧の通りです。我々は昨年に倣い、編集部として現在、我々にとって一番身近で、一番の問題となつてゐる“ホーム・ルーム”をテーマに“特集”を設けました。諸君に少しでも知つてもうらうために、我々自身の問題を我々の力の及ぶ範囲で解決するためには、幾度となく書籍と取り組みまた外へ足を向けました。こうして諸君にこのル・クール十五号が手に渡された今、我々の仕事に一応ピリオドが打たれました。しかし「オワッタ。」という安全感よりは、むしろ、このル・クールが今度はどの様な形をもつて、松高に、生徒会にあるいは諸君に影を投げかけるか——という気持に我々は先立たれるのです。我々は少ないながらも、このル・クールをより向上させるために力を尽してきました。どうか余す所なく読み、何かを汲み取つて下さい。

編集委員

二年

佐藤 美紀子	吉田 忍
羽根田 修一	米矢 久美子

一年

扇谷京子	中根繁
鹿間美雪	榆井良子
鈴木暁	吉田忍
木裕幸	米矢久美子

以上あいう順

表紙美術部	中根繁
内表紙志津雅美	榆井良子
カット佐藤真砂子	吉田忍
顧問青池秀二	米矢久美子
和田彰大和久鈴江	以上あいう順

ル・クール（第十五号）	昭和四十二年三月三十一日発行
編集 松原高校生徒会文化委員会内	ル・クール編集委員会
発行 東京都立松原高校生徒会	
印刷 東京都世田ヶ谷区北沢一ノ四二九	
株式会社 富司見巧芸印刷社	
東京都新宿区早稲田鶴巻町二〇〇	

松高生徒会